

京都府遺跡調査報告集

第166冊

1. 山田黒田遺跡第4次
2. 出雲遺跡第15・16・18次
3. 久々相遺跡第12次

2016

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1) 出雲遺跡第16次調査地全景(北から)



(2) 出雲遺跡第16次溝 S D 3 (上が北東)



調査地全景(北から)

序

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは昭和56年4月に設立され、今年度設立35周年を迎えました。この間、当調査研究センターでは、公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を府内各所で1,250件行ってまいりました。

本書は、平成26年度に京都府建設交通部の依頼を受けて実施した山田黒田遺跡、平成24・25・26年度に京都府農林水産部の依頼を受けて実施した出雲遺跡、平成26年度に京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した久々相遺跡の発掘調査報告を収録したものです。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深めるうえでの教材として、ご活用いただければ幸いです。

発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都府教育委員会、与謝野町教育委員会、亀岡市教育委員会、向日市教育委員会、などの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの方々に厚くお礼申し上げます。

平成28年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 上 田 正 昭

例 言

1. 本書に取めた報告は下記のとおりである。

山田黒田遺跡第4次

出雲遺跡第15・16・18次

久々相遺跡第12次

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
山田黒田遺跡第4次	京都府与謝郡与謝野町下山田	平成27年7月21日～平成27年8月26日	京都府建設交通部丹後土木事務所	竹原一彦
出雲遺跡第15・16・18次	京都府亀岡市千歳町千歳他	平成24年11月8日～平成24年12月21日(平成24年度調査) 平成25年7月5日～平成25年10月16日(平成25年度調査) 平成26年5月19日～平成26年7月10日(平成26年度調査)	京都府南丹広域振興局	黒坪一樹 高野陽子 武本典子
久々相遺跡第12次	京都府向日市寺戸町久々相	平成27年1月22日～平成27年3月5日	京都府乙訓土木事務所	黒坪一樹

3. 上記3事業3遺跡とも本部事務所(向日市寺戸町)で整理・報告作業を実施した。作業については、調査担当者の指示のもと調査課企画調整係が協力して実施した。
4. 本書で使用している座標は、原則として世界測地系国土座標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。なお、現地調査及び過去の調査との整合性のため日本測地系を使用している場合もある。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。
5. 土層断面等の土色や出土遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」を使用した。
6. 本書の編集は、調査課担当者の編集原案をもとに、調査課企画調整係が行った。
7. 現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査課企画調整係主査田中彰が行った。

本文目次

1. 山田黒田遺跡第4次発掘調査報告	1
2. 出雲遺跡第15・16・18次発掘調査報告	15
3. 久々相遺跡第12次発掘調査報告	57

挿図目次

1. 山田黒田遺跡第4次

第1図 山田黒田遺跡周辺主要遺跡分布図	2
第2図 調査地位地図	6
第3図 第4次調査トレンチ・グリッド配置図	6
第4図 第4次調査グリッド柱状断面図	6
第5図 第1・2グリッド実測図	7
第6図 第3～7グリッド土層断面図	8
第7図 出土遺物実測図1	10
第8図 出土遺物実測図2	11
第9図 出土遺物実測図3	12

2. 出雲遺跡第15・16・18次

第1図 調査地周辺遺跡分布図	17
第2図 調査区・調査トレンチ位置図	18
第3図 第15次調査区位置図	19
第4図 第15次調査第1～3トレンチ平面・断面図	20
第5図 第15次調査第4・5トレンチ平面・断面図	21
第6図 第15次調査第6～8トレンチ平面・断面図	22
第7図 第16次・18次調査区配置図	24
第8図 第16次調査1・2区遺構配置図	25
第9図 第16次調査1区東壁断面図	26
第10図 第16次調査2区東壁断面図	27
第11図 第16次調査1区 竪穴建物SH1平面・断面図	28
第12図 第16次調査1区 土坑SK7平面・断面図	29
第13図 第16次調査1区 掘立柱建物SB6平面・断面図	31

第14図	第16次調査1区	溝SD3平面図	32
第15図	第16次調査1区	溝SD3断面図	34
第16図	第16次調査2区	竪穴建物SH11平面・断面図	35
第17図	第18次調査3区	遺構配置図	37
第18図	第18次調査3区	東壁断面図	38
第19図	第18次調査3区	竪穴建物SH10平面・断面図	39
第20図	第15次調査出土土器		40
第21図	第16次調査出土土器(1)	(土坑SK7・竪穴建物SH1・竪穴建物SH11)	40
第22図	溝SD3土師器皿底部調整・法量別内訳グラフ		42
第23図	第16次調査	出土土器(2)	43
第24図	第16次調査	出土土器(3)	44
第25図	第16次調査	出土土器(4)	45
第26図	第16次調査	第16次調査 溝SD3出土陶磁器類、須恵器、瓦	46
第27図	第16次調査	出土石器	47
第28図	第16次調査	出土遺物	50
第29図	区画溝SD3の検出地点と周辺地形		52

3. 久々相遺跡第12次

第1図	調査地位位置図	58
第2図	既往の調査地位位置図	59
第3図	西壁土層断面図	61
第4図	トレンチ全体図	62
第5図	トレンチ平面図	63
第6図	溝SD1土器出土状況図	64
第7図	溝SD1柱穴SP12平面・断面図	65
第8図	遺物実測図(1)	66
第9図	遺物実測図(2)	67

付 表 目 次

1. 山田黒田遺跡第4次

付表1	遺物観察表	13
-----	-------	----

2. 出雲遺跡第15・16・18次

付表1 溝SD3出土土器(瓦器・土師器以外)内訳表	42
---------------------------	----

付表2 SD3出土遺物観察表	54
----------------	----

3. 久々相遺跡第12次

付表1 久々相遺跡遺物観察表	70
----------------	----

図版目次

2. 出雲遺跡第15・16・18次

巻頭図版1 (1)出雲遺跡第16次調査地全景(北から)

(2)出雲遺跡第16次溝SD3(上が北東)

3. 久々相遺跡第12次

巻頭図版2 調査地全景(北から)

1. 山田黒田遺跡第4次

図版第1 (1)調査前全景(南西から)

(2)トレンチ掘削状況(北東から)

(3)第1～3グリッド調査状況(北東から)

図版第2 (1)第1グリッド中世遺構面(北東から)

(2)第1グリッド第7層遺物出土状況(北東から)

(3)第1グリッド下層調査(南東から)

図版第3 (1)第1～2グリッド調査状況(南東から)

(2)第2グリッド中世遺構面(北東から)

(3)第2グリッド下層調査(北東から)

図版第4 (1)第2～2グリッド調査状況(南西から)

(2)第3グリッド中世遺構面(北東から)

(3)第3グリッド北東壁面東端部(北東から)

図版第5 (1)第3グリッド下層調査(北東から)

(2)第3グリッド第7層遺物出土状況(北東から)

(3)第4グリッド中世遺構面(南東から)

図版第6 (1)第4グリッド南西壁面(北東から)

(2)第4グリッド下層調査(南東から)

(3) 第4-2グリッド中世遺構面(南東から)

- 図版第7 (1) 第5グリッド下層調査(北東から)
(2) 第6グリッド下層調査(北東から)
(3) 第7グリッド下層調査(北東から)

図版第8 出土遺物

2. 出雲遺跡第15・16・18次

- 図版第1 (1) 第15次調査地調査前全景(南部、北から)
(2) 第15次調査第1トレンチ全景(北から)
(3) 第15次調査第2トレンチ全景(北から)
- 図版第2 (1) 第15次調査第3トレンチ全景(南から)
(2) 第15次調査第4トレンチ全景(北から)
(3) 第15次調査第5トレンチ全景(北から)
- 図版第3 (1) 第15次調査第6トレンチ全景(南東から)
(2) 第15次調査第7トレンチ全景(北から)
(3) 第15次調査第8トレンチ西壁土層断面(東から)
- 図版第4 (1) 第16次調査第1区全景(空中写真、上が南西)
(2) 第16次調査第1・2区全景(空中写真、北から)
- 図版第5 (1) 第16次調査調査前状況(東から)
(2) 第16次調査第1区南半遺構検出状況(南東から)
(3) 第16次調査第1区竪穴建物SH1(南から)
- 図版第6 (1) 第16次調査第1区掘立柱建物SB6(南から)
(2) 第16次調査第1区溝SD3(南東から)
(3) 第16次調査第1区溝SD3 1区土器出土状況(南西から)
- 図版第7 (1) 第16次調査第1区溝SD3掘削状況(南東から)
(2) 第16次調査第1区溝SD3畦1断面(南から)
(3) 第16次調査第1区溝SD3 5区土器出土状況(南西から)
- 図版第8 (1) 第16次調査第1区土坑SK7(南東から)
(2) 第16次調査第2区全景(東から)
(3) 第16次調査第2区竪穴建物SH11(南東から)
- 図版第9 (1) 第18次調査調査前状況(南東から)
(2) 第18次調査第3区掘削状況(南東から)
(3) 第18次調査第3区北東部遺構検出状況(北西から)
- 図版第10 (1) 第18次調査第3区竪穴建物SH10(北西から)
(2) 第18次調査第3区土坑SK1(北東から)

(3)第18次調査第3区柱穴群(北西から)

- 図版第11 出土遺物 1
図版第12 出土遺物 2
図版第13 出土遺物 3
図版第14 出土遺物 4
図版第15 出土遺物 5
図版第16 (1)出土遺物 6
(2)出土遺物 7
図版第17 出土遺物 8
図版第18 出土遺物 9
図版第19 (1)出土遺物10
(2)出土遺物11
図版第20 (1)出土遺物12
(2)出土遺物13

3. 久々相遺跡第12次

- 図版第1 (1)調査地北部掘削前状況(南から)
(2)調査地中間～南部掘削前状況(北から)
(3)調査掘削中(北部より溝を検出、北から)
- 図版第2 (1)調査区全景(南から)
(2)柱穴群検出状況(南から)
(3)溝SD1・3～10検出状況(北から)
- 図版第3 (1)溝SD1(北から)
(2)溝SD1土器出土状況(北東から)
(3)溝SD3(東から)
- 図版第4 (1)溝SD4他(南東から)
(2)溝SD5他(東から)
(3)溝SD6(東から)
- 図版第5 (1)溝SD7(東から)
(2)溝SD10(南東から)
(3)溝SD10埋め土西壁断面(南東から)
- 図版第6 (1)柱穴P12・柱穴P15他(北東から)
(2)柱穴P12(東から)
(3)柱穴P15四分割状況(東から)
- 図版第7 (1)柱穴P12完掘状況(東から)

(2) 中間部砂礫堆積状況(北から)

(3) 調査完了状況(北から)

図版第 8 出土遺物

1. 山田黒田遺跡第4次発掘調査報告

1. はじめに

今回の発掘調査は、平成27年度主要地方道宮津養父線道路緊急安全確保小規模改良工事に伴い、京都府建設交通部の依頼を受けて実施したものである。

山田黒田遺跡は、与謝郡与謝野町黒田から下山田にかけて所在し、弥生時代から中世にかけての集落遺跡と考えられている。今回の調査地は、遺跡範囲のほぼ中心付近に位置する。

山田黒田遺跡は、昭和3年の山田小学校(現山田保育園)のグランド工事の際、住居跡と弥生時代から古墳時代の土器が発見されている。^(R1)平成14年度には、当センターが山田黒田遺跡の南西部、三戸谷交差点付近で発掘調査を実施(第1次調査)^(R2)し、古墳時代前期を中心とする流路を検出した。また、平成26年度には、京都府教育委員会による第2・第3次調査が今回調査地周辺(第2図)で実施された。^(R3)第2次調査(今回調査地の南西隣)では遺物包含層が検出された。第3次調査(今回調査地と一部重複)では、柱穴が検出されるとともに、遺物包含層が検出された。第1次～第3次調査は段丘裾の平地での調査であり、調査地北側の段丘部に集落の中心部が存在すると推察された。

現地調査にあたっては、京都府教育委員会、与謝野町教育委員会をはじめ、各関係機関、地元自治会、近隣住民の方々のご指導とご協力をいただいた。記して感謝いたします。

なお、調査にかかる経費は、全額、京都府建設交通部丹後土木事務所が負担した。

〔調査体制等〕

現地調査責任者	調査課長	有井広幸
現地調査担当者	調査課調査第2係長	中川和哉
	同 主査	竹原一彦
調査場所	京都府与謝郡与謝野町下山田62番地	
現地調査期間	平成27年7月21日～同年8月26日	
調査面積	53㎡	

2. 遺跡の位置と環境

1) 遺跡の位置と地理的環境

与謝郡与謝野町は、京都府北部の丹後半島の付け根に位置し、2006年3月1日、与謝郡の加悦町・野田川町・岩滝町の3町が合併して誕生した。丹波・丹後境の赤石ヶ岳(標高732m)を源とする野田川は、町域の中央部を北東方向に流れ、国の特別名勝天橋立の内海である阿蘇海に注ぎ



第1図 山田黒田遺跡周辺主要遺跡分布図(国土地理院「宮津・大江山」1/50,000)

- | | | | | |
|--------------|--------------|------------|-------------|-------------|
| 1. 山田黒田遺跡 | 2. 谷川遺跡 | 3. 平野池古墳 | 4. 山田西谷古墳 | 5. 山田薬師古墳群 |
| 6. 長塚古墳群 | 7. 聖谷古墳群 | 8. 坊ヶ谷古墳群 | 9. 陣ヶ尾古墳群 | 10. ホリコシ古墳群 |
| 11. シボラ古墳群 | 12. 滝谷古墳 | 13. ナコラ古墳 | 14. 新道古墳 | 15. 上山田休場古墳 |
| 16. ツーカイB古墳群 | 17. ツーカイA古墳群 | 18. 古宮遺跡 | 19. 枝ヶ鼻遺跡 | 20. 下畑遺跡 |
| 21. 梅谷遺跡 | 22. 霧ヶ鼻古墳群 | 23. 荒岡古墳群 | 24. 油田A古墳群 | 25. 油田B古墳群 |
| 26. 入谷西A古墳群 | 27. 須代遺跡 | 28. 銅跡出土地 | 29. 温江丸山古墳 | 30. 谷垣遺跡 |
| 31. 平野池古墳 | 32. 火口遺跡 | 33. 黒谷遺跡 | 34. 広川遺跡 | 35. 小峠古墳群 |
| 36. 滝谷古墳群 | 37. 蔵ヶ崎遺跡 | 38. 日吉ヶ丘遺跡 | 39. 蛭子山古墳群 | 40. 作山古墳群 |
| 41. 裏ノ谷遺跡 | 42. 明石愛宕山古墳群 | 43. 中上司古墳群 | 44. 後野円山古墳群 | 45. 馬岡遺跡 |
| 46. 尾上古墳群 | 47. 鴨谷東古墳群 | 48. 鴨谷西古墳群 | 49. 白米山古墳 | |

込む。野田川の北と南には標高300m内外の山地が広がり、山地の間は加悦谷と称される平地が形成される。町の中央を南西から北東に国道176号線が貫き、南は与謝峠を経て福知山へ通じる。東は若狭湾に面する宮津市に通じる。また、176号線から北に分岐する国道312号線は、三戸谷峠を経て丹後市に通じている。西は加悦奥峠、滝峠を経由して兵庫県豊岡市に通じる2本の府道がある。山田黒田遺跡は、176号線と312号線の分岐点から西に延びた312号線三戸谷交差点の北東側に広がり、遺跡の中央部を府道宮津養父線が貫いている。

2) 歴史的環境

加悦谷地域は古くから人々の営みが始まり、平地や丘陵部に多数の遺跡が分布している。縄文時代から古墳時代を中心とした主要遺跡を概観していく。

縄文時代は、早期の遺跡として旧加悦町城の有熊遺跡(縄文～平安)・嗎岡遺跡(縄文・弥生・古墳～近世)・滝岡田遺跡(縄文・古墳～近世)、金屋谷田遺跡(縄文・中世)、旧岩滝町の千原遺跡(縄文・弥生後期～平安)がある。このほか旧加悦町の須代遺跡(縄文～平安)・桜内遺跡(縄文～中世)で縄文土器の出土が知られる。

弥生時代は、旧岩滝町域では中期の土器の出土をみた千原遺跡のほか、野田川河口近くに後期の首長墳墓である大風呂南1号墓(一辺18m×27m)がある。大風呂南1号墓では、中心主体部からガラス銅・銅銅・ガラス勾玉を含む玉類、工具・ヤスが出土し被葬者は、地域を東へ導く指導者の一人とみられている。

旧野田川町域では、三河内地区の比丘尼城跡で突線鈕6区画装裱文銅鐸が出土している。その他の遺跡として、中期の方形周溝墓を検出した下畑遺跡(弥生～中世)、弥生～中世の土器の出土をみた古宮遺跡・谷川遺跡・亀山遺跡がある。また、加悦谷東部の段丘部にある寺岡遺跡は、中期の拠点集落の一つであり堅穴建物・方形周溝墓・貼石墓が検出されている。

旧加悦町明石地区所在の蔵ヶ崎遺跡(弥生前期・中期後半、奈良)で前期の水田関連施設(溝・矢板列)が検出されている。また、同地区須代遺跡では中期～後期の堅穴建物跡・環濠が検出された。また同遺跡背後の丘陵から、明治26年に流水文様の扁平鈕式銅鐸が出土した。日吉ヶ丘遺跡(弥生中期・古墳後期・中世)では、貼石墓・堅穴建物・溝を検出し、国史跡に指定された。

古墳時代に入ると、加悦谷周辺の丘陵部に多数の古墳や群集墳が爆発的に築かれるようになる。旧野田川町の山田黒田遺跡の周辺をみると、下山田地区背後の丘陵部に円・方墳5基からなる陣ヶ尾古墳群、円墳3基からなる坊ヶ谷古墳群、方墳10基からなる聖谷古墳群、円墳の山田西谷古墳が存在する。段丘上では、円墳の平野池古墳は両袖式横穴石室をもち、玉類・鉄刀・須恵器台付壺が出土している。これらの古墳や古墳群は、山田黒田遺跡との関連性が指摘されるところである。

旧岩滝町域では、前期古墳として25～30m規模の日ノ内古墳がある。礎床を有する長大な木棺直葬埋葬主体部3基があり、四獣形鏡・玉類・鉄製武器・工具、歯が出土している。続いて大風呂南1号墓の東側に直径30mの円墳の神人車馬画像鏡などが出土した丸山古墳が築かれる。

古墳時代の旧加悦町域は丹後地域の中でも有力な豪族を有していたとみられ、地域を代表する

盟主墳が東側の丘陵部に多数築造される。前期では、白米山古墳は全長92mの前方後円墳(前期中葉)である。墳丘は2段築成で、葦石をもつが埴輪はない。中心主体部は堅穴式石椁で、それを取り巻く杭列など葬送儀礼の遺構が検出されている。白米山古墳の北約1.5kmには国史跡蛭子山1・2号墳(前期)を含む8基からなる蛭子山古墳群と、前期～中期の5基からなる国史跡作山古墳群が築造される。蛭子山1号墳は前期の前方後円墳で全長145mを測る。段築・葦石・埴輪もつ。埋葬施設の一つである舟形石棺の内部から長宜子孫内行花纹鏡1、三葉葉付鉄刀1、棺外から鉄刀6、鉄剣15、鉄槍4が出土している。蛭子山2号墳は前期の造出付方墳で、一辺42mを測る。隣接する作山古墳群のうち、作山5号墳は一辺13mの方墳で、葦石・埴輪は伴わない。木棺直葬の棺内から、内行花纹鏡・石銅・玉類・鉄製品が出土している。作山1号墳は全長36mの造出付円墳で、2段築成・葦石・埴輪をもつ。副室付組合式石棺の棺内から男性遺骸のほか四獣形鏡・石銅・玉類、副室から鉄製品が出土した。作山3号墳は一辺17mの方墳で、葦石はないが埴輪をもつ。古墳群中唯一中期の作山4号墳は全長30mの前方後円墳で、葦石はあるが埴輪は伴わない。温江丸山古墳は蛭子山・作山古墳群の南約500mに位置する直径65mの円墳である。墳丘は段築である。埋葬施設は堅穴式石室で内部に組合式石棺がある。埋葬施設は土取りで壊されているが、崖下から三角縁神獸鏡片1・方格規矩変形獣文鏡1・鉄刀片1が出土している。

中期には、旧岩滝町で法王寺古墳がある。隣接する法王寺古墳は全長74mの前方後円墳で、葦石・埴輪が伴う。旧加悦町域では、温江地区に段築・葦石・埴輪をもつ後野円山古墳群・鳴谷古墳群が築造される。後野円山1号墳は作り出し付円墳で直径31mを測る。2段築成・葦石・埴輪が伴う。埋葬施設は堅穴式石室2基をもつ。埴輪には円筒・朝顔・家・水鳥がある。2号墳は方墳で一辺17mを測る。2段築成・葦石・埴輪が伴う。埋葬施設は堅穴式石室である。埴輪は円筒と朝顔がある。鳴谷1号墳は直径54mの中型円墳である。

後期においても野田川右岸の丘陵尾根筋に群集墳が築かれる傾向は強い。横穴式石室導入期の古墳としては級加悦町域の入谷西A1号墳が知られる。

3. 調査の概要(第3図)

府道と調査対象地は最大約2.0mの比高差があり、府道東側斜面の下部にはコンクリート製の柱と板による土留めが施されていた。調査対象地は、全長約90m×幅約0.5～2.2mを測る狭長な範囲である。調査はコンクリート擁壁から0.5m離してトレンチ掘削を開始したが、砂の堆積層が厚いととも、壁面からの出水の影響でトレンチ壁面と擁壁の一部が崩壊した。調査トレンチの壁面は、崩壊防止対策として壁の弱いところを中心に、木製コンクリートパネルを丸太杭で固定していたが、下部の砂の流出から土留め効果を遙かに超える圧力を受けてしまった。急速、安全対策として掘削した調査トレンチは直ちに埋め戻し、府道斜面の崩壊拡大の防止に努めた。その後、関係機関の協議結果を受け、その後の調査は7か所(第1～7G)の小規模グリッドを調査し、その後各グリッド間(1-2～5-2)においても更なるグリッド調査を行った。グリッド調査の際には、隣接コンクリート壁に対して、大型土嚢による安全対策を行った。

4. 土層と検出遺構

1) 基本層序(第4図)

調査対象地の地表面は標高約8.0mを測り、水田が営まれている。耕作土の下には標高約6.5m付近まで細砂・中粒砂・粗砂等の厚い堆積が認められる。砂層の下にはシルト質の砂の堆積が標高約5.7m付近まで存在する。さらに下層にはシルトの堆積が認められる。このシルト層は標高約5.0mまで確認したが、掘削調査範囲外にまで及ぶ状況にある。

第1～第4グリッドの上層にみられる灰黄褐色極細砂・にぶい黄橙色中粒砂・オリーブ褐色粗砂(第12～15層)は細かなラミナ層を形成することから、段丘部から流れ落ちる流路の堆積層と考えられる。この第13層には平安時代後期の遺物(第8図19)が含まれ、第2グリッドでは人頭大の石多数が認められた。

標高約6.7～7.0m付近で検出したオリーブ黒色細砂層(第6層)は古墳時代～平安時代の遺物を含む状況から、下層の黄灰色粘質細砂層(第7層)上面が平安時代頃の遺構面である可能性が高い。第7層では古墳時代後期の土器が含まれる。下層の灰オリーブ色粘質砂層(第8層)・黒色シルト質極細砂層(第9層)は遺物包含層で、灰オリーブ色粘質砂層には弥生～古墳時代後期の土器が含まれる。黒色シルト質極細砂層では弥生時代中期～古墳時代前期の土器が出土する。第9層のさらに下層のオリーブ灰色シルト層(第10層)は無遺物層である。第6～9層中に多くの遺物が含まれていたが、いずれも2次堆積遺物である。

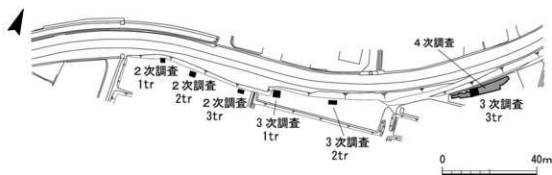
第1グリッド(第5図) 東端部に設定したグリッドであり、グリッド東側は埋め戻しトレンチ及び道路壁面崩落地である。グリッドは長さ3.5m×幅2.0mの規模を測る。標高6.8m付近で遺構面を検出した。検出遺構は、柱穴と判断するSP1・2と、土坑と判断するSK3の3基である。

柱穴SP1(第5図) 調査地西端部で検出した。部分検出であり遺構全体の規模形状は不明である。円形掘形であれば、直径が0.6m程度と推測する。深さは0.22mを測り、黒色シルト質極細砂が埋土である。遺物の出土はみられない。

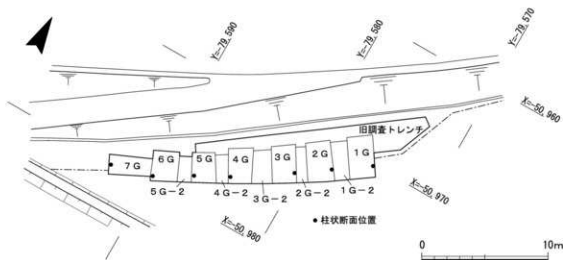
柱穴SP2(第5図) SP1の南東に位置し、遺構の一部が南東調査地外に延びる。掘形は円形とみられ、直径は0.6m、深さ0.2mを測る。埋土は黒色シルト質細砂である。遺物の出土はみられない。

土坑SK3(第5図) SP2の北東側から検出した土坑である。遺構の一部が南東調査地外に延びる。平面形は楕円形とみられるが詳細は不明である。検出範囲の規模は、長さ約0.7m、幅約0.4m、深さ0.22mを測る。埋土は3層に分かれ、上部の2層(第2・3層)は黒色シルト質の極細砂と細砂であり、第3層は灰オリーブ色細砂である。第2層の中から土師器の細片が出土したが、時期について確定できない。

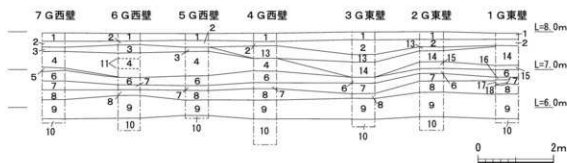
第1面の調査後、人力で掘り下げを行ったところ、グリッド南角付近の第7層上面の直下から、須恵器と土師器の高坏脚部(第7図11・12)などがまとまって出土した。遺構に関連する可能性も



第2図 調査地位位置図(文献3第12図より一部転載,修正・加筆)

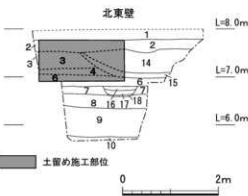
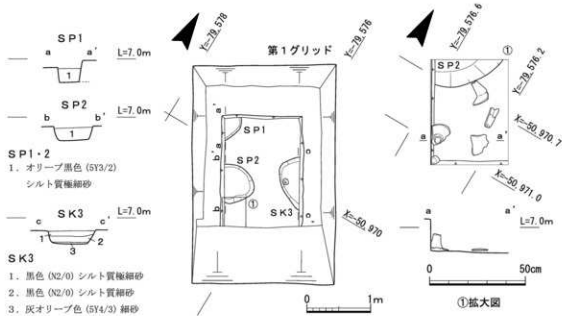


第3図 第4次調査トレンチ・グリッド配置図



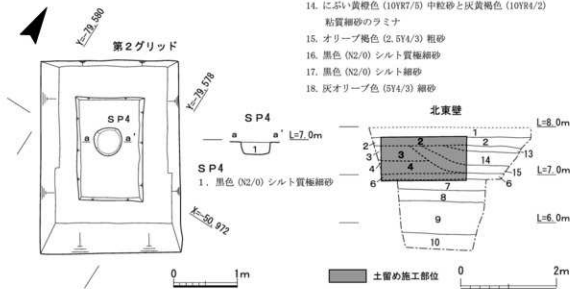
- | | |
|--|--|
| 1. 暗灰色(N3/0)シルト質極細砂 | 11. 灰白色(SY7/1)中粒砂 |
| 2. 黒褐色(2.5Y3/2)細砂<小石混じり> | 12. 灰黄褐色(10YR4/2)極細砂 |
| 3. 暗灰黄色(2.5Y4/2)粗砂 | 13. 灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂に黄褐色(2.5Y4/4)粗砂混じり |
| 4. にぶい黄橙色(10YR7/5)中粒砂と灰黄褐色(10YR4/2)粘質砂のラミナ | 14. にぶい黄橙色(10YR7/5)中粒砂と灰黄褐色(10YR4/2)粘質細砂のラミナ |
| 5. 暗褐色(10YR3/3)粘質細砂<粗砂混じり> | 15. オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗砂 |
| 6. オリーブ黒色(5Y3/2)細砂 | 16. 黒色(N2/0)シルト質極細砂 |
| 7. 黄灰色(2.5Y4/1)粘質細砂 | 17. 黒色(N2/0)シルト細砂 |
| 8. 灰オリーブ色(5Y5/3)粘質砂 | 18. 灰オリーブ色(5Y4/3)細砂 |
| 9. 黒色(N2/0)シルト質極細砂<有機物含む>×土器 | |
| 10. オリーブ灰色(5GY6/1)シルト | |

第4図 第4次調査グリッド柱状断面図

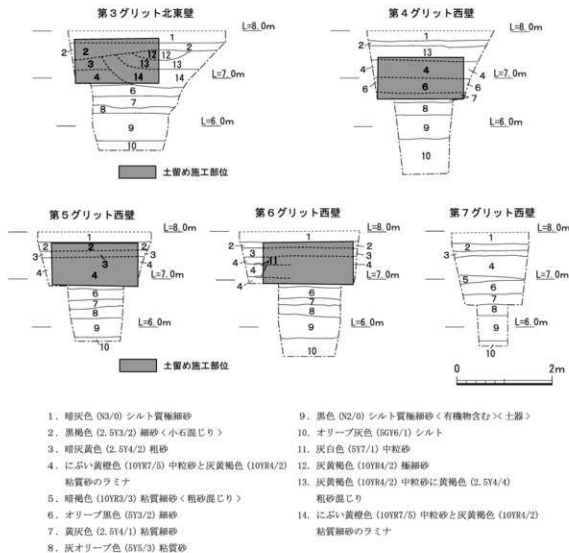


グリッド壁土層

1. 暗灰色 (N3/0) シルト質極細砂
2. 黒褐色 (2.5Y3/2) 細砂<小石混じり>
3. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粗砂
4. にぶい黄褐色 (10YR7/5) 中粒砂と灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質砂のラミナ
5. オリーブ黒色 (5Y3/2) 細砂
6. 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質細砂
7. 灰オリーブ色 (5Y5/3) 粘質砂
8. 黒色 (N2/0) シルト質極細砂<有機物含む><土器>
9. オリーブ灰色 (5GY6/1) シルト
10. 灰黄褐色 (10YR4/2) 極細砂
11. 灰黄褐色 (10YR4/2) 中粒砂に黄褐色 (2.5Y4/4) 粗砂混じり
12. にぶい黄褐色 (10YR7/5) 中粒砂と灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質細砂のラミナ
13. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 粗砂
14. 黒色 (N2/0) シルト質極細砂
15. 黒色 (N2/0) シルト細砂
16. 灰オリーブ色 (5Y4/3) 細砂



第5図 第1・2グリッド実測図



第6図 第3～7グリッド土層断面図

あり、遺物周辺部の精査を行ったが掘形等は確認できなかった。これらの遺物は包含層遺物と判断した。

第8層は土色も暗色が強く、遺物も含まれることから、更なる掘削調査の必要性が高まった。しかしながら調査範囲が狭いととも地盤も弱く、人力での掘削調査には壁面崩壊の危険性がさらに高まった。そこで、第8層以下には重機を使用して掘削し、層位確認を行った。また、重機掘削土については地上において遺物の回収作業を行った。出土遺物の出土状況は、基本層序の項目と同じである。遺物が含まれるのは第9層までであり、標高5.75m以下のオリーブ灰色シルト層(第10層)は無遺物であった。

第2グリッド(第5図) 第1グリッドの南西約1.2m離れた位置に設定した。グリッド規模は第1グリッドとほぼ同規模である。ここでも第7層遺構面から柱穴SP4を1基検出した。

柱穴SP4(第5図) 調査地中央で検出した、円形掘形の柱穴である。直径0.22m、深さ0.1mの規模を測る。埋土は黒色シルト質極細砂である。遺物の出土はみられない。

第3～7グリッド(第3・6図) 第1・2グリッド間と同じく、それぞれ1m前後の間隔を開けて設置した。調査対象地範囲の関係から、第7グリッドは第6グリッドに接続して配置した。基本層序は第1・2グリッドと同じであるが、遺構面である第7層上面で精査を行ったが遺構は検出できない。第5グリッドでは軟弱で大規模な攪乱層が存在し、第3次調査の3トレンチに重複することが判明した。第3～7グリッドでも、第8層以下に対しては重機掘削を行った。

第1～7グリッド間の調査も重機を中心とした掘削調査を行った。いずれも第7層上面において人力精査を実施し遺構検出に努めたが、遺構検出はみられない。

5. 出土遺物(第7～9図)

第6～9層出土遺物を中心に主要な遺物を報告する。個々の詳細は遺物観察表を参照願いたい。すべて2次堆積の包含層出土遺物である。

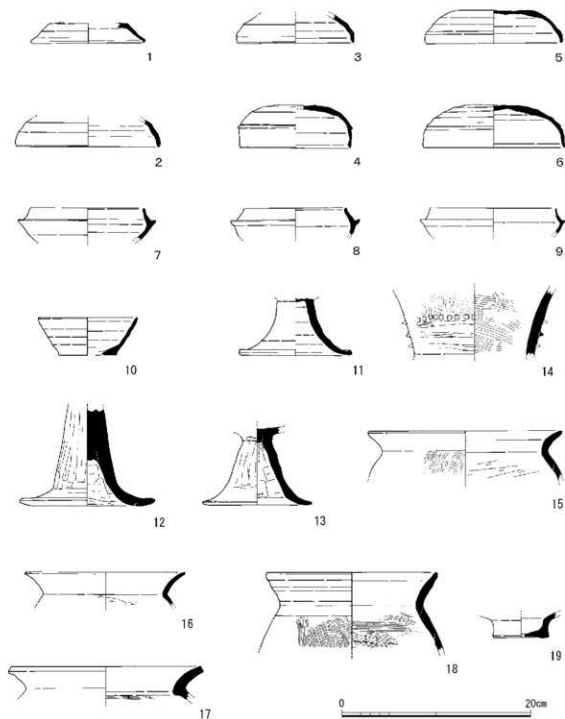
1は第8層出土の須恵器の蓋であり、奈良時代に含まれるものである。2～6・8・9は第6層出土の須恵器の杯身・杯蓋であり、6世紀後半の年代観を示す。14は第1グリッド第6層出土の壺口縁頸部であり、弥生時代中期(畿内第IV様式)に属する。15・18は口縁部内面がうねる。いわゆる段々口縁甕と呼ぶものであり、7世紀の年代観を示す。15は第1グリッドの流路埋土ラミナ層(第14層)出土である。18は第6層から出土した。19は平安時代後期の高台付皿の底部であり、第4グリッド検出流路(第13層)から出土した。

1・7・20・21・23～43は第8層から出土した。弥生時代後期から古墳時代後期の土器が出土する。20・21は須恵器の杯身である。22は須恵器器台の口縁部であり、1・2グリッド第9層から出土した。24は土師器の杯である。27は土師器の甌であり、底に焼成前の円孔が認められる。30～33は口縁端部をつまみあげる庄内平行期の甕である。36～43は弥生時代後期から古墳時代前期の土器であり、器台(39～41)・高杯(42・43)のほか、二重口縁の端部外面に擬凹線を施す甕(31～36)である。

44～69は、第9層出土の遺物で、弥生時代中期から古墳時代前期を中心とするものである。69は今回唯一出土した石器である。粘板岩性の磨製石斧であり第3グリッドから出土した。器種には壺(44・46～48)、甕(45・50～57)、器台(58)、高杯(59)、脚部(60～62)、底部(63～68)がある。44は畿内第IV様式壺の体部であり指頭圧痕文を施す貼付凸帯が特徴である。また、底部(65～68)も同時期とみられる。甕(54～57)は庄内平行期に属する。

6. まとめ

今回の調査では、多数の遺構を検出する状況になく、数基の柱穴と土坑を検出するにとどまった。狭長な調査地の関係から遺跡の詳細はまだまだ不明であるが、過去の調査例と同じく西側から北側にかけて広がる段丘上に、山田黒田遺跡の中心部が存在するとの確信がますます強まった。今回の調査では、比較的磨滅の少ない良好な土器の出土をみた。土器は層毎に時期が明確に別れることがなく、弥生中期土器を含む最下層の第9層でも、古式土師器が出土する。また、上層の

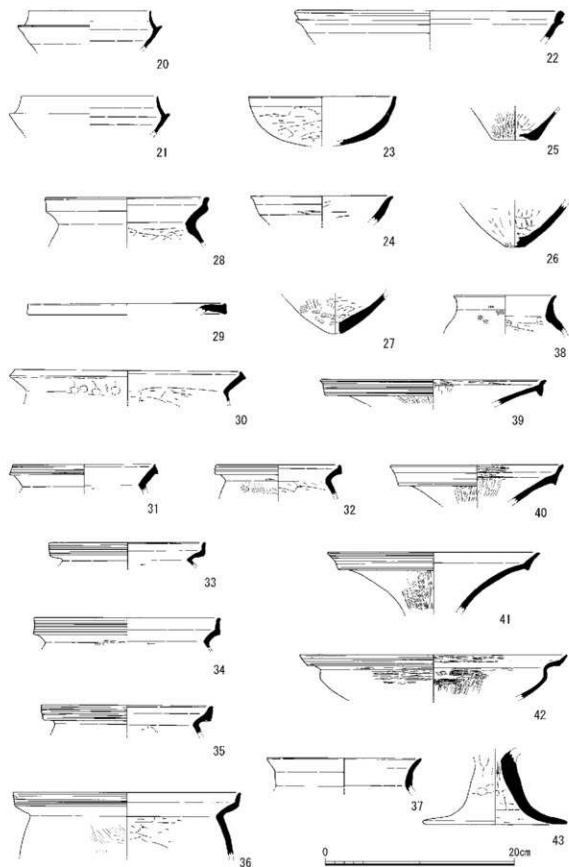


第7図 出土遺物実測図1

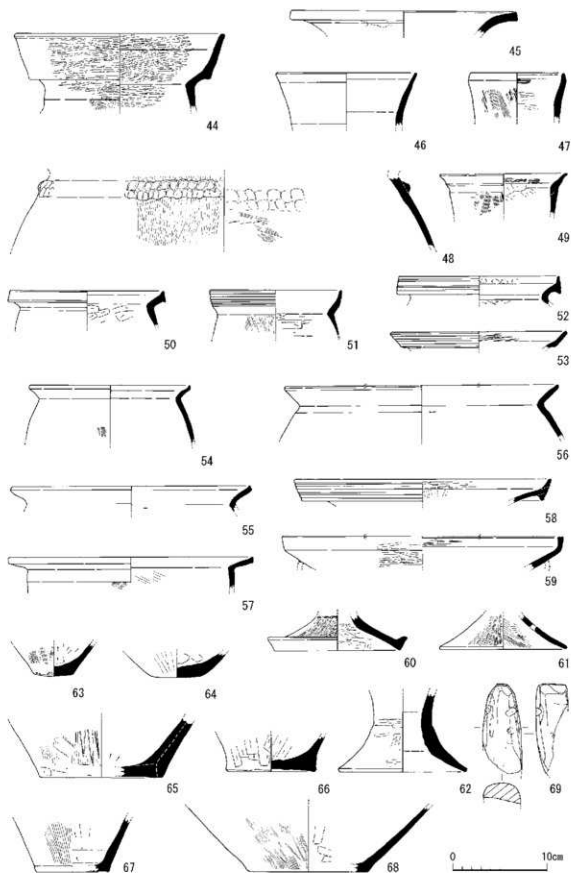
第6層でも弥生時代中期の土器が出土する。これにより遺物の多くは段丘上から運ばれた2次堆積遺物と判断される。遺物の出土傾向として、下層の第9層には中期から後期の弥生土器の出土比率が高い。

今後、調査地の西側及び北側段丘部の調査が進めば、山田黒田遺跡の内容がより明らかになるものと期待が寄せられる。

(竹原一彦)



第8図 出土遺物実測図2



第9図 出土遺物実測図3

- 注1 「町報野田川」昭和54年1月10日
 注2 「山田黒田遺跡発掘調査概要」（「京都府遺跡調査概報」第106冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）2009
 注3 「山田黒田遺跡第2・3次調査」（「京都府文化財調査報告書」（平成26年度）京都府教育委員会）2014

付表1 遺物観察表

実測番号	グリッド	出土地点	器種	器形	口径	器高	残存	胎土	焼成	色調	整形調整など
1	1	8層	須恵器	蓋	118	2.1	1/12	精良	良	青灰 SPB6/1	内外面回転ナデ
2	1	6層	須恵器	杯蓋	122	3.0	1/12	精良	良	暗灰	内外面回転ナデ、天井部外面ヘラケズリ
3	2	6層	須恵器	杯蓋	150	3.0	1/12	精良	良	暗灰	内外面回転ナデ、天井部外面ヘラケズリ
4	3	6層	須恵器	杯蓋	116	4.4	1/3	精良	良	灰6/0	内外面回転ナデ、天井部外面ヘラケズリ
5	1	6層	須恵器	杯蓋	143	3.5	1/12	精良	良	灰白 N7/0	内外面回転ナデ、天井部外面ヘラケズリ
6	2-2	6層	須恵器	蓋	149	4.5	4/5	精良	良	灰 N5-0	内外面回転ナデ、天井部外面ヘラケズリ
7	6	8層	須恵器	杯身	129	3.5	1/12	精良	良	青灰 SPB6/1	内外面回転ナデ
8	1-2	6層	須恵器	杯身	108	3.0	1/12	精良	良	青灰 SPB6/1	内外面回転ナデ、底部外面ヘラケズリ
9	2-2	6層	須恵器	杯身	133	2.8	1/6	精良	良	灰 N5-0	内外面回転ナデ
10	2	6層	土師器	杯	103	4.0	1/12	やや粗	良	にふい黄橙 10YR7/2	体部回転ナデ
11	1	7層	須恵器	高杯脚	120	6.0	1/2	やや粗	やや軟	灰白 N8/0	内外面回転ナデ
12	1	7層	土師器	高杯脚	143	10.4	1/4	やや粗	良	にふい橙 5YR6/4	脚端部を除きヘラケズリ
13	1	7層	土師器	高杯脚	116	9.3	1/4	粗	良	橙 2.5YR6/8	外面ミガキ、内面ヘラケズリ
14	1	6層	弥生	甕 頸部	142	6.2	1/5	やや粗	良	にふい橙 2.5YR6/3	外面に3本の胎付凸帯と1本の竹管文
15	4	15層	土師器	甕	204	5.3	1/12	やや粗	やや軟	橙 5YR7/6	段々口縁、体部外面ハケメ、体部内面ヘラケズリ
16	7	6層	土師器	甕	167	3.5	1/16	やや粗	良	にふい黄橙 10YR7/2	体部外面ハケメ、内面ヘラケズリ
17	1	6層	土師器	甕	200	3.7	1.8	やや粗	良	橙 5YR6/6	口縁部ヨコナデ、体部内面洗いハケメ
18	1	6層	土師器	甕	179	8.4	1/6	粗	良	にふい橙 5YR6/3	段々口縁、体部内外面ハケメ
19	4	13層	土師器	高台	5.9	2.7	1/6	良	良	にふい橙 7.5YR6/4	磨滅、底部回転糸切か
20	2	8層	須恵器	杯身	119	3.5	1/12	良	良	青灰 5PB5/1	内外面回転ナデ、底部外面ヘラケズリ
21	4-2	8層	須恵器	杯身	144	3.5	1/12	良	良	灰 N7/0	内外面回転ナデ、底部外面ヘラケズリ
22	1-2	9層	須恵器	胎台	27.8	3.2	1/24	良	良	黒褐 7.5YR2/2	口縁部外面に凸帯
23	4-2	8層	土師器	杯	154	5.3	1/6	粗	良	にふい赤橙 10R6/4	内面ナデか、外面ヘラケズリ
24	6	8層	土師器	杯	148	2.8	1/16	良	良	にふい橙 5YR6/4	内外面ナデの後粗いミガキ
25	1-2	8層	弥生	底部	41	3.5	1/2	良	良	明赤褐 5YR6/6	外面ミガキ、内面ヘラケズリ
26	5	8層	土師器	底部	25	4.6	1/12	やや粗	良	褐灰 5YR5/1	内面ヘラケズリ。外面粗いケズリ
27	1	8層	土師器	瓶	72	3.9	1/12	やや粗	良	にふい赤褐 5YR5/4	内面ナデ、外面粗いハケメ
28	3-2	8層	土師器	甕	170	4.9	1/6	やや粗	良	にふい橙 7.5YR7/4	体部内面ヘラケズリ
29	1-2	8層	土師器	甕	207	1.2	1/18	やや粗	良	灰白 10YR8/2	-
30	3-2	8層	土師器	甕	239	3.4	1/6	やや粗	良	灰白 7.5YR8/2	体部内面ヘラケズリ
31	1-2	8層	土師器	甕	150	2.5	1/12	やや粗	良	にふい橙 7.5YR7/3	口縁端部外面に3本の縦凹線文
32	1-2	8層	土師器	甕	130	3.2	1/4	やや粗	良	橙 5YR7/6	口縁端部外面に2本の縦凹線文、体部内面ヘラケズリ、体部外面ハケメ
33	3-2	8層	土師器	甕	163	2.4	1/12	やや粗	良	にふい黄橙 10YR7/2	二重口縁端部外面に3本の縦凹線文、体部内面はヘラケズリ
34	3	8層	土師器	甕	196	3.2	1/8	やや粗	良	にふい赤褐 5YR5/4	二重口縁端部外面に4本の縦凹線文、体部内面はヘラケズリ、体部外面はハケメ
35	3-2	8層	土師器	甕	180	3.4	1/12	やや粗	良	にふい褐 7.5YR5/3	二重口縁端部外面に4本の縦凹線文、体部内面はヘラケズリ、体部外面はハケメ
36	3	8層	土師器	甕	239	6.7	1/12	やや粗	良	淡橙 5YR5/4	二重口縁端部外面に4本の縦凹線文、体部内面はヘラケズリ、体部外面はハケメ
37	4-2	8層	土師器	甕	162	3.5	1/12	やや粗	良	橙 2.5YR6/8	-
38	4	8層	土師器	甕	106	3.6	1/12	やや粗	良	橙 2.5YR6/6	-

実測 番号	グリッド	出土 地点	器種	器形	口径	器高	残存	胎土	焼成	色調	整形調整など
39	6	8層	弥生	器台	237	27	1/6	良	やや軟	にぶい赤褐 5YR5/4	口縁部外面に5条の縦凹線文、内外面 ヘラミガキ
40	3-2	8層	弥生	器台	182	41	1/16	良	良	灰黄褐 10YR6/2	口縁部外面に5条の縦凹線文、内外面 ヘラミガキ
41	3	8層	弥生	器台	222	63	1/6	良	良	淡赤褐 2.5YR7/4	口縁部外面に5条の縦凹線文、外面ヘ ラミガキ
42	3-2	8層	弥生	高坏	282	47	1/6	良	良	にぶい黄褐 10YR7/2	口縁部外面に3条の縦凹線文、内外面 ヘラミガキ
43	6	8層	土師器	脚	141	79	1/4	粗	良	灰褐 7.5YR4/2	内面ヘラケズリ、外面ナデ
44	7	9層	土師器	壺	219	82	1/6	やや粗	良	明赤褐 2.5YR5/6	内外面滑なヘラミガキ
45	4	9層	土師器	壺	236	23	1/12	粗	良	灰黄褐 10YR6/2	-
46	5	9層	土師器	壺	148	58	1/16	やや粗	良	灰 7.5YR6/1	ナデ
47	5	9層	弥生	壺	98	49	1/6	やや粗	やや軟	明赤褐 2.5YR5/6	外面ハケメ、内面上部はハケメ、内面下 部はヘラケズリ
48	5-2	9層	弥生	壺	-	-	1/8	やや粗	良	灰褐 10YR8/2	体部上端付近に貼付凸帯、凸帯上に2条 の指頭瓦痕、外面ハケメ
49	4	9層	土師器	鉢	133	44	1/6	粗	良	灰褐 7.5YR4/2	体部外面ハケメ、体部内面ヘラケズリ
50	4-2	9層	土師器	壺	162	37	1/6	粗	良	にぶい褐 7.5YR6/3	体部内面ヘラケズリ
51	5	9層	土師器	壺	138	51	1/12	粗	良	にぶい赤褐 7.5YR7/2	口縁部外面に5条の縦凹線文、体部内 面ヘラケズリ、外面ハケメ
52	4	9層	土師器	壺	199	30	1/12	粗	良	灰褐 7.5YR6/2	口縁部外面に3条の縦凹線文、体部内 面ヘラケズリ
53	5-2	9層	弥生	器台	184	18	1/12	良	良	橙 2.5YR6/6	口縁部外面4条の浅い縦凹線文、内面 ヘラミガキ
54	1-2	9層	土師器	壺	168	62	1/12	やや粗	良	淡赤褐 2.5YR7/4	口縁部つまみあげ、体部外面細かいハ ケメ
55	1-2	9層	土師器	壺	255	21	1/12	やや粗	良	にぶい黄褐 10YR7/2	口縁部つまみあげ、体部内面ヘラケズ リ
56	1-2	9層	土師器	壺	287	57	1/6	やや粗	良	灰白 7.5YR7/2	口縁部つまみあげ、体部内面ヘラケズ リ
57	1-2	9層	土師器	壺	257	35	1/12	粗	良	にぶい橙 5YR6/4	体部内面粗いハケメ、体部外面細かいハ ケメ
58	6	9層	弥生	器台	270	26	1/16	良	良	淡黄褐 10YR8/3	口縁部外面6条の縦凹線文、内外面ヘ ラミガキ
59	4	9層	弥生	高坏	297	34	1/16	良	良	にぶい橙 7.5YR7/4	杯部外面に半円環の貼付け痕を残す。内 外面ヘラミガキ
60	2-2	9層	弥生	脚	132	38	1/12	やや粗	良	にぶい橙 7.5YR7/4	脚端部が外上方に立ち上がる。内面ヘラ ケズリ、外面細かいヘラミガキ
61	6	9層	弥生	脚	132	37	3/4	良	良	にぶい褐 7.5YR6/3	破片内に透かし孔2か所、内面粗いハケ メ、外面細かいミガキ
62	6	9層	弥生	脚	132	82	1/6	やや粗	良	明褐灰 7.5YR7/2	内面粗いナデ、外面粗いヘラミガキ
63	4	9層	弥生	底部	41	35	1/2	粗	良	灰褐 7.5YR6/2	内面ヘラケズリ、外面細かいハケメ
64	7	9層	弥生	底部	54	25	1/2	やや粗	良	灰黄褐 10YR6/2	内面ナデ、外面ヘラミガキ
65	3	9層	弥生	底部	130	64	1/3	粗	良	にぶい黄橙 10YR7/2	内面ヘラケズリ、外面ハケメ
66	1-2	9層	弥生	底部	91	02	1/6	粗	良	赤褐 10YR6/6	内外面ヘラケズリ
67	3	9層	弥生	底部	78	58	1/12	粗	良	灰白 10YR8/1	内面ヘラケズリ、外面ハケメ
68	1-2	9層	弥生	底部	128	69	1/14	粗	良	にぶい黄橙 10YR7/3	内面ヘラケズリ、外面ハケメ
69	3	9層	石器	磨製石斧	95	40	1/2	-	-	-	粘板岩、輪刃

2.出雲遺跡第15・16・18次発掘調査報告

1.はじめに

この調査は、亀岡市千歳町における農山漁村活性化プロジェクト支援交付金事業に伴い、京都府農林水産部の依頼を受けて実施したものである。農山漁村活性化プロジェクト事業(川東地区)は、平成6年度から着手された圃場整備事業の終了後の道路整備を対象に実施されたもので、今回報告する調査は、圃場整備完了地区の農道整備に伴う事前調査である。

京都府亀岡市千歳町千歳に所在する出雲遺跡は、大堰川左岸の丘陵裾に位置し、弥生時代から中世の複合集落遺跡として知られる。出雲遺跡では、過去に京都府教育委員会や亀岡市教育委員会による14次にわたる発掘調査が実施されている。今回報告する調査は、当センターが平成23年(第15次調査)・25年(第16次調査)・26年度(第18次調査)の3か年にわたって実施したものである。

各調査年度ともに現地調査にあたっては、京都府教育委員会、亀岡市教育委員会はじめ各関係機関のご指導・ご協力を得た。また、京都府南丹土木事務所、千歳町自治会、ならびに調査に参加していただいた地元住民の方々や調査補助員、整理員の方々には、調査・報告を通じて多大なご協力をいただいた。以上の関係機関、関係者の方々に深く感謝の意を表したい。

なお、調査に係る経費は、京都府南丹広域振興局が全額を負担した。

〔調査体制等〕

平成24年度調査：出雲遺跡第15次

現地調査責任者 調査第2課長 水谷寿克

現地調査担当者 調査第2課調査第2係長 小池 寛

同 主任 竹原一彦

調査場所 亀岡市千歳町千歳他

現地調査期間 平成24年11月8日～平成24年12月21日

調査面積 300㎡

平成25年度調査：出雲遺跡第16次

現地調査責任者 調査第2課長 水谷寿克

現地調査担当者 調査第2課調査第2係長 中川和哉

同 主任 高野陽子

同 専門調査員 黒坪一樹

調査場所 亀岡市千歳町千歳

現地調査期間 平成25年7月5日～平成25年10月16日

調査面積 1000㎡

平成26年度調査：出雲遺跡第18次

現地調査責任者 調査課長 石井清司

現地調査担当者 調査課調査第2係長 中川和哉

同 主査 黒坪一樹

調査場所 亀岡市千歳町千歳

現地調査期間 平成26年5月19日～平成26年7月10日

調査面積 400㎡

平27年度整理報告

整理報告責任者 調査課長 有井広幸

整理報告担当者 調査課課長補佐兼調査第1係長 細川康晴

同 主査 黒坪一樹

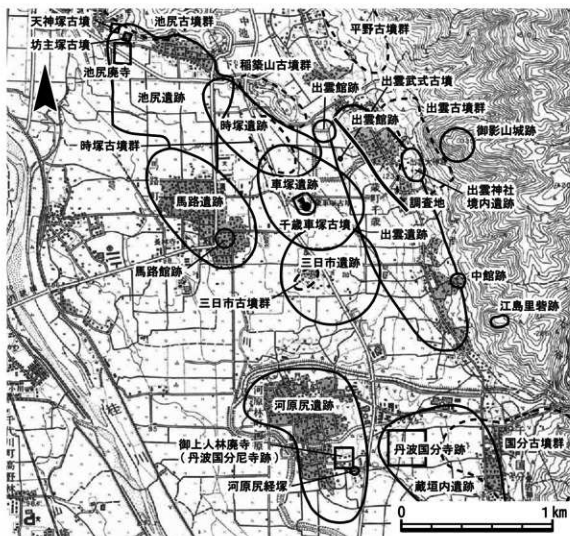
2. 位置と歴史的環境

出雲遺跡は、亀岡盆地北東部、川東地区と呼ばれる大堰川左岸に位置する複合集落遺跡である。遺跡範囲は、南北約1km、東西約0.5kmの規模をもつ。亀岡盆地は、盆地中央部を貫流する大堰川(桂川中流)を挟み東西の山地裾部に低位段丘が形成されるが、出雲遺跡は東側の山地の三郎ヶ岳(613m)から緩やかに西に派生した尾根裾に形成された低位段丘上に立地する。周辺の地層は、丹波山地の古生層として知られる丹波帯のチャートや頁岩及び珪頁岩を主体とする礫層を基盤とする。東側の山地(若丹山地)が開析されて河川の谷に流出してくる土砂礫は、断層崖の斜面や扇状地を造り、段丘化した地形が出雲遺跡を含めた周辺に広がっている。

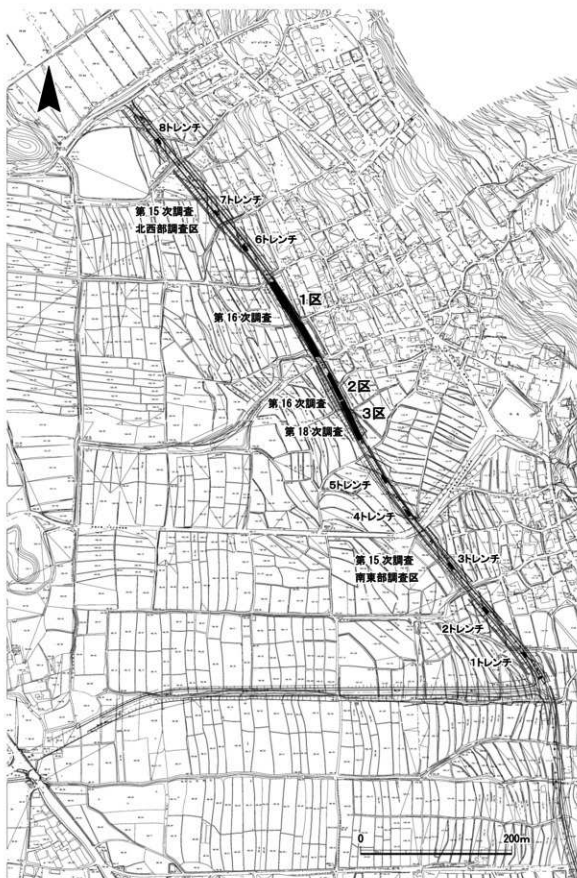
出雲遺跡の歴史的環境について、弥生時代から中世かけての遺構・遺物を中心にみておきたい。弥生時代前期の遺跡は、大堰川西岸では大規模環濠集落として知られる太田遺跡が立地するが、出雲遺跡の所在する東岸の調査例は乏しく、蔵垣内遺跡や大淵遺跡などでわずかに土坑等の遺構がみられるに過ぎない。中期には、盆地各所で大きく集落遺跡が展開するようになるが、出雲遺跡周辺でも中期前葉の方形周溝墓群を確認した池尻遺跡を端緒に、中期中葉以降、時塚遺跡などの大規模な集落遺跡が展開する。時塚遺跡では、在地で作られた土器のほか河内地方・近江地方の土器や、遠く東海地方の影響を受けた円窓付き土器なども出土し、各地との地域間交流のあとかげえる。弥生時代後期後半には、出雲遺跡南部で多角形住居などが確認され、特に山地裾部に弥生後期の集落の拡がりが見えてくる。古墳時代に入ると、大堰川東岸側では前期から後期まで首長墳が各時期に相次いで築造される。前期古墳としては、出雲遺跡の西側に大形円墳である出雲武式古墳(径35m)が築かれ、続いて中期中頃には甲冑などの鉄製武器類を出土し亀岡盆地の

盟主墳とされる坊主塚古墳(一辺40m)や邪視の盾持ち人形埴輪を出土した時塚1号墳(一辺30m)など、方墳を特色とした首長墳が築造されるようになる。池上遺跡は、古墳時代の集落遺跡でもあり、古墳時代中期後半以降に盛期をむかえ、大溝から子持ち勾玉が出土している。後期前葉には、出雲遺跡の西方に丹波最大の前方後円墳である千歳車塚古墳(全長81m)が出現し、以降、この一帯は丹波の地域勢力の中核地域となる。

歴史時代の遺跡としては、出雲遺跡の北西約3kmに位置する池上遺跡で、奈良時代の廂付大型掘立柱建物群が検出され、丹波国府に関わる建物の可能性があると指摘される。周辺では時塚遺跡などでも同時期の官衙級の大型掘立柱建物群が検出され、官衙に関連する建物群の拡がりが見られ、奈良時代末期には、南約2kmに丹波国分僧寺・国分尼寺が創建されたと推定される。また、出雲遺跡東方の御影山の麓に位置する出雲神社は、平安時代の延喜式内社であり、古代から中絵を通じて丹波国一宮として崇敬を集めた神社である。境内からは、篠王子窟で生産されたとみられる平安時代末期の瓦が出土し、この時期には神宮寺が建立されたと考えられている。池上遺跡の西方に国八丁とする官衙関連建物の描写があることで注目される「丹波国吉富庄絵図写」は、



第1図 調査地周辺遺跡分布図



第2図 調査区・調査トレンチ位置図

後白河法皇への荘園寄進絵図とされるが、出雲神社もこの時期には後白河法皇の蓮華王院領となり、一帯は王家領として寺社を中心に大きく栄えたとみられる。

(黒坪一樹・高野陽子)

3. 調査内容

1) 出雲遺跡第15次(平成24年度調査)

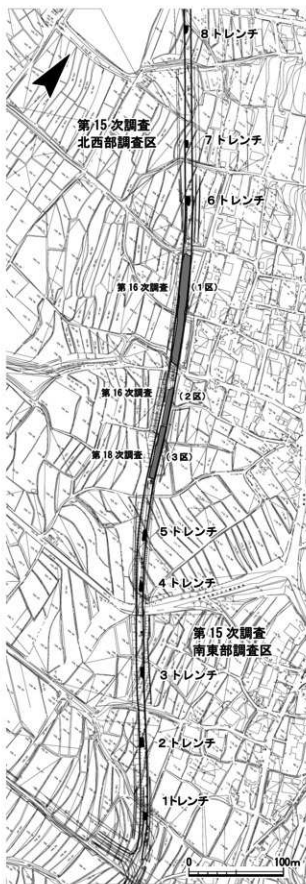
出雲遺跡第15次調査では、調査対象地は道路建設予定地の南東部と北西部の2か所に大きく別れる。南東部調査区は、幅約10m、全長約400mの範囲が対象であり、既存道路や水路の関係から、5地点に調査トレンチ(第1～5トレンチ)を設定した。北西部調査区は幅約10m、全長約300mの範囲が対象であり、ここでも道路・水路などの関係から、3地点に調査トレンチ(第6～8トレンチ)を設定して調査を行った。調査対象地の状況(幅・排土処理等)から、調査トレンチは長さ10m×幅4mもしくは同8m×同5mの規模を基本に設定した。総調査面積は300㎡である。2か所の調査対象地は、過去、周辺部で実施されたほ場整備に関連した盛土が存在し、その土量は南東部調査区が特に厚く盛られている。各調査トレンチは、安定地盤の上部までは重機による掘削を行った。その後は人力による掘削と精査を行い、遺構・遺物の検出に努めた。以下、基本層序から各調査トレンチの調査結果を報告する。

(1) 南東部調査区(第3図)

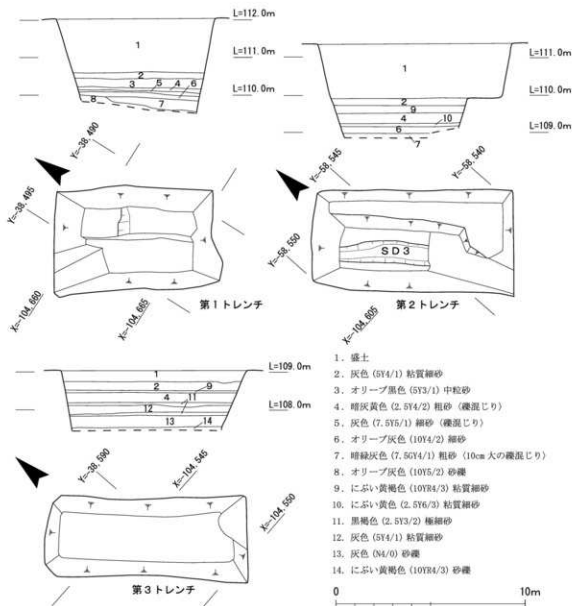
出雲大神宮の南側に位置する調査区であり、西に開く谷地形を横断する。

① 第1トレンチ(第4図)

調査区の南端に設定した。規模は長さ約



第3図 第15次調査区位置図



第4図 第15次調査第1～3トレンチ平面・断面図

8.0m×幅約5.0mを測る。緩やかに北方向に下がる旧地表(標高約110.6m)上の盛土は、最大1.4mを測る。標高110m付近には、オリーブ灰色細砂(6層)や灰色細砂(5層)が水平堆積している。このうち灰色細砂層中には近世陶磁器が含まれていた。

標高109.9m付近で硬く締まったオリーブ灰色砂礫層(8層)の安定地盤を検出した。

ここで遺構検出を目的に精査を行ったが遺構を確認できなかった。トレンチ東端部で下層確認の断りを行ったところ、安定地盤面は中央付近から南側は南西方向に傾斜して下がり、斜面上には暗緑灰色粗砂(同7層)が認められた。この暗緑灰色粗砂層は礫を多く含み、無遺物であったこともあり自然堆積層と判断するが、土石流の堆積層の可能性も高く著しい湧水がみられた。

②第2トレンチ(第5図)

第1トレンチから北西方向に約65m離れて設定した。規模は長さ約8.0m×幅約5.0mを測る。旧地表(標高約109.9m)上の盛土は約1.5mを測り、標高108.0m付近で安定地盤(暗灰色砂礫)を検

出した。安定地盤のにぶい黄褐色砂礫(第4図14層)を掘り込む溝SD3を検出した。SD3は幅約0.4~0.6m×深さ0.1mの素掘り溝である。北西から南東方向に直線的に延びる溝であり、検出長は4.6mを測る。溝の埋土は暗灰色(N3/0)粘質極細砂であり、無遺物である。ここでは、灰色砂礫層(同13層)から時期不明の土師器の細片が出土した。

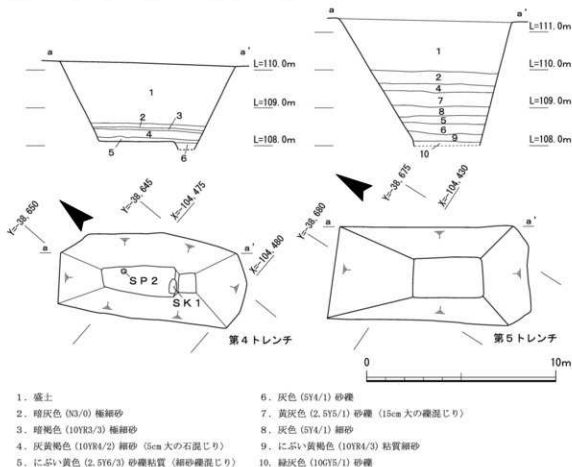
③第3トレンチ(第4図)

第2トレンチから北西方向に約62m離れて設定した。谷地形の中央部に位置し、第2トレンチよりさらに2.4m下がる。規模は長さ約80m×幅約5.0mを測る。旧地表(標高約108.8m)上の盛土は約0.25mと浅い。堆積土では、標高108.2mと108.6m付近に薄い黒褐色極細砂層(第4図11層)が存在した。遺物包含層の可能性もあり精査を行ったが無遺物であった。

標高107.6m付近で、安定地盤と判断するにぶい黄褐色砂礫層(同14層)を検出した。精査を行ったが遺構・遺物の検出はみられない。

④第4トレンチ(第5図)

出雲大神宮の神池前から西に延びる府道の北側に設けた調査トレンチであり、第3トレンチから南西に約80mの距離を測る。トレンチ規模は長さ約10.0m×幅約4.0mを測る。旧地表(標高108.6m)上の盛土は約1.6mを測る。標高108.1m付近で安定地盤(第6層灰色砂礫)を検出した。安定地盤上の精査で、土坑SK1と柱穴SP2を検出した。

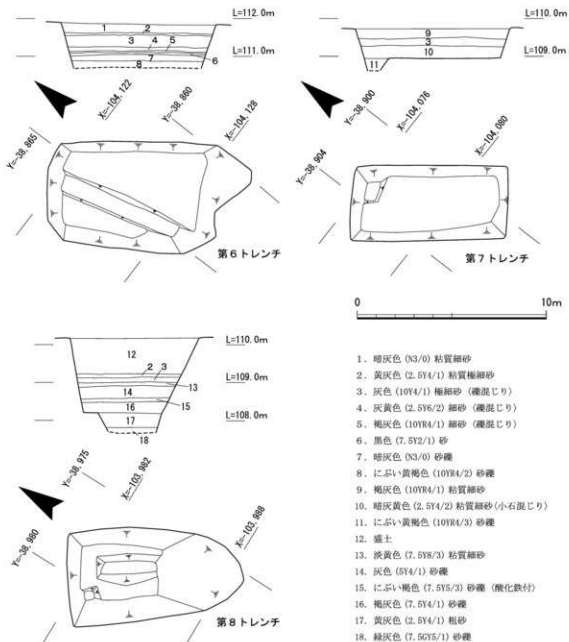


第5図 第15次調査第4・5トレンチ平面・断面図

土坑SK1(第4図) トレンチ南部で検出した楕円形とみられる土坑であり、後世の攪乱で遺構の南部を失っている。残存部では東西方向の長さは約0.8mを測る。幅は不明であるが、0.2m分が残り、深さは0.45mの規模を測る。土坑壁は底面から角度をもって斜めに立ち上がる。埋土は暗灰色(N3/0)極細砂である。検出面及び断面で精査を行ったが、柱の存在を示す痕跡が確認できないことから、土坑と判断した。埋土中から中世の土師器皿(第20図1)が出土した。

柱穴SP2(第5図) SK1の北側約2.4m離れた位置から検出した柱穴である。掘形は円形で、直径約0.25m×深さ0.05m規模を測る。埋土は暗灰色(N3/0)極細砂である。遺物の出土はみられない。

トレンチ壁面の精査で、にぶい黄色砂礫粘質土(5層)から須恵器・瓦器(第20図2・3)の破片



第6図 第15次調査第6～8トレンチ平面・断面図

の出土をみた。

⑤第5トレンチ(第4図)

第4トレンチから北西に約41m離れて設定した調査トレンチである。谷地形の北側斜面部に位置する。トレンチの地表は第4トレンチから1.1m上がった位置にある。トレンチ規模は長さ約8.0m×幅約5.0mを測る。旧地表(標高約110.0m)上の盛土は約1.3mを測り、標高108.8m付近で淡緑灰色砂礫(10層)の安定地盤を検出した。トレンチ壁面の精査で、にぶい黄褐色粘質細砂(9層)中から、須恵器蓋の出土をみた。

(2)北西部調査区(第3図)

出雲大神宮の北西に位置する調査区であり、段丘から北方向に下がる斜面地にあたる。

①第6トレンチ(第6図) 調査区の南部に設けたトレンチで、長さ約8.0m×幅約5.0mを測る。緩やかに北方向に下がる地表は標高約111.8mであり、南部調査区にみられた盛土は存在しない。標高110.8m付近でにぶい黄褐色砂礫(8層)の安定地盤を検出した。中央部を棚田の石垣が南北方向に縦断し、石垣の西側は地山を大規模に削平している。東側で検出した安定地盤面と西側削平面の比高差はおよそ0.8mを測る。精査を行ったが、無遺構・無遺物であった。

②第7トレンチ(第6図) 第6トレンチから南西に約50m離れた斜面地に位置する。トレンチ規模は約10.0m×幅約4.0mを測る。盛土は存在せず、耕作土が地表である。地表下0.5m(標高109.0m)でにぶい黄褐色砂礫(11層)の安定地盤を検出した。精査を行ったが、無遺構・無遺物である。

③第8トレンチ(第6図) 調査区の北端部、谷地形低所に設けた調査トレンチである。第7トレンチとは約112mの距離を測る。旧地表(標高約109.2m)上の盛土は約1.0mを測る。標高108.5m付近で褐色砂礫(16層)の安定地盤を検出した。遺構の検出はみられないが、トレンチ壁面の灰色砂礫(14層)から時期不明の土師器の小細片が出土した。(竹原一彦)

2)出雲遺跡第16次調査(平成25年度調査)

第16次調査は、第15次調査の成果をもとに、過去の周辺調査で遺構検出が顕著であった地区を中心に、2か所の調査区を設定した。調査区は、山地裾部の緩やかな傾斜面上に斜面を横断するように配置し、北東部を1区、南西部を2区とした(第7図)。調査区一帯は、近年まで耕作地であり、丘陵部を断面「L」字状に掘削してテラス状の平坦面を削り出し、棚田として利用されていた。調査前にはその上層にさらに圃場整備および路面整備に伴う多量の盛土がなされ、旧地形を大きく変えていた。こうした客土を重機によって除去し、発掘調査を進めた。1区の調査面積は、760㎡を測り、2区の調査面積は240㎡を測る。

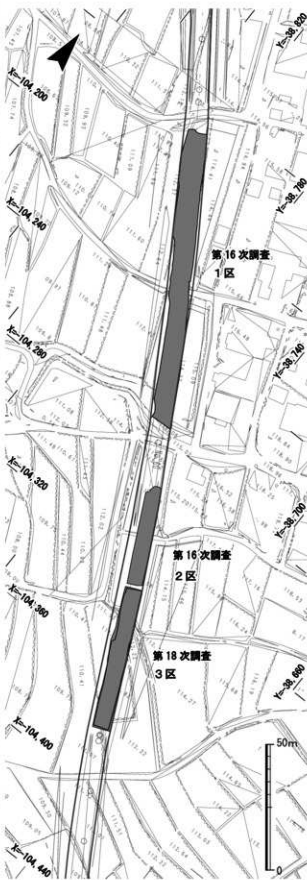
(1)基本層序

1区層序 1区は、全長115mを測る南北に長い調査区であり、現地表面の標高は北東端で標高約114.5m、南東隅で115.7mを測る。1区中央部で棚田の筆が異なり、丘陵の張り出し部にかかる南東部は標高が高く、北西部と1m以上の高低差がある。遺構面は、北西部では標高113.0

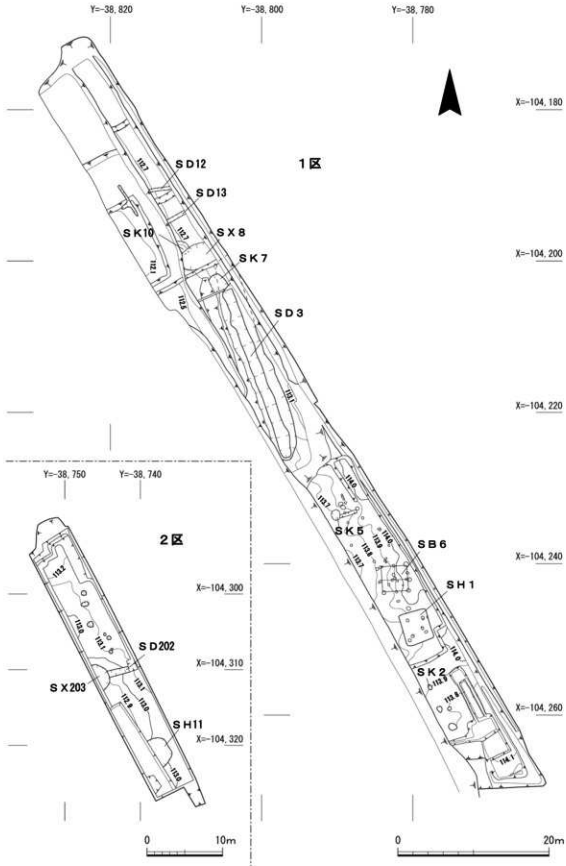
m前後のレベルで中世遺構や弥生時代の遺構を同一面で検出し、南東部では標高114.0m付近で中世遺構や古墳時代遺構を検出した。以下、上層から順に層序を述べる。

1区層序のうち、最上層は盛土であり(第9図)、近年に完了した圃場整備の際、仮設路面造成に伴い搬入された客土である。厚さは、北西部で0.8~1.2m、南東部で0.4mを測る。盛土層の直下は、第1層とした灰色粘質土(5Y4/1)であり、近現代の耕作土とみられる。地盤の低い北西部では標高約114.0m付近で確認されるが、南東部は高く、対応する層位は削平されている。第2層は、オリブ黒(7.5Y3/2)砂粒砂混じり粘質土で、10~20cmの大小の礫を多く含む。チャート・頁岩などを主体とする砂礫であり、基盤層である丹波帯に由来する砂礫が、山地側からの流土として堆積したものとみられる。この層位は、0.2~0.5mの厚さで調査区の南北で広く認められる。第3層は、にぶい黄褐色粗砂礫混じり粘質土(10YR5/4)で、2層と同様に砂礫を多く含むが、やや粘りのあるシルト質の層位である。第3層からは染付などの陶磁器類が出土し、近世遺物包含層とみられる。中世の溝SD3はこの第3層の直下で確認される。第4層は、調査区中央南寄りで確認したオリブ黒色シルト混じり粘質土(5Y3/1)である。中央部の一部にのみ確認される層位で、厚さ約0.1mと薄いが、土師器や瓦器などを含む中世遺物包含層である。第5層の黒褐色(2.5Y3/1)礫混じり粘質土は、安定した基盤面を形成する層であり、チャートや堆積岩類の風化した砂礫を多く含む。

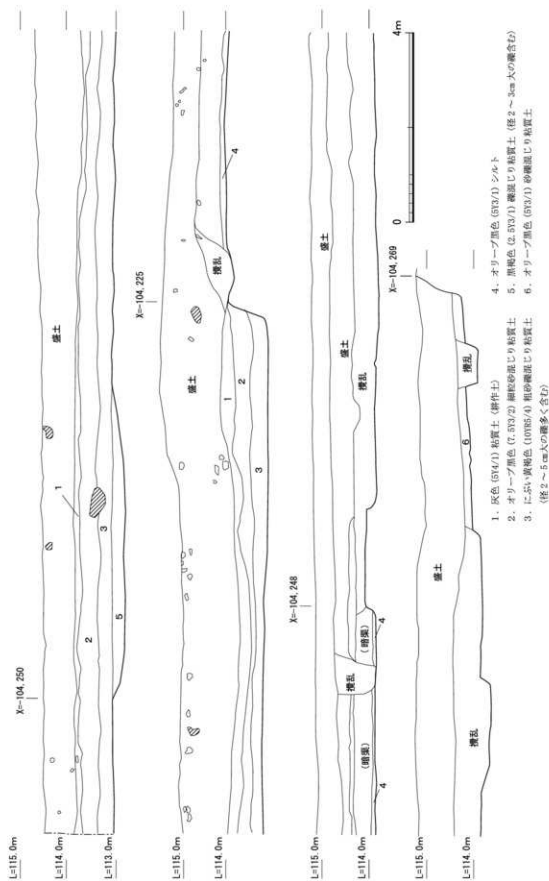
2区層序 現地形は、1区から2区に向



第7図 第16次・18次調査区配置図



第8図 第16次調査1・2区遺構配置図



第9図 第16次調査1区東部断面図

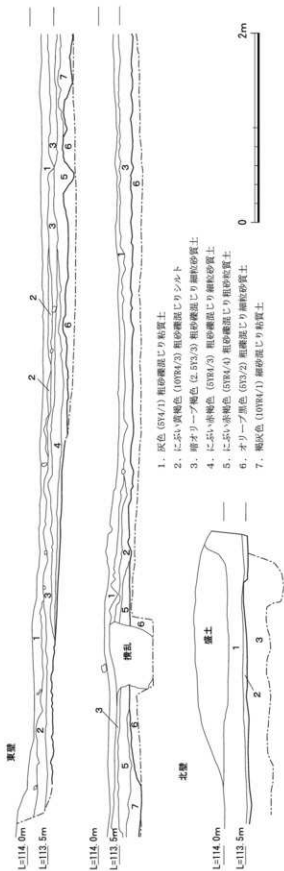
けて緩やかに傾斜しており、2区の現地表面の標高は、北西端で標高114.0m、東端で113.7mを測る。遺構面は、標高約113.5m前後で確認した。最上層は、1区と同様、盛土(第10図)であり、第1層は灰黄色礫混じり粘質土(5Y4/1)、第5層は暗灰色砂礫混じり粘質土で近世遺物包含層である。第4層は中世遺物包含層である暗褐色礫混じり粘質土(である。基盤層とした第5層は、1区と同様、黄褐色粘質土であり、丹波帯に起源する堆積岩類の礫が多く含まれる。

(2) 検出遺構

① 1区

調査面積760m²を測る。調査前には、仮路面造成のための盛土および整地がなされ、これらの客土を重機によって搬出し、発掘調査を開始した。調査地周辺は、棚田の旧地形がよく残り、調査対象地は南東から北西へ階段状に下がる3段のテラス面が形成されている。テラス面では、長期にわたって耕作が行われていたため、包含層や遺構の削平が著しい。特に南東端では、丘陵上部から流れ込む谷水の貯水施設などが造られるなど、大きく近代の削平や地形の改変を受けている。調査は、丘陵側からの近代および近世遺物を包含する多量の礫を伴う流土を重機によって除去し、部分的に薄く残る中世遺物包含層やその下層を人力掘削によって掘り進めた。なお、調査区の掘削は、西側が調査区に接して崖面となるため、廃土搬出作業の安全性の確保から、断面「L」字状に掘削している。

弥生時代から平安時代までの各時代の遺構を検出した。おもな検出遺構は、弥生時代後期後葉～末の土坑および落ち込み2

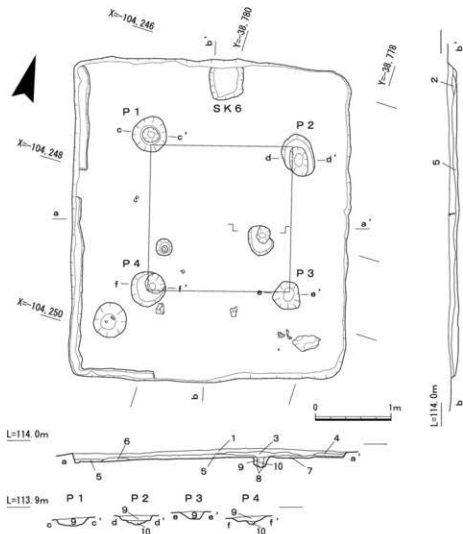


第10図 第16次調査2区東壁断面図

基、古墳時代前期初葉の竪穴建物1基と土坑2基、平安時代とみられる掘立柱建物1棟、土坑1基、平安時代の漆の一部である可能性をもつ大溝1条と素掘り溝2条である。なお、遺構は確認していないが、流土や遺物包含層中から、弥生時代中期土器や石包丁のほか、奈良時代～平安時代前期の須恵器等が出土し、当該期の遺構が近在するとみられる。

＜弥生時代～古墳時代の遺構＞

竪穴建物SH1(第11図) 調査第1区の南西寄りで見出された方形の住居跡である。大きさは長辺4.3m、短辺3.7m、残存の深さ0.15mを測る。建物の主軸は、N-16°-Wをとる。周壁溝が



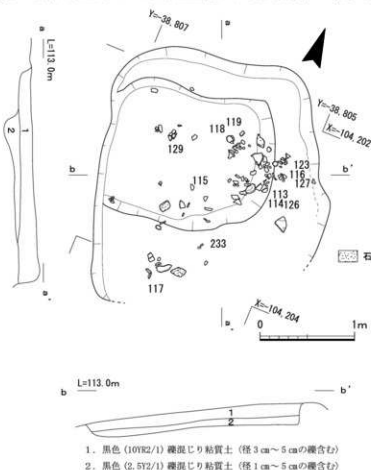
1. 黒褐色(2.5Y3/1) 礫混じり粘質土(径1～2cm大の礫多く含む)
2. 黒褐色(10YR3/1) 粘質土
3. 灰黄褐色(10YR4/2) 礫混じり砂質土
4. オリーブ褐色(2.5Y4/3) 礫混じり砂質土(径2～3cm大の礫含む)
5. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 礫混じり粘質土(径2～3cm大の礫多く含む)
6. 黄灰色(2.5Y5/1) 礫混じり粘質土(径3～4cm大の礫多く含む)
7. 暗灰黄色(2.5Y4/2) 礫混じり粘質土
8. 灰黄褐色(10YR4/2) 礫混じり粘質土
9. 黒褐色(10YR2/3) シルト
10. 暗褐色(10YR3/3) 粘質土

第11図 第16次調査1区 竪穴建物SH1平面・断面図

西壁および南壁に部分的に残存している。周壁溝の幅は0.1m、深さ0.05mを測る。埋土は大きく2層に分けられる。上層は黒褐色礫混じり粘質土(25Y3/1)、下層を暗オリーブ褐色礫混じり粘質土(25Y3/3)とし、上層には3～5cm大の礫を多く含む。床面直上から土器が出土し、貼り床等に相当する層位は確認されない。主柱穴は対角線上に位置する4基(SP1～SP4)から構成されるとみられる。柱穴は径0.35～0.45m、深さ0.15～0.2mを測る。柱間は、1.8～2.0mを測る。柱痕の部位は3基の柱穴(SP1・SP2・SP4)で確認できた。柱穴の埋土は、灰黄褐色礫混じり粘質土(10YR4/2)を基調とし、黒褐色シルト(10YR2/3)と暗褐色粘質土(10YR3/3)の径約0.25mの柱痕跡を確認した。また床面の南西隅で、土坑K5を検出した。平面形は円形を呈し、径0.45m、深さ0.2mを測る。柱穴と同様な小規模なものであるが、床面のコーナーに位置することや、土坑内から土器が出土していることから、貯蔵穴としての機能をもつ小土坑と推定される。さらに、竪穴建物の北壁中央床面で、北壁に接して方形の土坑SK6を検出した。一辺0.45m、深さ0.1mを測る。壁体中央で、壁面に接して検出し、深さも浅いことから、出入口部の床面造作に伴う施設の可能性がある。また、床面から炉などの火処とみられるような施設は確認できなかった。出土遺物は、床面および埋土から、土器や石製品(第27図186)が出土した。土坑SK6の周辺からは、直口壺(第21図7)、庄内式甕(第21図8)、小形器台(第21図9)などの古式土師器が出土し、南側の床面からは砂岩製の砥石が出土している。出土土器から、竪穴建物の時期は古墳時代前期初葉と推定される。

土坑SK2(第8図) 調査区南東の竪穴建物SH1の南側で検出した土坑である。平面形は楕円形状を呈し、長径0.7m、短径0.55m、深さ0.2mを測る。土坑内は断面「U」字形をなし、埋土は黒色シルト混じり粘質土(10YR2/1)を基調とし、埋土中からタタキ整形痕をもつ弥生系甕の体部片が出土した。出土土器から、弥生時代後期末～古墳時代前期初葉の土坑と推定される。

土坑SK7(第12図) 調査区北東において、溝SD3と一部重複して検出した土坑である。SD3の北西に位置し、南東端がこの溝により若干削



第12図 第16次調査1区 土坑SK7平面・断面図

平される。隅丸方形に近い形状で、短辺2.3m、長辺2.6m、深さ0.3mを測る。規模が大きいことから小形の竪穴建物の可能性を検証しつつ調査を進めたが、底部の形状に起伏があり、床面を整形した状況がみられず、柱穴等も確認されないことから、大形の土坑と判断する。埋土は、黒色粗礫混じり砂質土(10YR2/1)と黒色粗礫混じり粘質土(2.5Y2/1)の2層からなる。出土遺物は、中央部を中心に土師器壺や甕が出土している。壺2個体以上、甕10個体以上が出土しているが、土器の残存状況は悪く、廃棄土坑として使用されたと推定される。出土土器は、タタキ整形を施す弥生系甕やハケ調整甕、角閃石を多量に含むいわゆる生駒西麓産の胎土をもつ庄内式甕が共存して出土し、時期はおおよそ古墳時代前期初頭とみられる。生駒西麓産の胎土をもつ甕は2個体が出土しており、河内地域との交流を示すものとして注目される。

土坑SK10(第8図) 調査区北西部で検出した土坑である。後世の耕作に伴う削平を受け、西側は大きく削平を受けているが、平面形は楕円形状を呈する土坑とみられる。規模は長径1.7m、短径1.3m、深さ約0.4mを測る。断面はすり鉢状を呈し、埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土を基調とし、基盤層に由来する小礫が多く含まれる。土坑内の埋土中から、若干の弥生土器片が出土しているが、これらのなかに角閃石を多く含有するいわゆる生駒西麓産の胎土をもつ甕の底部(第21図26)があり、河内から搬入された土器として注目される。

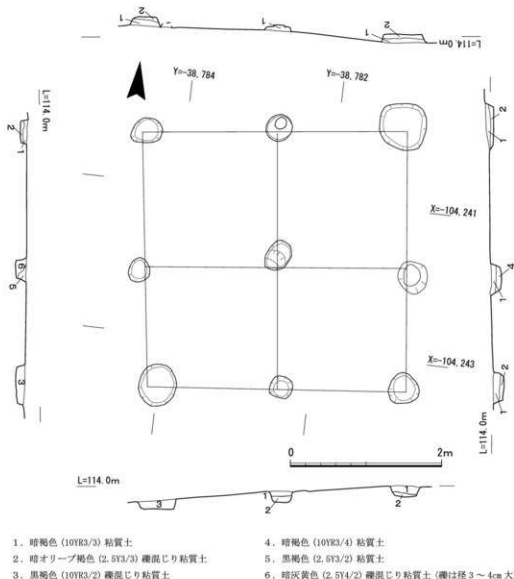
<平安時代以降の遺構>

掘立柱建物跡SB6(第13図) 調査区第1区、竪穴建物SH1の北西側で出された。柱間2間×2間の総柱建物である。南北柱間の寸法は2mと1.5~1.6m、東西柱間の寸法は1.6~1.8m、中間の東西ラインの通りは1.8m等間である。建物の主軸は、N-7°-Wをとる。柱掘形は、径0.3mの平面円形を呈し、深さは0.15~0.2mを測る。建物西辺の柱筋で、中央の東西柱列の柱穴群のいずれも西側で柱穴を検出しており、建て替えが行われた可能性がある。柱穴の埋土は、暗オリーブ褐色礫混じり粘質土(2.5Y3/3)、暗褐色粘質土(10YR3/4)を基調とする。柱穴の埋土から杯とみられる須恵器小片が出土しており、平安時代前期の建物とみられる。総柱建物であることから比較的堅牢な倉庫の建物と推定される。

土坑SK5(第8図) 調査区中央部で検出した土坑である。平面形は楕円形状を呈し、規模は長径1.3m、短径1.1m、深さ0.1mを測る。埋土から須恵器甕の体部や瓦器の小片が出土し、平安時代後期~末期の土坑と推定される。この土坑は最も標高の高い南東部のテラス面の北西端にあり、北西部のテラス面で検出した溝SD3とは検出面で約1mの高低差があるが、ほぼ同時期の遺構と推定される。

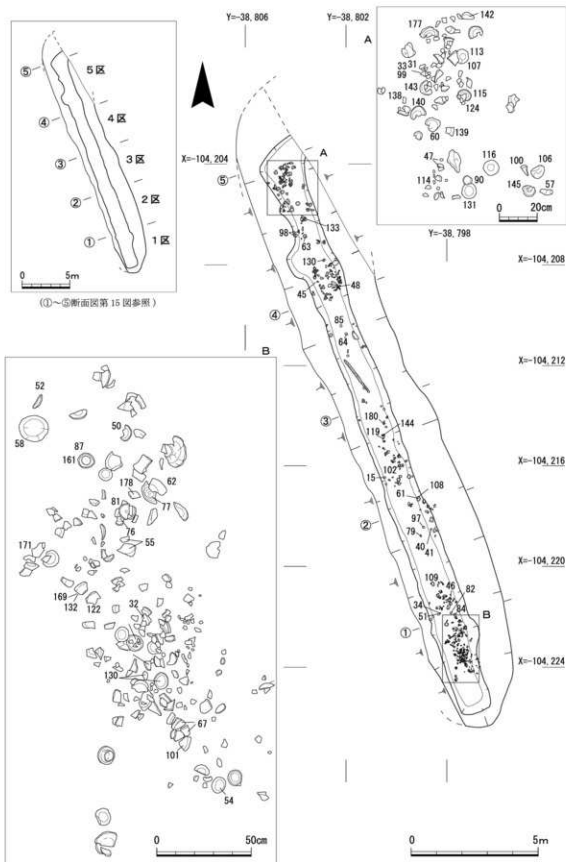
落ち込みSX8(第8図) 土坑SK10と重複して検出した不整形の浅い落ち込みである。規模は東西長約4m、幅2m以上を測る。南部は大きく後世の削平を受けている。底部は一定でなく起伏があり、深さ5~15cmを測る。遺物は埋土中から若干の須恵器や土師器が出土しているが、小片のため詳細な時期を明らかにすることはできない。SK10を削平する遺構であり、平安時代の時代の落ち込みと推定される。

溝SD3(第14図・第15図) 1区の北半で検出した大規模な溝である。後世の棚田の造成によ



第13図 第16次調査1区 掘立柱建物SB6平面・断面図

る北西部の一段低いテラス面で検出した溝で、南北方向に直線的に伸び、長さ23m以上にわたって確認した。主軸は、N-20°-Wをとる。溝の幅は約3.5m、深さは0.3~0.6mを測る。断面は、東辺の丘陵側が緩やかに立ち上がるが、平野部側の西半は約12mの幅でより深く掘削され、緩やかな「U」字形を呈する。溝の上層や西側は、耕作に伴う間壁で大きく削平されているとみられる。溝底のレベルは、北東部で約112.6m、南東部で約112.3~112.4mを測り、約0.2~0.3mの高低差があり、北東から南西へ流れていたと考えられる。溝の北西端は、調査区の東壁に接し、溝の北東延長側に位置する古墳時代前期初葉の土坑SK7と一部重複する。SK7を削平しているが、削平は南側のごく一部にとどまり、SK7はほぼ遺存していることから、溝がさらに北東に直線的に伸びないことは明らかであり、東壁との接続部周辺で東南方向に「L」字に屈曲すると推定される。一方、溝の南東端は、溝底が浅くなり掘形は自然に消滅しているようにみえるが、上層の削平が著しく、さらに調査区外の南方へ直線的に伸びていた可能性は否定できない。丘陵側と



第14図 第16次調査1区 溝SD3平面図

なる東側は、棚田により削り出されたテラスの崖面が迫っているため、東側に屈曲する状況はみられず、「コ」の字状に掘削された溝でないことは明らかである。

溝の埋土は、中間に四ヶ所に設定した土層観察用の畦によりおおそ7層に分かれる。基調となる埋土は、暗オリーブから黒褐色系シルト層であり、堆積状況から、溝内は滞水する環境にあったものと考えられる。溝内の土層は、一部花粉分析を実施しており、藻類の存在が確認され、こうした点からも滞水状況にあったことが推定される。溝内からは、大量の土器が出土しており、若干の布目瓦や土錘などの土製品、砥石などの石製品、板材などの木製品のほか、種子類が出土した。出土土器には、周辺から流れ込んだ弥生時代の土器・石器、古墳時代の須恵器・土師器なども若干あるが、ほとんどが12世紀後半の中世土器であり、一部に13世紀前葉に下降する可能性があるものを含む。中世土器は整理箱約40箱が出土し、供膳具である土師器皿と瓦器椀の2器種で出土土器全体のほとんどを占める。その他の土器として、瓦器皿、瓦質陶器、須恵質陶器、山茶椀、灰釉・緑釉陶器、中国製陶磁器が含まれる。溝内の遺物は、5小区(第8区・第14区)に分けて取り上げを行った。各区から中世土器が出土したが、特に1・2区と3区東部では、土師皿・瓦器椀などの供膳具が集中して出土している。1・2区の土器群は、完形率が高く、口縁部を西側に向け、折り重なるように出土しており、東の丘陵側からまとめて投棄された状況が伺える。内宴や節会などの祭事に使用された食器類が、一括して廃棄された可能性がある。また、これらの土器とともに桃核や胡桃などの種子が多量に出土した。特に桃核は50個体以上が出土し、人為的に廃棄されたものとみられる。桃や胡桃などを祭事に使用した可能性があろう。中国製陶磁器類は、各区から出土し、破片数で150個体を超え、全出土土器における比率は比較的多いと考えられるが、細片が多く、瓦器椀や土師器皿のように完形で出土しているものは認められない。また、3区中央では、幅0.1m、長さ約0.7m、厚さ2～3cmの板材が出土した(第14区)。棟板などの可能性を想定し、赤外線照射を実施したが、墨書等は認められなかった。

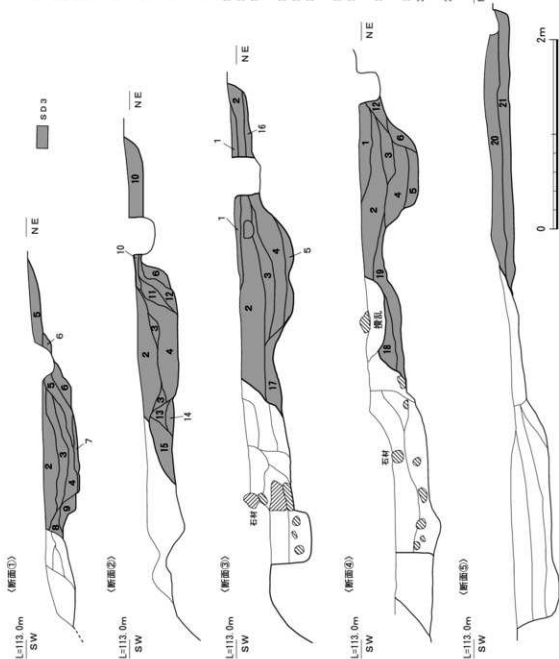
以上、SD3は、直線的に掘削された溝として約23mにわたって確認したが、北西端で丘陵側に「L」字状に屈曲するとみられることから、区画溝と考えられる。丘陵側の高台に想定される居住区を区画する溝と推定される。出土遺物は、12世紀後半に帰属し、破片ながら布目瓦や貴重な青白磁を含む中国製陶磁器類の出土がみられることから、東の丘陵側に富裕者層の居館などの存在する可能性がある。

溝SD12(第8区) 調査区北西部で検出した東西方向の溝である。幅0.3m、深さ0.15mを測る。遺物は出土していないが、掘削面の層位から、中世以降の耕作に伴う素掘り溝と推定される。

溝SD13(第8区) 調査区北西部で、SD12の南側で検出した溝である。東から南西方向に掘削され、規模は幅0.3m、深さ0.2mを測る。遺物は出土していないが、掘削面の層位からSD12と同様、中世以降の素掘り溝と推定される。

流路SD9(第8区) 調査区北西部中央で、SX8と重複して検出した溝である。東から西へ向けて流れる流路とみられる。長さ4mにわたって検出し、規模は、幅0.5m、深さ0.2mを測る。SX8を削平して掘削されることや、土師器や須恵器細片が出土し、平安時代以降の溝と推定さ

1. 暗オリーブ色 (S14/3) 礫混じり粘質土 (多量の土砂を含む)
2. 褐色 (7.5V4/2) 礫混じり粘質土 (径1~2cm大の礫多く含む)
3. 黒色 (10YR2/1) シルト
4. 黒褐色 (10YR2/1) シルト
5. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 粗面細粒砂質土 (径1~3cm大の礫含む)
6. オリーブ黒色 (5Y3/1) 礫混じり粘質土 (径0.5cm~1cm大の礫含む)
7. オリーブ黒色 (5Y3/2) 礫混じり粘質土 (径0.5cm大の礫含む)
8. 黒褐色 (2.5Y2/2) 礫混じり粘質土 (径0.5~1cm大の礫含む)
9. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粗礫混じり粘質土 (径2~3cm大の礫含む)
10. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) シルト質粘質土
11. 暗オリーブ色 (7.5Y4/3) シルト
12. 灰色 (5Y4/1) 礫混じりシルト (径10~20cm大の礫含む)
13. 黒褐色 (10YR2/1) シルト
14. におい黄褐色 (10Y5/4) 粘質土
15. 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂礫混じり粘質土 (径2~3cmの礫含む)
16. におい黄褐色 (2.5Y5/3) 礫混じり粘質土
17. 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂礫混じり粘質土 (径2~3cmの礫含む)
18. 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂礫混じり粘質土 (径2~3cmの礫含む)
19. におい黄褐色 (10Y5/4) 粘質土
20. 褐色 (10YR6/1) 粗礫混じり粘質土 (径5~10cm大の礫含む)
21. 黒褐色 (10YR2/1) 粘質土 (径2~4cm大の礫多く含む)



第15図 第16次調査1区 溝SD3断面図

れる。

②2区

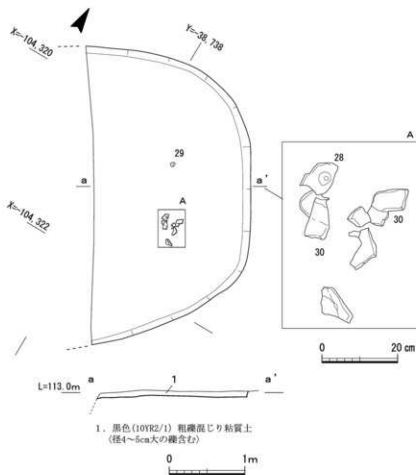
調査面積240㎡を測る。1区の南東において、東西の道路面を挟み約20mの距離において設定した調査区である。2区は、丘陵の張り出し部に位置する1区南部から、南東へやや下降した傾斜地にあり、調査前には1区と同様に、路面造成のための整地がなされていた。発掘調査は、こうした客土や、棚田の耕作土、丘陵部からの流土を重機によって除去して進めた。

堅穴建物1基、流路1条、落ち込み1基のほか、柱穴群を検出した。

堅穴建物SH11(第16図) 南東部で検出した堅穴建物である。西側は、棚田の造成によって削平されているが、平面形は隅丸のやや歪な方形を呈する。規模は長辺約2.5m、短辺1.5m以上、深さ0.15mを測る。床面が平坦に削り出され、一部火処とみられる被熱した部分が認められることから、柱穴は確認できなかったが、堅穴建物の残欠と判断した。埋土は、暗黄灰色砂礫混じり粘質土であり、建物床面の土坑内から布留甕が出土し、埋土中から土師器高杯や手づくね土器が出土した。時期はおおよそ5世紀中葉の古墳時代中期の堅穴建物と推定される。

溝SD202(第8図) 調査区中央で検出した東西方向の流路である。幅1.1m、深さ0.2mを測る。灰色礫混じり粘質土を埋土とする。遺物は出土しておらず、時期は明確にできないが、壁断面にみる掘削レベルの検討から、中世の溝と推定される。

落ち込みSX203(第8図) 調査区中央で、西壁周辺で一部を検出した落ち込みである。SD202と重複して検出し、先行する溝である。西半は調査区外となるが、平面形は楕円状を呈するとみられる。長径3.0m以上、短径1.5m、深さ0.3mを測り、断面はすり鉢状をなす。黒褐色色礫混じり粘質土を埋土とし、土師器の細片が出土している。埋土の状況やSD202に先行すること



第16図 第16次調査2区 堅穴建物SH11平面・断面図

から、中世以前に形成された落ち込みとみられる。

2区では、北西部を中心に6基の柱穴を検出したが、柱筋の復元は困難なものであった。また、埋土から土師器片を出土する柱穴がみられたが、詳細な時期を明らかにできる資料ではない。

(高野陽子・黒坪一樹)

3) 第18次調査(平成26年度調査)

第18次調査地は、第16次調査における調査第2区の南東側に隣接している。道路建設がさらに南へ延伸される部分である。57×7mの細長い調査区を、調査第3区とした。16次調査では弥生時代から鎌倉時代にかけての良好な状態の遺構群が検出されたので、こうした資料の検出が予想された。掘削の結果、棚田の造成にともなう新しい掘削により、遺構面を捉えた箇所は、調査区北西端と中間部の2箇所であった。遺構には古墳時代とみられる竪穴建物1基、平安時代から鎌倉時代にかけての土坑1基、柱穴群がある。また出土遺物には、柱穴、土坑内から出土した須恵器、土師器のほか、包含層や遺構面の精査中に出土した弥生土器、古墳時代須恵器・土師器、中世の土師器皿・瓦器碗・輸入陶磁器類・銭貨などがある。

(1) 基本層序

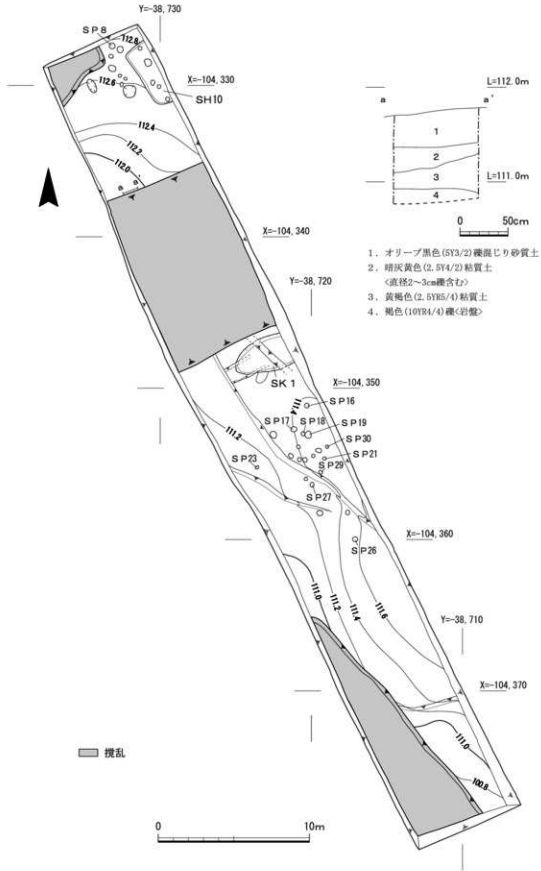
調査第3区の層序は、現在の地表面から棚田造成、圃場整備による削平を深く受けている。それは南端では地表下約2m、北東端で0.65mに達していた。平安時代から鎌倉時代の遺物包含層は4層(黒褐色礫混じり粘質土)・6層(オリープ黒粘質土)・7層(灰オリープ粘質土)・17層(オリープ黒粗礫混じり粘質土)である。さらに遺構であるSH11やSK1の埋土も、25層(褐灰粗砂礫)・26層(灰黄褐色粗砂混じり粘質土)・27層(オリープ黒粗砂礫混じり粘質土)の直上に辛うじて残存している状況であった。25層～27層の地山面は扇状地性の堆積による礫が多いが、その下位を断り割って断面を観察した結果、礫をほとんど含まない固くしまった暗灰黄色粘質土(第17図2層)が現れた。下層では東側の山塊から谷部を埋めるように流れてくる土砂の勢いが想定される。土砂の流入がある程度落ち着き、古代よりこの付近の開発が進んでいったのであろう。

(2) 検出遺構

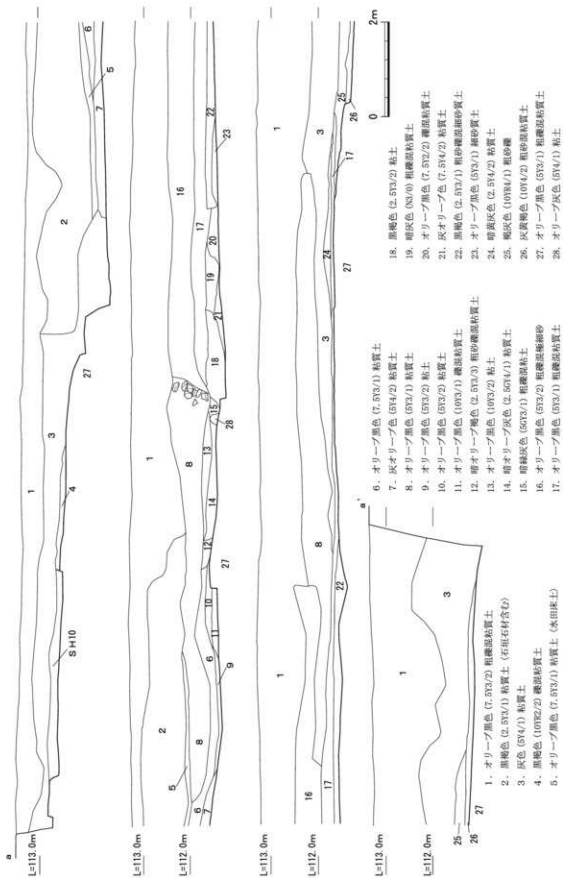
竪穴建物SH10(第19図) 調査区北東壁により、部分的な検出である。隅丸方形とみられ、一辺約4m、残存の深さ0.35mを測る。支柱穴と思われるものは2基ある。底面および柱穴からも出土遺物はなく、時期は明確ではない。北西側に隣接する昨年度の調査第2区から、類似の古墳時代中期の竪穴建物の検出をみているので、本例も当該期の可能性がある。

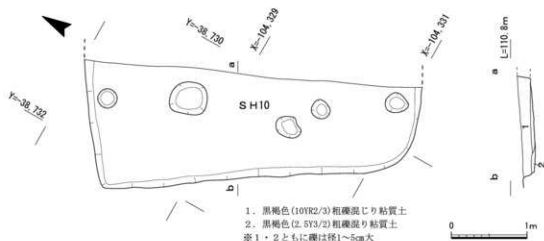
土坑SK1(第17図) 土坑SK1は近現代の棚田に伴う石垣および暗渠によって壊され、部分的な残りである。長軸3.8m上、短軸2.3m、深さ0.2mである。埋土は暗オリープ灰粘質土(第18図14層)である。平安時代の須恵器、鎌倉時代の瓦器碗・土師器皿などが出土している。

柱穴群 土坑SK1の南東側で、南の谷部に向かって緩やかに傾斜していく箇所から、合計18基検出された。すべて円形で、大きさは直径0.3cm前後、深さ0.15～0.25mを測るが、建物などの抽出はできなかった。柱穴の10基(S P16～19・21・23・26・27・29・30)から平安時代～鎌倉時



第17図 第18次調査3区 遺構配置図





第19図 第18次調査3区 竪穴建物SH10平面・断面図

代の須恵器や瓦器碗、土師器皿が出土した。

調査区北西部でも大小の柱穴および土坑が検出された。柱穴SP8などから土師器・瓦器の細片の出土がみられ、これらは中世のものである。出土面までの掘削作業の過程で、さらに包含層から弥生時代後期から古墳時代の土器も出土した。(黒坪一樹)

4. 出土遺物

1) 第15次調査(第20図1~6)

今回の発掘調査で出土した遺物は僅かで、整理箱1箱に満たない。出土遺物は土師器・瓦器・須恵器からなる。時代的には古代末から中世に属するものである。第4トレンチおよび第5トレンチから出土した6点(第20図1~6)についてみる。1は土師器皿である。口径9cm、器高1.3cmを測る。ナデ成形により成形される。2は、瓦器碗の口縁から体部にかけての破片である。外面にミガキ調整がみられるが、内面はローリングをうけて調整はほとんどわからない。口径13.4cmである。3は瓦器碗の底部である。比較的残りのいい断面三角形の貼り付け高台をもつ。高台径4.7cmである。4は須恵器甕の体部片である。表面に糜状文、裏面は同心円文タタキをとどめる。5は、頂部に扁平宝珠の摘みをもつ須恵器蓋である。6は、深めの土師器皿の断片で、口縁部径12cm、残存の器高は22cmである。(竹原一彦)

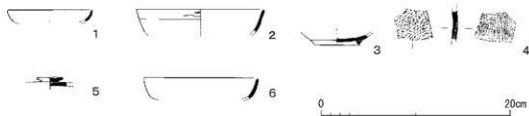
2) 第16次調査

1区・2区出土遺物(第21図~第26図)

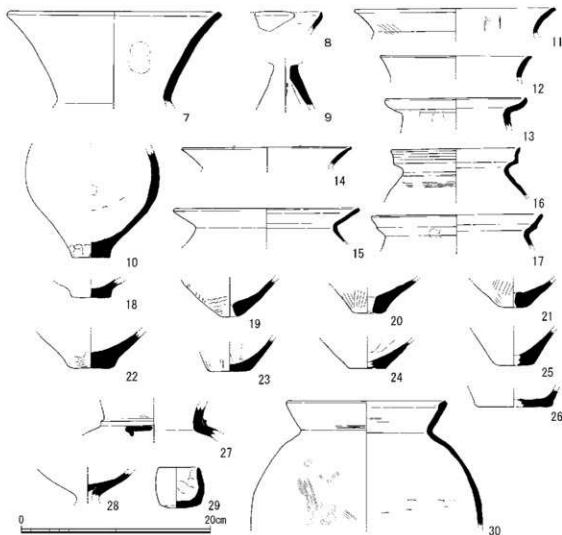
第16次調査では、整理箱約40箱の遺物が出土した。出土物には、土器・石製品・木製品・土製品、瓦、種子などが含まれる。このうち、弥生時代~古墳時代の土器2箱を除き、残りのほとんどは中世土器であり、出土土器全体の90%以上は1区の溝SD3から出土した平安時代末期の土器である。以下、時期ごとに出土遺物について説明する。

(1) 土器

<弥生~古墳時代の土器>(第21図)



第20図 第15次調査出土土器



第21図 第16次調査出土土器(1) (土坑SK7・竪穴建物SH1・竪穴建物SH11)

1区(第21図7~28) 7~9は、竪穴建物SH1から出土した。7は、土師器の直口壺である。復元径約23cmを測り、浅黄色(25Y 7/2)を呈する。8は、口縁端部を摘みあげる庄内式甕の口縁部である。角閃石を含む暗褐色(7.5YR 3/3)の胎土をもち、いわゆる生駒西麓産の河内から搬入された甕とみられる。9は、中空の小形器台の脚部である。以上のSH1の出土遺物は、庄内式甕が細片であるため、混入の可能性も考えられたが、小形器台脚部の中空軸部に一定の厚みを持たせていることから、古墳時代前期初葉の土器の特色をみることができる。直口壺の口縁部を薄

く仕上げる特徴とあわせ、SH1出土の7～9は一括資料としてみる事ができよう。10～25は、SK7から出土した。10は、壺の下半部である。厚みのある底部を特色とする。体部最大径は14.4cmを測り、色調は灰白色(10YR8/2)を呈する。11・12は、単純口縁をなす、いわゆる第5様式系の弥生系甕の口縁部とみられる。一部にタタキ痕を残す。13は、やや受け口状に内湾気味に立ちあがる口縁部をもつ甕である。14・15は、庄内式甕の口縁部である。いずれも角閃石を含む胎土をなし、14は褐色(7.5Y4/3)呈し、15は暗褐色(7.5YR3/3)を呈する。河内からの搬入土器とみられる。16は、有段口縁をなす受け部の屈曲の明瞭な北陸系土器である。口縁部外面に擬凹線文を施す。17は、口縁部をナデ調整する有段口縁の北近畿系土器である。16は、口径13.6cm、17は口径18.0cmを測る。18は、壺の底部とみられる。19・20は、外面にタタキ調整を施す底部で、穿孔がみられることから、甕として利用されたとみられる。21・22は、外面タタキ調整を施す弥生系甕の底部である。22～25は、ハケ調整を施す甕の底部である。底部輪台技法によるとみられる弥生系甕に比べて底部が薄いことを特徴とする。26は、落ち込みSX10から出土した。やや薄く、扁平な壺底部である。胎土は、角閃石を多く含み、暗褐色(7.5YR3/3)を呈することから、いわゆる生駒西麓産の河内からの搬入品とみられる。27は、1区溝SD3の5区から出土した壺の一部である。頸部屈曲部に付された貼り付け突帯は、細く厚みの薄いものであり、弥生時代後期末～古墳時代初頭の壺の特徴を示す。色調は、にぶい黄橙色(10YR7/4)を呈する。また、体部にはベンガラとみられる赤色顔料が付着している。胎土は、径1mm以下の極めて微細な多量の砂粒を混和剤として含む特徴的なもので、山陰のなかでも因幡などでみられる土器胎土に類似する。

2区(第21図28～30) 2区堅穴建物SH11から出土した。28は、土師器高杯の杯部である。杯部に明瞭な屈曲を持たないタイプで、古墳時代中期中葉頃の所産であろう。29は、手づくね土器の小形壺で、外面をナデ調整し、内面に指頭圧痕を残す。口径4.2cm、高さ4.3cmを測る。30は、布留形甕である。外面は摩耗が著しいが、斜め縦ハケ調整を一部に認める。口径は16.6cmを測る。胎土は石英・長石・チャートなどの砂粒を含み、色調は橙褐色(5YR7/6)を呈する。口縁端部は肥厚しているが、横ハケが喪失していることから、最終段階の布留甕であり、28の土師器高杯と同様、古墳時代中期中葉頃の所産と推定される。(高野陽子)

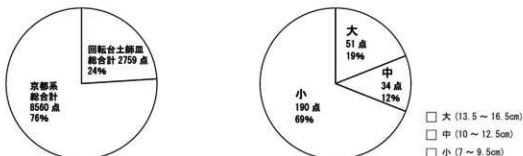
<古代～中世の土器>(第22図31～179)

溝SD3(第22図～第25図) 溝SD3から出土した遺物は、主に平安時代後期(12世紀後半)から鎌倉時代前半(13世紀前半)までの土器類で、土師器皿、瓦器椀、瓦器皿、瓦質陶器、東播系須恵質陶器、山茶椀、中国製陶磁器などがある。なかでも供膳具である土師器皿と瓦器椀の2器種で出土遺物全体のほとんどを占める点に大きな特色がある。さらに平安時代の灰軸・緑軸陶器、布目瓦、弥生土器・石器類、土錘、大量の胡桃・桃果核がある。

破片ながら中国製陶磁器類は146点と多く出土し、有力者の存在をうかがわせる。また数量的には少ないが、濃尾平野を主な産地とする山茶椀の出土状況から、東海地方との交流も推察することができる。この溝SD3内出土土器類についてはまとめて観察表で示している。さらに個体数も含めた破片点数を器種ごとに算出している(表1)。

付表1 溝SD3出土土器(瓦器・土師器以外)内訳表

合計	土師皿					須恵質 陶器	瓦器		緑釉陶器	灰釉陶器	東海系 山茶碗	瓦質土器 (羽釜・ 鍋など)	瓦	中国製 陶磁器	土師
	全破片 合計	底部片		底部片 合計	須恵質 陶器		瓦器								
		京都系 高台	糸切				椀	皿							
35904	8560	148	2759	11467	341	9148	33	3	2	3	50	21	164	101	



第22図 溝SD3土師皿底部調整・法量別内訳グラフ

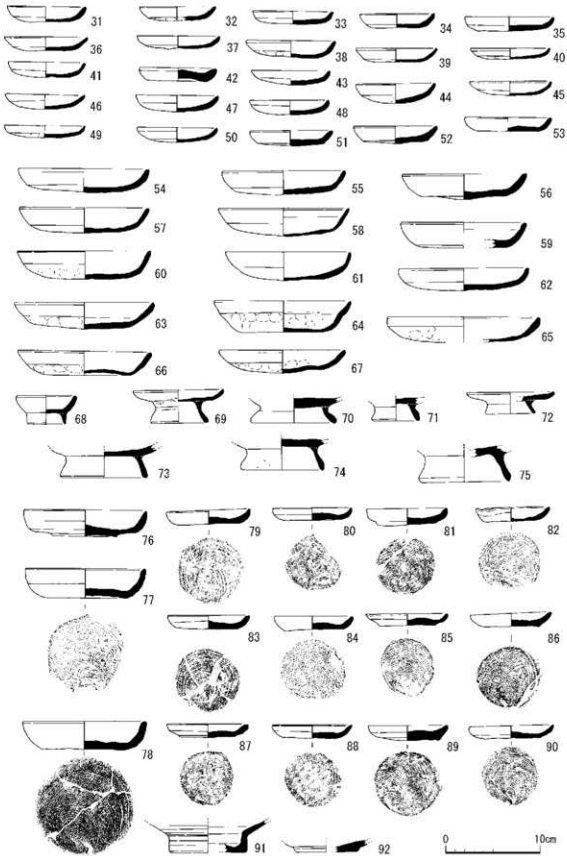
土師器皿(第22図35~91)は、圧倒的な出土量で、破片点数は36,000点を数える。胎土は精良で、色調はわずかに赤味を帯びた淡灰褐色のものがほとんどである。底部の特徴から、手づくねによる底部ナデ成形の京都系土師器皿(31~67)、回転台による糸切り底のもの(76~90)、高台付のもの(68~75)、底部を深く挟るように仕上げたもの(91)などがある。最も割合的に多いのは、京都系土師器皿で、底部から直線的に口縁部が張り出すものである。糸切り底の点数はナデ成形のものに次いで多い。貼り付け高台付の土師器皿は少ない。

底部の全破片点数11,467点を全体(100%)としてナデ成形の京都系土師器皿、回転台による糸切り底、貼り付け高台をそれぞれの破片点数と占有率を示すと、ナデ成形のもの8560点(74.6%)、糸切り底のもの2759点(24.1%)、貼り付け高台のもの148点(1.3%)である(第27図、表1)。糸切り底の土師器皿の占有率がおよそ24%である点はかなり高いといえる。

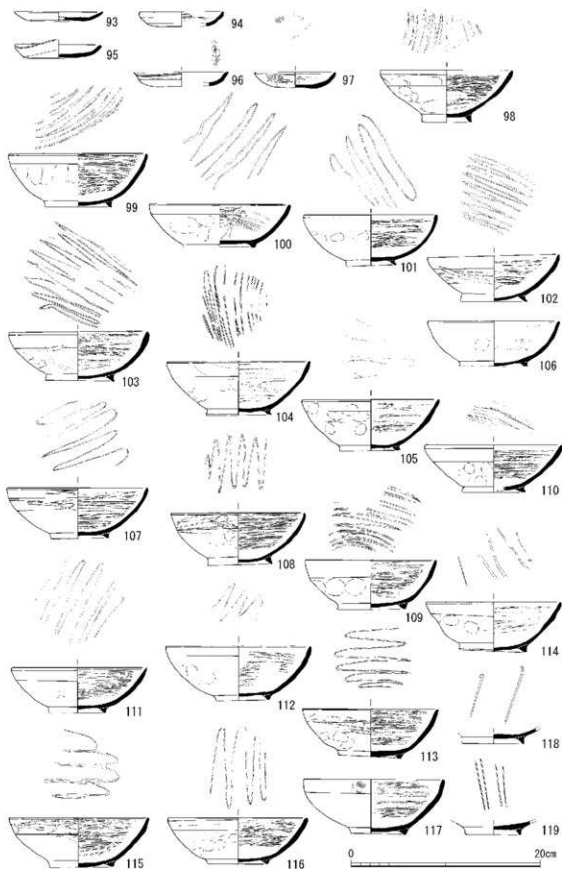
なお灯明皿として油の燃焼痕をとどめるものはきわめて少ない。91の資料は黒色の付着物が顕著にみられる。92は風化がすすんでいるが、平安時代無軸陶器碗の底部片であろう。これらはSD3ではなく、一段高いテラス面北側から出土した。

瓦器皿と瓦器椀(第22図31~34・第23・24図)である。瓦器椀は土師器皿に次いで多く、破片点数は3400点である。合計48点を図化した。樟葉型瓦器椀の影響を受けた丹波型瓦器椀である。図化したもので口径の平均値は14.3cm、器高の平均値は5.4cmを測る。外反しない口縁端部、手づくね成形で細かなヘラミガキ、さらに比較的大きな高台径などを特色とする。輪高台のつくりはやや踏ん張った形態をもつものや、断面がやや三角形を呈しているものがみられる。体部の形態は、12世紀代の特徴か、直線的に伸びるものよりも緩やかに内湾するものが多い。体部外面におけるヘラミガキに省力化の兆しが見える。見込における暗文は楕円形や直線を意識してのジグザグ文(98~105, 107~116, 118~134)が多いが、連結輪状文をとどめるもの(135~142)も目立つ。12世紀後半から13世紀前半のなかで捉えられる資料群である。

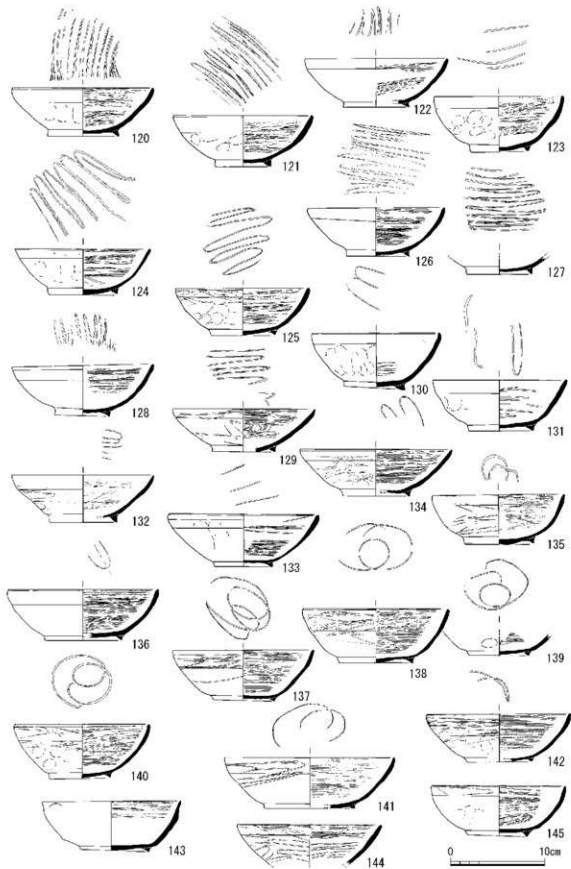
瓦器皿は小破片の算出から漏れていることを考慮してもその点数は非常に少ない。25点を確認し、9点を図化した(第22図31~34・23図93~97)。口縁部径の平均値は9.4cm、器高の平均値は



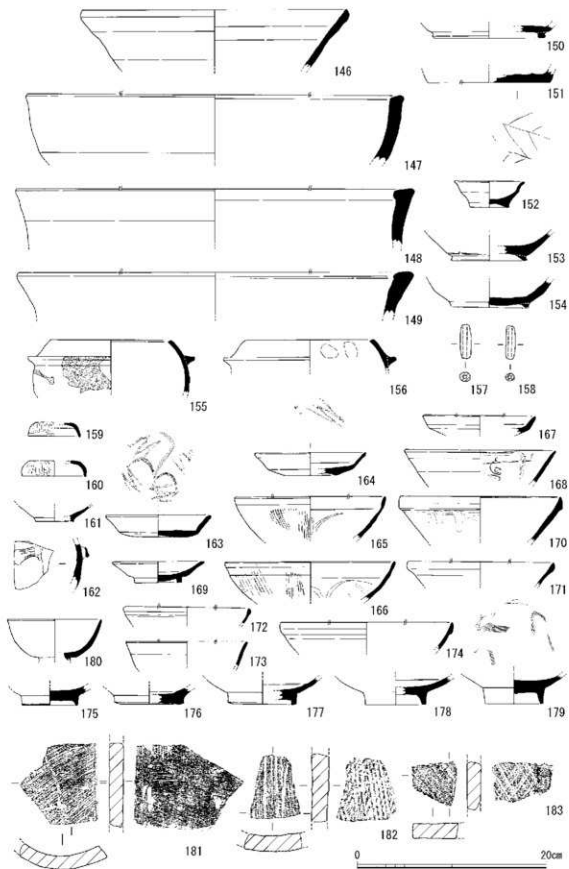
第23図 第16次調査 出土土器(2)



第24図 第16次調査 出土土器(3)



第25図 第16次調査 出土土器(4)



第26図 第16次調査 溝S D 3出土陶磁器類、須器、瓦

1.55 cmを測る。使用あるいは廃棄後のローリングによる磨滅により、97以外、ヘラミガキおよび暗文の良好な状態を保つものはない。

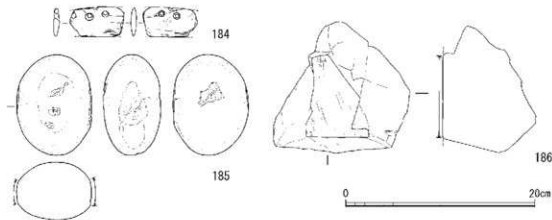
146は東播系須恵器の鉢である。出土点数は少ない。口縁部端部はやや内側に傾斜する。内外面とも回転ナデ調整で仕上げられている。147～149は瓦質鉢の口縁部片である。150は平安時代の貼り付け高台をもつ須恵器杯Bの底部片である。151も平安時代の須恵器壺の底部片である。底部外面に木の葉圧痕をとどめている。

152、153は濃尾地方で焼かれた山茶碗で、152が小皿、153が碗である。154も東海系灰釉陶器の壺底部片である。152と153は貼り付け高台をもち、回転ナデ調整される。見込みの部分はきめが細かくすべすべの触感となっている。152の小皿の高台端部に稲穂とみられる圧痕がみられる。155と156は瓦質釜で、丸みを帯びた体部の形態は京都型ではなく、河内・和泉地方の形に近いものである。157・158は土鍾である。土鍾は合計100点で、これらが平均的な形と大きさである。

159と160は青白磁合子の蓋である。精緻なつくりで、12世紀中頃のものである。160は青白磁皿である。高台先端のみ露胎している。161は青白磁碗の断片である。162は白磁四耳壺の体部上半(肩部)の断片である。黒色粒を含むが精良な胎土をもつ。163・164は同安窯系の青磁皿である。底部外面は施釉しない。見込み部分に特徴的なジグザクの櫛目描文がみられる。165、166は同安窯系の碗である。外面に細かな縦方向の櫛目文がみられる。167・168・図版236は龍泉窯系青磁である。167の皿は見込みに櫛目が236は草花文が施される。施釉により深緑色。168は碗である。画花文および飛雲文が描かれている。180は内外面とも無文の青磁碗である。曲口碗の形態で、青緑色の鮮やかな発色を呈している。

中国製白磁類には皿(169)と碗(170～179)がある。168は高台をもち、見込みには重ね焼きによる砂目と露胎部が同心円状にみられる。なお、169の白磁皿はS D 3ではなく、1区西側で、173と178の白磁碗周辺精査中に出土した。

白磁碗は、大宰府条坊跡XVの陶磁器分類案におけるⅡ類(10世紀後半～11世紀前半)、Ⅳ類およびⅤ類(11世紀後半～12世紀前半)のものがある。172はⅡ類に属し、丸みを帯びた体部で体部外面の口縁部以外をヘラケズリしている。170・171・174・176はⅣ類である。口縁端部は玉縁で、



第27図 第16次調査 出土石器

その厚さには差がある。体部の器壁は厚く(170)、底部も肉厚(176)である。178と179は高台のみであるが、細く高く直立する白磁碗第Ⅴ類の特徴を備えている。179は見込みに櫛目文がみられる。

(2)瓦・石製品(第27図)

181～183は、1区溝S D 3から出土した古代の布目平瓦の破片である。184は、弥生時代中期の石包丁である。粘板岩製石剣を再加工したものとみられる。185は石器製作または調理具としての砂岩製敲石(凹石)である。184・185はいずれも溝S D 3から出土したものであり、混入遺物である。186は、砂岩製の砥石で、1面に砥面がある。1区堅穴建物S H 1の床面から出土した。

(黒坪一樹)

(3)土師器皿の組成について

1区溝S D 3出土土器のなかで、土師器皿の調整には、ナデ整形のものと糸切り底がみられるが、特に糸切り底の土師器皿の占有率がおおよそ24%である点は、亀岡盆地における他遺跡の同時期の遺跡・遺構よりもかなり高く、当遺跡の顕著な特徴といえる。糸切り底をもつ土師器皿の出土状況を周辺遺跡でみておきたい。時期は、亀岡盆地で京都系のナデ調整による土師皿が主体となる平安時代末期から鎌倉時代前期(12世紀～13世紀初め)のものに限った。

南丹市野条遺跡の第10次調査の報告例のなかで、溝S D 1から出土した細片587点のうち、底部糸切り底のものは4点を数えるにすぎない。さらに同遺跡の井戸S E 3内の土師器皿の破片を報告の対象外となった細片を含めて観察した結果、破片605点中、8点の底部糸切り底のものを確認した。このように野条遺跡ではごく少量であるといえる。南丹市八木城跡第2次・第3次調査では、麓の春日神社の調査区からは、50点近くある土師器皿のうち、糸切り底の土師器皿は4点で非常に少ない。出雲遺跡は7次・8次、12次・14次調査で鎌倉時代の土師器皿が出土しているが、第8次調査の土坑S K 0801に1点と土坑S K 0804に2点糸切り底の特徴がわずかに確認される。さらに第12次調査では土坑SK1201から小皿24点と大皿1点が出土し、そのうち小皿4点のみ糸切り底である。これらの調査はすべて今回の調査地から出雲神社を越えて南側で行われている。なお、先行する時期の比較資料の一つとして、池上遺跡の第5次調査をあげる。ここでは野条遺跡とは対照的に土師器皿の中では糸切り底が主体を占める。井戸S E 270からは小皿35点中23点の糸切り底部を持つものが出土している。土坑S K 271から出土した土師器皿は6点すべてが糸切り底の底部である。折り重なるように出土した土器のうち土師器皿以外はほぼ黒色土器である。柱穴S P 360からは大皿1点と小皿3点が出土し、そのうち小皿3点が糸切り底のある底部である。池上遺跡の資料は、黒色土器との共存関係からおおよそ11世紀後半頃に帰属する。

以上のように、亀岡盆地では、11世紀の段階には、糸切り底の割合はなお高い状況がみられるが、12世紀以降は、盆地内では京都系のナデ調整による土師皿が基調となる。そのなかにあって、今回の溝S D 3における糸切り底の比率は、周辺の遺跡と比較して高率であることに特色がある。出雲遺跡内であっても、12世紀以降、糸切り底の土師器皿の出土量はきわめて少なく、出雲遺跡の同時期の遺構のなかでも、溝S D 3のみに顕著な集中を見せている点を指摘しておく。

(武本典子)

3) 第18次調査**3区出土遺物(第28回)**

第18次調査では、整理箱約8箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器・瓦・鉄器・銭貨などがある。第18次調査第3区から出土した遺物は、中央部の土坑SK1から須恵器・土師器がまとめて出土した。その他の遺物は、柱穴SPおよび包含層中から出土したものである。

(1) 土器

187は弥生時代後期の有段口縁甕である。口縁に浅い擬凹線文を施す。188は弥生土器甕の口縁部の小片である。189は弥生土器の壺の底部である。190は弥生時代後期の器台の受け部口縁である。4条の擬凹線文がみられる。191は弥生土器の器台ないしは高杯の脚部とみられる。以上の弥生土器は、調査区北西部端の包含層(オリブ黒礫混じり粘質土)から出土した。192は古墳時代の短脚高杯の脚部片である。中間部に透かしがある。193～197は平安時代の須恵器類である。193は須恵器蓋の断片である。扁平なつくりで、円形にめぐる輪状つまみが貼り付けられている。194は深みのある高台付の須恵器杯である。195と196も須恵器杯の底部片である。197は須恵器壺の口縁部片である。192・194・196は土坑SK1から、197は柱穴27から、その他は柱穴群周辺の精査中に出土した。198～210・215は12世紀後半から13世紀にかけての土師器皿である。209のみ底部糸切で仕上げられているが、その他はナデ成形による。口縁端部が内湾するもの(198～207)、端部が肥厚するもの(198・201・202・206・215)、端部が外反するもの(208・209・210・211)がある。215は口縁部径13.8cmの測る大型のものである。

213は体部が底から直角近くでたちあがり、深みをもつ土師器杯である。212は瓦器皿、214～221は瓦器碗の体部・底部片である。12世紀後半～13世紀にかけてのものである。216は内面に細かなヘラミガキがみられが、その他の資料は磨滅により明確ではない。底部の貼り付け高台の形態は断面三角形で、比較的しっかりしているもの(220・221)から少し退化したもの(217～219)までである。222は瓦質甕の口縁部片である。口縁は大きく外反し、端部に面をもつ。外面に右上がりのタタキ痕、内面は横・斜め方向に断続的なハケ目がみられる。223は中国製白磁碗の口縁端部である。大宰府在地土器分類表の第IV類にあたる。224は小型の中国製青磁の蓋である。

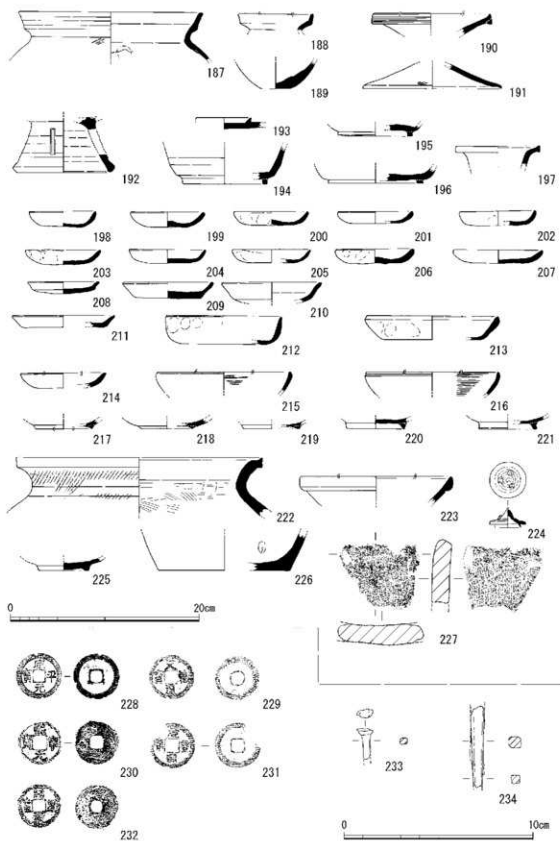
225は灰陶陶器の底部片である。ケズリ出し高台をもち、底部外面は露胎している。226は丹波焼の壺底部片である。227は布目平瓦の破片である。

(2) 銭貨

銭貨は5枚出土し、すべて北宋銭である。228は咸平元寶(999年)、229は天禧通寶(1017年)、230は熙寧元寶(1068年)、231は元豊通寶(1078年)、232は紹聖元寶(1094年)である。231の元豊通寶、232の紹聖元寶は土坑SK1内から、その他はSK1および柱穴群周辺の包含層中からである。

(3) 鉄器

鉄製釘が2点出土した。233は頭部、234は頭部を欠く釘身部である。銭貨と同じ、土坑SK1



第28図 第18次調査 出土遺物

～柱穴群の面的精査で出土したものである。

5. まとめ

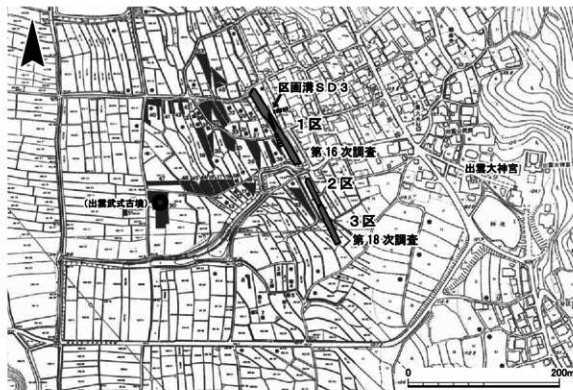
今回の調査では、南北に1kmにおよぶ出雲遺跡の北半の各所を調査し、弥生時代から中世までの各時期の遺構を検出した。弥生時代後期と古墳時代前期～中期、さらに平安時代の建物や土坑、溝などを確認し、眺望の良い丘陵斜面に各時代の遺構が広がることが判明した。三か年の調査のなかで、特に大きな成果がみられたのは第16次調査であり、古墳時代前期の遺構群や輸入陶磁器類をはじめとする大量の土器を出土した平安時代末期の大規模な区画溝を確認したことをあげる事ができる。以下、主要な遺構群の評価について述べ、調査報告のまとめとしたい。

出雲遺跡の既往の調査では、古墳時代前期～中期の堅穴建物が北部を中心に確認され、集落の拡がりが見込まれていたが、今回の調査においても3基の堅穴建物を確認することができた。これまでに報告された古墳時代の堅穴建物は、出雲武式古墳(径19m)と同時期の古墳時代前期後半の建物が最も古いものであったが、今回の調査では古墳時代前期初葉の庄内併行期に位置づけられる建物を確認した。亀岡盆地の前期古墳は、これまでのところ出雲武式古墳と篠町向山古墳の存在が知られるだけであり、出雲遺跡一帯は盆地のなかでも、古墳時代前期の地域勢力の拠点地域の一つであることが知られる。その基盤集落の成立が古墳時代前期初葉にあることを示す資料として、今回の調査成果は評価されよう。出土遺物には、河内や北陸、北近畿との交流をしめす搬入土器が含まれ、地域間交流の上でも注目されるものとなった。

つぎに、平安時代末期の遺構として、南北に直線的に掘削され、区画溝と推定される溝SD3についてみておきたい。溝SD3は、丘陵の傾斜地縁辺に掘削されることから調査地東側高所に想定される居住域を区画する溝の可能性が高い。溝からは大量の土器が出土したが、これらには青白磁の合子や皿、白磁碗、青磁皿などの多くの中国製陶磁器類が含まれており、丘陵の高所側に有力者の居館の存在を想定することが可能である。調査地点の東方200mには、丹波国一宮の延喜式内社出雲神社が位置しており、その性格を考えるため、出雲神社の平安時代末期の状況についてみておきたい。

出雲神社は、天福二年(1234)の関東御教書に「丹波国出雲社は元明天皇御宇和同二年社壇を立てられ」とあり、和同二年(709)年の創建とされる。同社は、文献などからかつて神宮寺が存在したことが知られるが、境内から亀岡市篠窯跡群中の王子瓦窯で生産された平安時代末期の瓦が出土し、これらが神宮寺の創建に関わる瓦である可能性が指摘される。第16次調査で検出した溝SD3は、平安時代末期のほぼ同時期のものであるが、歴史的な変遷をみると、この時期は出雲神社の社域に神宮寺が新たに建立され、出雲神社が大社としてより寺社勢力を拡大する時期に相当するとみることができる。こうした状況のなかで、社域とその周辺開発が大きく進められたと考えられことから、溝SD3の性格についても、平家政権の崩壊から鎌倉幕府の成立前後の社会的な激動期において目まぐるしく変わる領有関係を検討する必要がある。

今回、溝SD3から出土した土器には、土師皿の整形に極めて特徴的な手法がみられた。本来、



第29図 区画溝 S D 3 の検出地点と周辺地形

この地域の土師皿整形はナデ調整による京都系土師皿を基本とするが、溝 S D 3 から出土した土器は、回転台を使用した底部糸切りの比率が極めて高く、周辺の他の遺跡や遺構と明らかに異なる様相をみせている。回転糸切り技法の土師皿は、近畿北部地域などでも生産されるが、そうした様相を近畿北部地域の影響とみることは困難であろう。なぜなら、亀岡盆地のなかでも出雲社よりも地勢的に北部に位置する南丹市域の遺跡群やこれまでの周辺の出雲遺跡の調査では、12世紀段階にはいずれも京都系土師皿が中心であり、回転糸切り技法が近畿北部から漸移的に伝播したと見ることは難しいからである。現状では、糸切り底の土師皿が高率で出土する溝 S D 3 の状況が特異であり、ここでみられる回転糸切り技法は、溝 S D 3 とその周辺を拠点とした有力者の本貫地などとの地域的な関係性に起因する可能性を検討する必要がある。

溝 S D 3 が掘削された12世紀後半は、平氏政権の崩壊とから鎌倉幕府成立前後の歴史的な変換期にあり、丹波の荘園の領有関係などもめまぐるしく変化する時期である。平安時代後期の丹波は、丹波国総監や諸国総下司職に平氏が任命されるなど、平氏とゆかりの深い地域であったが、末期には源頼政の治承4年(1180)の挙兵や、木曾義仲の都からの平家追討や源義経の丹波国篠村荘の一時領有などがあり、丹波では多くの平家没官領が生じ、その跡地へ源氏一門など東国の武士が地頭に任命され、配置された場合があったとされる。

この時期の出雲神社の領有関係を知る記述が、鎌倉幕府による歴史編纂書である『吾妻鏡』にある。『吾妻鏡』元暦元年(1184)九月二十日の条には、出雲社の知行をめぐる争議の記述がある。具体的には、出雲社は預所の能盛法師(藤原能盛)が知行していて地頭を置かないところであるのに、玉井四郎資重が源頼朝の下文を賜ったと称して横領したため、資重の横領の停止を頼朝に求

めたもので、後白川法王の院宣が記載され、「丹波一宮出雲社は蓮華王院領なり」と記述されている。この院宣によって、幕府は地頭の横暴を沙汰しており、出雲社は元通り後白河法皇領とされ、その配下の能盛法師の知行が復活している。この資料から明らかとなるのは、出雲社がもと後白河法皇の蓮華王院領であった点だけでなく、東国武士が既存の荘園に入り、下文を翳して横領するという所領紛争が、鎌倉幕府の成立前後には丹波においても多く起こったということである。そして、さらに注目されるのは、横暴を働いた玉井四郎資重が美濃を本拠とする土豪であると指摘されることであり、平安時代末期において、出雲社の周辺には東海以東の武士が配置されたり、あるいは侵入していたという事実であろう。

区画溝SD3からは、濃尾平野を主な産地とする山茶碗や周辺の包含層から灰軸陶器の壺などが出土するとともに、回転系切り技法による土師皿が突出して高率で出土する。この技法は、畿内以外の多くの地域で見られるが、同時期の周辺遺跡や出雲遺跡の他遺構群はほぼ京都系土師皿で構成されており、今回報告したSD3の様相は大きく異なる。歴史的な転換期において出雲社周辺に東国系武士の居住が想定できることを踏まえると、土器様相の背景に東国系の開発主体の出自が関わる可能性がある。12世紀後半において掘削されたSD3は居館の区画溝である可能性を指摘したが、この周辺を拠点とした有力者について、出雲社との関わりをもつ社家や在地の開発領主層だけでなく、東海以東の地域との関係性も視座に、今後検討を加えてゆく必要があろう。

(黒坪一樹・高野陽子)

- 注1. 理科学分析は、(株)バリノ・サーヴェイに依頼して実施した。イネ科を中心とする多量の花粉が良好な状態で検出され、堆積層が嫌気性の滞水状態にあったと推定されている。
- 注2. 山本信夫2000「大宰府条坊跡XV-陶磁器分類編一」(「大宰府市の文化財」第49集)大宰府市教育委員会
- 注3. 能盛法師(藤原能盛)は、後白川天皇のもと北面の武士であり、後白河法皇の蓮華王院領の院領支配に関与した人物であり、一時期は出雲守となり、本所の補任を受けて出雲神社の社領を含めた荘園を庶務代官として統括する立場にあったようである。
- 注4. 出雲大神宮史編纂委員会『出雲大神宮史』2009

【参考文献】

- 亀岡市教育委員会『新修亀岡市史』1995
- 亀岡市教育委員会『国営農地再編整備事業関連遺跡発掘調査報告書』2009
- 京都府教育委員会『京都府埋蔵文化財調査報告書』(平成20年度)2008
- 中世土器研究会編1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

【追記】中世土器の整理作業に関しては、森島康夫氏(京都府立丹後郷土資料館)と松尾史子氏(京都府立山城郷土資料館)から貴重なご教示を得た。記して、謝意を述べる。

付表2 溝S D 3出土遺物観察表

報告番号	調査区	遺構	器種	器形	口径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	調整
15	1	5区	土師器	甕	(19.4)	(30)	口) 1/12	密	やや軟	にぶい黄褐色10YR5/4	内外面ヨコナデ
22	1	5区下層	弥生土器	甕	底) 4.0	(3.5)	底) 9/12	粗	良	赤褐色10R6/6	外面ナデ
26	1	SX10	弥生土器	甕	底) 8.0	(18)	底) 5/12	密	やや軟	褐7.5YR4/4	
27	1	5区	弥生土器	甕	頸部) 11.2	(3.5)	1/12	やや粗	良	にぶい黄褐色10YR7/3	
31	1	5区上層	瓦器	皿	8.2	1.6	10/12	密	良	灰NS/0	内外面ヨコナデ
32	1	5区	瓦器	皿	7.8	1.5	6/12	密	良	暗灰N3/0	内外面ヨコナデ
33	1	1区	瓦器	皿	8.3	1.9	7/12	密	良	灰N4/0	内外面ヨコナデ
34	1	1区	瓦器	皿	7.8	1.6	完存	密	良	灰N4/0	内外面ヨコナデ
35	1	1区	土師器	皿	9.2	1.5	9/12	密	やや軟	浅黄褐色7.5YR8/4	内外面ヨコナデ、糸切り
36	1	1区	土師器	皿	8.6	1.5	9/12	密	良	にぶい橙5YR7/3	内外面ヨコナデ
37	1	1区	土師器	皿	8.6	1.4	14/12完存	密	やや軟	灰白10YR8/2	内外面ヨコナデ
38	1	4区下層	土師器	皿	9.2	1.9	11/12	密	良	灰N4/0	内外面ヨコナデ
39	1	1区	土師器	皿	8.4	1.5	10/12	密	良	浅黄褐色7.5YR8/3	内外面ヨコナデ
40	1	2区下層	土師器	皿	8.4	1.3	14/12完存	密	良	淡赤褐色2.5YR7/3	内外面ヨコナデ
41	1	2区下層	土師器	皿	7.8	1.8	9/12	密	やや軟	にぶい橙7.5YR7/4	内外面ヨコナデ
42	1	1区	土師器	皿	8.0	1.5	4/12	密	良	にぶい黄褐色10YR6/3	内外面ヨコナデ、糸切り
43	1	1区	土師器	皿	8.3	1.5	14/12完存	密	やや軟	にぶい橙7.5YR7/4	内外面ヨコナデ
44	1	4区	土師器	皿	8.3	2.1	完存	密	やや軟	灰黄2.5Y7/2	内外面ヨコナデ
45	1	5区上層	土師器	皿	8.5	1.6	完存	密	良	灰白10YR8/2	内外面ヨコナデ
46	1	1区	土師器	皿	8.3	1.6	6.5/12	密	良	にぶい黄褐色10YR7/3	内外面ヨコナデ
49	1	1区	土師器	皿	8.6	1.3	8/12	密	やや軟	にぶい黄褐色10YR7/3	内外面ヨコナデ
50	1	1区	土師器	皿	8.3	1.6	9/12	密	良	にぶい橙5YR7/4	内外面ヨコナデ
51	1	1区下層	土師器	皿	8.5	1.7	10/12	密	やや軟	黄灰2.5Y6/1	内外面ヨコナデ、糸切り
52	1	1区	土師器	皿	8.8	1.9	6/12	密	やや軟	灰黄2.5Y7/2	内外面ヨコナデ、糸切り
53	1	1区	土師器	皿	9.0	1.5	4/12	密	良	にぶい黄褐色10YR7/3	内外面ヨコナデ、糸切り
54	1	1区	土師器	皿	13.6	2.6	口) 11/12	密	やや軟	橙5YR7/6	内外面ヨコナデ
55	1	1区	土師器	皿	12.8	2.6	3/12	密	良	浅黄褐色7.5YR8/4	内外面ヨコナデ
56	1	1区	土師器	皿	13.0	2.7	2/12	密	良	にぶい黄2.5Y6/3	内外面ヨコナデ、糸切り
57	1	5区上層	土師器	皿	13.6	2.7	4/12	密	良	浅黄褐色10YR8/3	内外面ヨコナデ
58	1	1区	土師器	皿	13.7	3.0	完存	密	やや軟	灰白2.5Y8/2	内外面ヨコナデ
59	1	3区下層	土師器	皿	13.0	2.7	4/12	密	やや軟	浅黄2.5Y7/3	内外面ヨコナデ
60	1	5区上層	土師器	皿	14.0	3.1	9/12	密	やや軟	灰白10YR8/2	内外面ヨコナデ
61	1	2区上層	土師器	皿	13.2	3.1	完存	密	やや軟	浅黄褐色7.5YR8/4	内外面ヨコナデ
62	1	1区	土師器	皿	13.4	2.4	6/12	密	良	橙7.5YR7/6	内外面ヨコナデ
63	1	5区下層	土師器	皿	14.7	2.9	完存	密	やや軟	灰白7.5YR8/2	内外面ヨコナデ
64	1	4区下層	土師器	皿	14.3	3.4	14/12完存	密	良	灰白2.5Y8/2	内外面ヨコナデ
65	1	1区	土師器	皿	16.0	3.2	3/12	密	やや軟	浅黄褐色7.5YR8/4	内外面ヨコナデ
66	1	5区下層	土師器	皿	13.9	(2.6)	6/12	密	良	浅黄褐色10YR8/3	内外面ヨコナデ
67	1	5区	土師器	皿	13.0	2.5	7/12	密	良	浅黄褐色10YR8/3	内外面ヨコナデ
68	1	4区下層	土師器	台付皿	6.2	3.0	4/12	密	良	浅黄褐色10YR8/3	内外面ヨコナデ
69	1	1区	土師器	台付皿	9.4	3.5	完存	密	良	灰白2.5Y8/2	内外面ヨコナデ
70	1	2区下層	土師器	台付皿	底) 4.8	(2.4)	底) 12/12	密	良	灰白2.5Y8/2	内外面ヨコナデ
71	1	1区下層	土師器	台付皿	9.1	(2.3)	5/12	密	やや軟	灰白10YR8/2	内外面ヨコナデ
73	1	3区上層	土師器	台付皿	9.0	(3.4)	5/12	密	やや軟	浅黄褐色10YR8/3	内外面ヨコナデ、糸切り
74	1	1区	土師器	台付皿	8.5	(3.3)	2/12	密	良	灰白10YR8/2	内外面ヨコナデ
75	1	5区下層	土師器	台付皿	底) 9.2	(3.7)	底) 5/12	密	良	浅黄褐色7.5YR8/3	内外面ヨコナデ
76	1	1区	土師器	皿	12.4	2.8	口) 4/12	密	やや軟	灰7.5Y6/1	内外面ヨコナデ、糸切り
77	1	1区	土師器	皿	12.6	3.1	6/12	密	やや軟	灰白5Y7/2	内外面ヨコナデ、糸切り
78	1	1区	土師器	皿	13.0	3.0	口) 10/12	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	内外面ヨコナデ、糸切り
79	1	2区上層	土師器	皿	8.8	1.6	完存	密	やや軟	灰黄2.5Y7/2	内外面ヨコナデ、糸切り
80	1	2区上層	土師器	皿	8.4	1.3	6/12強	密	良	灰白2.5Y7/1	内外面ヨコナデ、糸切り
81	1	1区	土師器	皿	8.4	1.9	10/12	密	良	にぶい黄褐色7.5YR7/4	内外面ヨコナデ、糸切り
82	1	1区	土師器	皿	7.7	1.5	14/12完存	密	良	にぶい黄褐色10YR7/3	内外面ヨコナデ、糸切り
83	1	1区	土師器	皿	8.5	1.5	口) 11/12	密	良	灰白5Y7/1	内外面ヨコナデ、糸切り
84	1	1区下層	土師器	皿	8.2	1.5	完存	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	内外面ヨコナデ、糸切り

報告番号	調査区	遺構	器種	器形	口径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	調整
85	1	4区下層	土師器	皿	8.5	1.2	完存	密	良	灰白 10YR8/2	内外面ヨコナガ、糸切り
86	1	1区	土師器	皿	8.5	1.6	完存	密	良	灰黄 2.5Y7/2	内外面ヨコナガ、糸切り
87	1	1区	土師器	皿	8.6	1.5	完存	密	やや軟	にぶい黄橙 10YR7/2	内外面ヨコナガ、糸切り
88	1	3区下層	土師器	皿	8.5	1.5	完存	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	内外面ヨコナガ、糸切り
89	1	1区	土師器	皿	8.4	1.6	完存	密	良	にぶい黄橙 10YR7/3	内外面ヨコナガ、糸切り
90	1	5区下層底	土師器	皿	8.8	1.4	ほぼ完存	密	やや軟	にぶい黄橙 10YR7/3	内外面ヨコナガ、糸切り
91	1	2区上層	土師器	皿	8.2	3.4	6/12	密	やや軟	浅黄橙 10YR8/3	内外面ヨコナガ、糸切り
93	1	5区下層	瓦器	皿	9.2	1.0	5/12	密	良	暗灰 N3/0	内外面ヨコナガ
94	1	3~4区下層	瓦器	皿	8.8	1.6	2/12	密	良	暗灰 N3/0	内面ミガキ
95	1	4区	瓦器	皿	9.1	2.0	10/12	密	良	灰 N4/0	内外面ヨコナガ
96	1	4区	瓦器	皿	9.8	1.5	2/12	密	良	灰 N5/0	内外面ヨコナガ、内面ミガキ
97	1	2区下層	瓦器	皿	8.4	1.7	完存	密	良	灰 N4/0	内外面ヨコナガ、内面ミガキ
98	1	5区上層	瓦器	椀	13.8	5.5	4/12	密	良	灰 N5/0	内外面ミガキ、見込暗文
99	1	5区下層	瓦器	椀	14.4	5.8	6/12	密	良	灰 N4/0	内面ミガキ、暗文
100	1	5区下層	瓦器	椀	14.2	4.6	(1) 5/12 (底) 12/12	密	良	暗灰 N3/0	内面ミガキ、暗文
101	1	5区	瓦器	椀	14.0	5.5	7/12	密	良	暗灰 N3/0	内面ミガキ、暗文
102	1	3区下層	瓦器	椀	14.0	5.1	完存	密	良	灰 N4/0	内外面ミガキ、内面見込暗文
103	1	5区下層	瓦器	椀	14.6	5.3	11/12	密	良	灰 N4/0	内外面ミガキ、内面見込暗文
104	1	1区	瓦器	椀	15.0	5.7	5/12	密	良	灰 N4/0	内面ミガキ、暗文
105	1	3区下層	瓦器	椀	14.4	5.5	(1) 5/12	密	良	暗灰 N3/0	内外面ミガキ、内面見込暗文
106	1	5区上層	瓦器	椀	13.8	4.8	6/12	密	やや軟	灰 N5/0	内面ミガキ
107	1	5区下層	瓦器	椀	14.9	5.4	ほぼ完存	密	良	暗灰 N3/0	内外面ミガキ、内面見込暗文
108	1	2区	瓦器	椀	14.1	5.5	ほぼ完存	密	良	暗灰 N3/0	内外面ミガキ、内面見込暗文
109	1	1区	瓦器	椀	13.8	5.2	(1) 10/12 (底) 12/12	密	良	暗灰 N3/0	内面ミガキ、暗文
110	1	1区	瓦器	椀	15.4	5.0	4/12	密	良	暗灰 N3/0	内面ミガキ、暗文
111	1	1区	瓦器	椀	14.3	4.8	10/12	密	良	灰 N5/0	内外面ヨコナガ、内面ミガキ、暗文
112	1	5区上層	瓦器	椀	15.3	5.8	3/12	密	良	灰 N4/0	内面ミガキ、暗文
113	1	5区下層	瓦器	椀	14.4	5.2	11/12	密	良	暗灰 N3/0	内外面ミガキ、内面見込暗文
114	1	5区下層	瓦器	椀	14.2	5.3	8/12	密	良	灰 N4/0	内面ミガキ、暗文
115	1	5区下層	瓦器	椀	14.2	5.3	10/12	密	良	暗灰 N3/0	内外面ミガキ、内面見込暗文
116	1	5区下層	瓦器	椀	14.8	4.9	ほぼ完存	密	良	暗灰 N3/0	内外面ミガキ、内面見込暗文
117	1	5区下層	瓦器	椀	14.9	5.8	7/12	密	良	灰 N4/0	内面ミガキ、暗文
118	1	5区	瓦器	椀(底)	6.6	(1.7)	3/12	密	良	暗灰 N3/0	暗文
119	1	3区下層	瓦器	椀(底)	6.0	(1.5)	1/12	密	良	灰 N4/0	内面見込暗文
120	1	5区下層	瓦器	椀	14.8	5.1	6/12	密	良	灰 N5/0	内面ミガキ、暗文
121	1	2区	瓦器	椀	14.8	5.5	ほぼ完存	密	良	暗灰 N3/0	内面ミガキ、暗文
122	1	5区	瓦器	椀	15.0	5.2	4/12	密	良	灰 N4/0	内面ミガキ、暗文
123	1	5区下層	瓦器	椀	13.6	5.9	9/12	密	良	暗灰 N3/0	内面ミガキ、暗文
124	1	5区下層	瓦器	椀	14.3	4.9	8/12	密	良	暗灰 N3/0	内面ミガキ、暗文
125	1	1区	瓦器	椀	14.2	5.0	7/12	密	良	暗灰 N3/0	内外面ミガキ、内面見込暗文
126	1	1区下層	瓦器	椀	14.4	5.2	11/12	密	良	灰 N4/0	内面ミガキ、暗文
127	1	5区下層	瓦器	椀(底)	6.8	(2.0)	3/12	密	良	暗灰 N3/0	内面ミガキ、暗文
128	1	1区	瓦器	椀	14.9	5.5	7/12	密	良	灰 N4/0	内外面ヨコナガ、内面ミガキ、暗文
129	1	5区下層	瓦器	椀	15.0	4.6	3/12	密	良	灰 N4/0	内外面ミガキ、内面見込暗文
130	1	5区下層	瓦器	椀	13.5	6.0	(1) 7/12 (底) 12/12	密	良	暗灰 N3/0	内面ミガキ、暗文
131	1	5区下層	瓦器	椀	14.1	5.4	11/12	密	良	灰 N4/0	内面ミガキ、暗文
132	1	5区	瓦器	椀	15.0	5.0	3/12	密	良	暗灰 N3/0	内外面ミガキ、内面暗文
133	1	5区上層	瓦器	椀	15.7	5.6	(1) 6/12	密	良	暗灰 N3/0	内面ミガキ、暗文
134	1	5区	瓦器	椀	16.0	4.9	3/12	密	良	暗灰 N3/0	内外面ミガキ、内面見込暗文
135	1	3区下層	瓦器	椀	14.0	5.3	6/12	密	良	灰 N4/0	内外面ミガキ、内面見込暗文
136	1	3区下層	瓦器	椀	15.8	5.4	4/12	密	良	暗灰 N3/0	内面ミガキ、暗文
137	1	5区下層	瓦器	椀	14.9	5.3	7/12	密	良	暗灰 N3/0	内外面ミガキ、内面見込暗文
138	1	5区上層	瓦器	椀	15.4	5.7	(1) 8/12 (底) 12/12	密	良	灰 N4/0	内外面ミガキ、内面見込暗文
139	1	5区上層	瓦器	椀(底)	6.3	(2.1)	3/12	密	良	暗灰 N3/0	内面ミガキ、暗文

報告番号	調査区	遺構	器種	器形	口径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	調整
140	1	5区下層	瓦器	椀	142	5.8	9/12	密	良	暗灰 N3/0	内外面ミガキ、内面見込暗文
141	1	5区下層	瓦器	椀	178	5.4	5/12	密	良	灰 N4/0	内外面ヨコナデ、見込暗文
142	1	5区上層	瓦器	椀	152	5.1	5/12	密	良	灰 N4/0	内外面ミガキ、内面見込暗文
143	1	5区上層	瓦器	椀	146	5.4	14/12完存	密	良	暗灰 N3/0	内面ミガキ
144	1	3区下層	瓦器	椀	152	(4.2)	6/12	密	良	暗灰 N3/0	内外面ミガキ
145	1	5区上層	瓦器	椀	141	5.4	14/12完存	密	良	灰 N4/0	内外面ミガキ
146	1	5区下層	須恵器	鉢	28.0	(6.2)	1/12	密	堅緻	灰 N5/0	内外回転ナデ
147	1	上層	瓦質土器	鉢	39.4	(7.0)	1/12	やや粗	良	灰 N5/0	内外面ヨコナデ
148	1	2区上層	瓦質土器	鉢	42.0	(5.8)	1/12	やや粗	良	灰 N4/0	内外面ヨコナデ
149	1	5区下層	瓦質土器	鉢	41.9	(4.4)	1/12	やや粗	良	灰 N4/0	内外面ヨコナデ
150	1	5区下層	須恵器	杯	底) 11.6	(1.6)	底) 1/12	密	堅緻	灰 N6/0	内外回転ナデ
151	1	5区下層	須恵器	壺	底) 13.0	(1.5)	底) 1/12	密	堅緻	灰 5Y6/1	外面回転ナデ、内面ナデ
152	1	2区上層	灰釉陶器	杯	7.4	2.8	5/12	密	堅緻	灰白 2.5Y7/1	灰釉
153	1	4区	灰釉陶器	壺	底) 8.0	(3.1)	4/12	密	堅緻	灰白 2.5Y8/1	灰釉
155	1	1区	瓦質土器	釜	12.8	5.7	3/12	密	良	灰 N4/0	内外面ヨコナデ
156	1		瓦質土器	羽釜	13.4	(2.9)	1/12	密	良	暗灰 N3/0	外面ヨコナデ
157	1	4区下層	土師器	土鉢	3.65	1.2	完存	密	良	灰赤橙 2.5YR7/4	ナデ
158	1	4区下層	土師器	土鉢	3.6	1.0	完存	密	良	灰白 10YR8/2	ナデ
159	1	3区上層	青白磁	合子	5.6	1.5	1/12	精良	堅緻	明緑灰 5G7/1 (外面) 灰白 10Y8/1 (内面)	内外面施釉
160	1	2区上層	青磁	合子	6.8	1.7	2/12	精良	堅緻	明緑灰 5G7/1 (外面) 灰白 5Y8/2 (内面)	内外面施釉
161	1	2区下層	青白磁	皿	4.0	(1.7)	2/12	精良	堅緻	明青灰 5B67/1	内外面施釉
162	1	2区上層	白磁	四耳壺				精良	堅緻	灰白 7.5Y7/1	外面施釉
163	1	4区下層	青磁	皿	11.1	2.3	10/12	精良	堅緻	灰オリーブ 7.5Y6/2	内外面施釉
164	1	3区上層	青磁	皿	11.8	2.4	2/12	精良	堅緻	灰オリーブ 7.5Y6/2	内外面施釉、同安楽系
165	1	4区上層	青磁	椀	16.0	(4.5)	1/12強	精良	堅緻	灰オリーブ 5Y6/2	内外面施釉、同安楽系
166	1	2区上層	白磁	椀	18.0	(4.1)	2/12	精良	堅緻	浅黄 5Y7/3	内外面施釉
167	1	2区上層	青磁	皿	12.0	(1.9)	1/12	精良	堅緻	オリーブ灰 10Y6/2	内外面施釉、龍泉楽系
168	1	4区上層	青磁	椀	16.0	(3.5)	1/12	密	堅緻	灰オリーブ 5Y6/2	内外面施釉
169	1	1・2区	白磁	皿	9.8	2.3	6/12	精良	堅緻	灰白 10Y8/1	内外面施釉
170	1	1・2区	白磁	椀	17.0	(4.8)	2/12弱	精良	堅緻	灰白 5Y7/1	内外面施釉
171	1	1・2区	白磁	椀	15.4	(2.4)	1/12	精良	堅緻	灰白 5Y7/2	内外面施釉
172	1	5区	白磁	椀	13.0	(1.7)	1/12	精良	堅緻	灰白 5Y7/2	内外面施釉
173	1	1区	白磁	椀	12.8	(2.7)	1/12	精良	堅緻	灰白 10Y8/1	内外面施釉
174	1	3区上層	白磁	椀	18.0	(3.0)	1/12	精良	堅緻	灰白 5Y7/2	内外面施釉
175	1	4区	白磁	壺	底) 6.0	(2.1)	6/12	密	堅緻	灰白 10Y7/1	内面施釉
176	1	1・2区	白磁	椀	底) 7.4	(1.9)	底) 5/12	密	堅緻	灰黄 2.5Y7/1	内面施釉
177	1	3・4区下層	白磁	椀	底) 7.3	(2.9)	4/12	精良	堅緻	灰白 10Y8/1	内面施釉
179	1	2区上層	白磁	椀	底) 6.2	(2.9)	底) 6/12	密	堅緻	灰白 7.5Y7/1	内外面施釉
180	1	3区下層	青磁	椀	10.0	(4.4)	5/12弱	精良	堅緻	明緑灰 10GY7/1	内外面施釉
181	1	2区上層	瓦	平瓦	残存長 8.8	残存幅 9.3				灰 N4/0	
182	1	2区上層	瓦	平瓦	残存長 6.8	残存幅 5.3				陶灰 10YR6/1	
183	1	2区上層	瓦	平瓦	残存長 5	残存幅 4.8				灰白 7.5Y7/1	

3. 久々相遺跡第12次発掘調査報告書

1. はじめに

今回の調査は、府道上久世石見上里線の防災・安全交付金事業に伴い、京都府乙調土木事務所の依頼を受けて実施した。調査地は、京都府向日市寺戸町久々相にあって、JR向日町駅前から北へおよそ200m、府道石見上里線(旧西国街道)に沿う細長い調査地である。標高は約18mを測る沖積低地である。

なお、平面図などで使用した座標値は日本測地系国土座標第VI系である。

現地作業中は、京都府教育委員会、向日市教育委員会、公益財団法人向日市埋蔵文化財センターからは有意義なご教示・ご協力を賜った。心より御礼申し上げたい。なお、調査にかかる費用は全額、京都府乙調土木事務所が負担された。

[調査体制等]

平成26年度調査

現地調査責任者	調査課長	石井清司
現地調査担当者	調査課調査第1係長	中川和哉
	同 主査	黒坪一樹

調査場所 向日市寺戸町久々相

調査期間 平成27年1月22日～3月5日

調査面積 160㎡

平成27年度整理報告

整理報告責任者	調査課長	有井広幸
整理報告担当者	調査課課長補佐兼調査第1係長	細川康晴
	同 主査	黒坪一樹

2. 久々相遺跡の過去の調査

久々相遺跡は、長岡京跡の北東に隣接する地域に当たり、「北苑」の存在する地域と推定されている。これまでの主な調査成果についてみておく。

第1次調査は、今回調査地の南側のJR向日町駅の北西隣接地である。この調査において、飛鳥～奈良時代の掘立柱建物3棟、長岡京期の同建物1棟、平安時代の同建物3棟さらに横列、溝、土坑、井戸といった顕著な遺構群が検出された^(8.1)。長岡京域のほぼ北に隣接する当地が、長岡京期

前後からかなり開発・整備されていたことから、宮城の北方に展開する「北苑」関連施設の可能性が指摘された。この長岡京期の建物群は、北に延伸する東一坊大路に面し、条里に規制された方形街区内に展開するものと評価されている。

第2次および3次調査では、主に古墳時代後期の遺物包含層が確認されている。

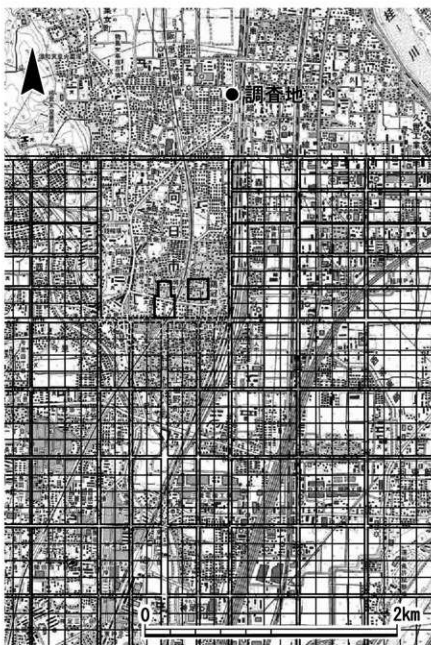
第4次調査では、奈良時代から平安時代にかけての南北軸に沿った欄列が2間分検出されている。^(図2)

今回の調査地東側にあたる第5・6次調査でも大きな成果があがった。5次調査で東一坊大路の延伸部で東西両側溝が検出された。そして西側溝が調査区の南北2m内の一部の検出であったため、十分な確認をしておく必要性から第6次調査が実施され、東一坊大路延長道路の東側溝(SD505)および西側溝(SD507)が明らかとなった。^(図3)

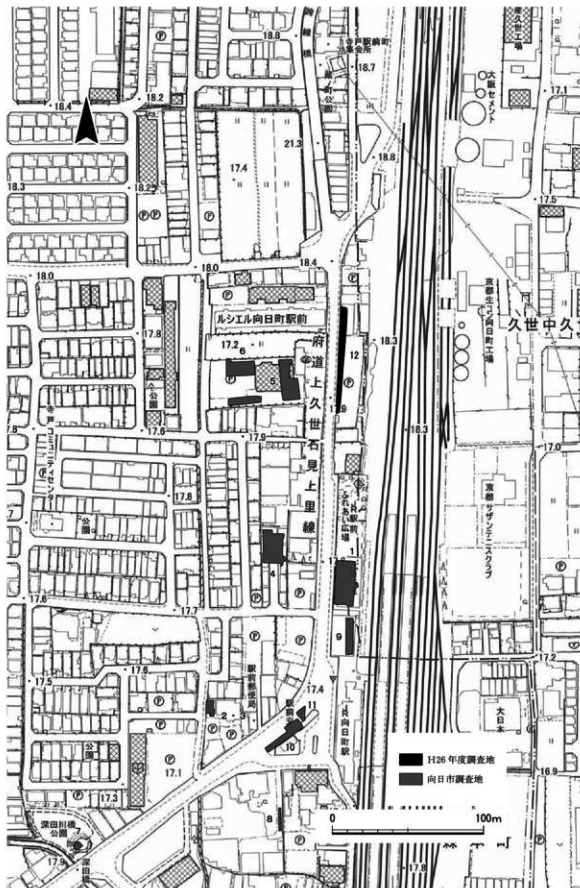
第7次調査では、古墳時代前期から中世にかけての「古寺戸川」の旧河道、長岡京期から中世の護岸施設などが検出された。出土遺物として長岡京期の緑釉陶器がまとめて出土したことが注目された。^(図4)

第10・11次調査では、第10次調査区の東側で東一坊大路延長道路東側溝がここでも検出された。^(図5) この溝の埋没過程や正確な規模を確認するため、拡張区として第11次調査が実施された。東側溝のほか、拡張区からは旧西国街道に併走する溝が確認された。

以上のように、久々



第1図 調査地位置図 (1/30,000)



第2図 既往の調査地位置図(图中数字は調査次数)

相遺跡は長岡京域のほぼ北側に隣接する位置にあることから、「北辺条坊」の想定に象徴されるように、長岡京期の条坊をはじめとする建物群などの整備状況が注目される重要遺跡といえる。実際、久々相遺跡第5・6次および第10・11次調査において、東一坊大路の延長部で東西側溝が見つかった。さらに、周辺の野田遺跡(第10次)、修理式遺跡(第9次)さらに大藪遺跡においても延長する東二坊坊間西小路や東三坊大路の側溝が確認されている。

今回の調査は久々相遺跡の第12次調査になる。南北に長い調査区であるため、道路側溝などの条坊に関わる遺構の検出が期待された。

3. 基本層序

盛り土を重機で除去すると、第1層である褐灰色(10YR4/1)シルトがあらわれる。この層は近・現代の耕作土とみられる。その下層に第1'層の灰黄褐色(10YR5/2)シルト(近・現代床土)が堆積している。

第2層は黄褐色(2.5Y5/3)粘土で、中世の土器を含む遺物包含層である。北側で薄く確認され、北端では部分的な検出状況となる。瓦器碗の破片が若干みられる。

第3層は灰オリブ(5Y5/2)粘質土で、この層は溝SD1の北側でのみ確認される。長岡京期以前の層で、奈良時代の須臾器を包含する層である。

第4層は、にぶい黄褐色(10YR5/4)極細粒砂混じりシルトである。植物の根茎を含む層に鉄分が沈殿し、全体にやや赤褐色を帯び、南側にいくほど強くなる。この層は遺構検出面で、溝および柱穴群はこの層から掘り込まれている。旧桂川の河川堆積層(第5～7層)の検出された中間部を除き、南北に広く堆積している。

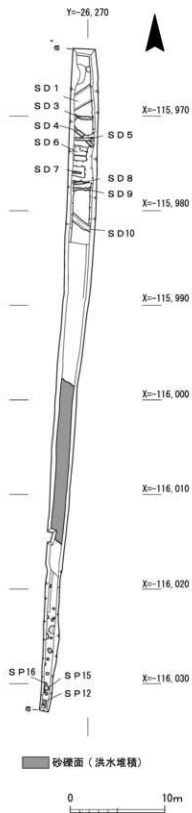
第5層は、暗褐色(10YR3/4)砂礫、第6層は灰黄褐色(10YR4/2)極細砂、第7層は褐色(7.5YR4/4)粘質極細砂は、河川堆積による砂礫・極細砂である。斜めに互層となって流れ込んだ状況を呈している。これらは旧桂川起源の河川堆積による砂礫層で、深く堆積していると思われる。久々相遺跡第1次調査で第4b層とされた層に当たると考えられ、周辺に広く覆っている堆積層である。第5層～第7層中から、出土遺物は確認できなかった。

4. 検出遺構

今回の遺構は調査地北側と南側から検出された。北側では溝9条、南側では柱穴18基である。中間部では河川堆積による砂礫が遺構検出面とはほぼ同じレベルで検出された。したがってこの中間部は当時の地形が高まりをもっていたとみられる。第5層の上面で第4層が部分的にごく薄く残存しているのが確認されることから、かつてはこの中間部にも奈良・平安時代の遺構は存在していた可能性はあるが、今回、その痕跡を捉えることはできなかった。

検出遺構を北から順に報告する。

溝SD1は今回検出した最大幅の溝である。東西軸に対し大きく振れ、E-30°-Nとなる。北東から南西方向にのびる溝である。長さ2m、幅1.5m、深さ0.05～0.1mを検出している。埋土



第4図 トレンチ全体図

は暗灰黄(2.5Y5/2)シルトである。若干、砂礫の流れ込みも確認される。深さの残存状況から、ほとんど溝の底部付近を捉えたものといえる。須恵器と土師器が整理箱にして3箱出土した。ほとんどは須恵器である。土器以外の遺物は出土していない。整理に伴う破片接合作業を経て、完全な形態をとどめるものはないことから、使用による破損品を廃棄したのであろう。

須恵器の蓋および杯Bなどの形態からみて、奈良時代の8世紀前半から中頃、平城宮土器Ⅱ併行期である。

溝SD3は真東西方向の溝である。長さ1.75m、幅0.25～0.35m、深さ0.06mの検出である。埋土は暗灰黄(2.5Y5/2)シルトである。出土遺物はなかった。小規模な溝で、条坊側溝や集落の区画溝とは考えられない。

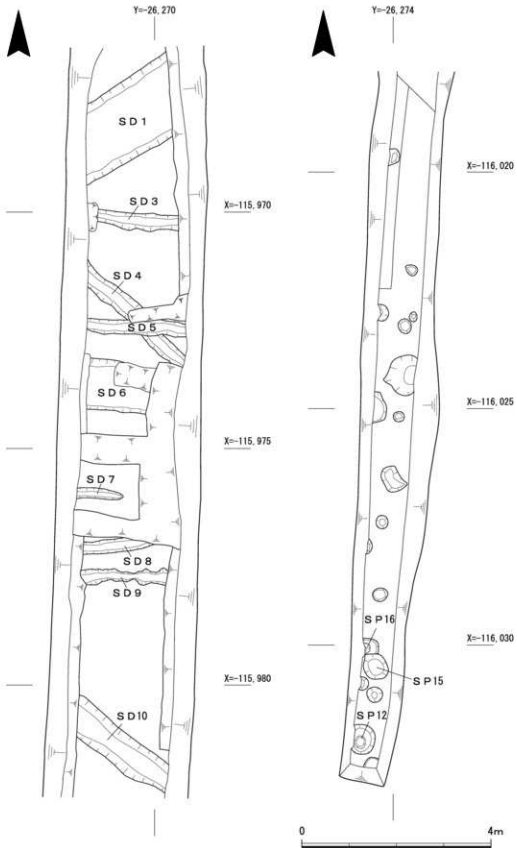
溝SD4は北西から南東に、東西軸から大きく振り、W-44°-Nである。長さ3m、幅0.35～0.45m、深さ0.08mの検出である。埋土は暗灰黄(2.5Y5/2)シルトである。溝断面形はU字形で、溝SD3と比較して深い。遺物の出土はみられない。

溝SD5は真東西方向に走る溝で、長さ2.1m、幅0.2～0.3m、深さ0.1～0.15mを検出した。埋土は暗灰黄(2.5Y5/2)シルトである。溝SD4を壊して掘られている。溝断面はU字形である。出土遺物は、須恵器の小片1点のみである。この土器から明確な時期はわからない。

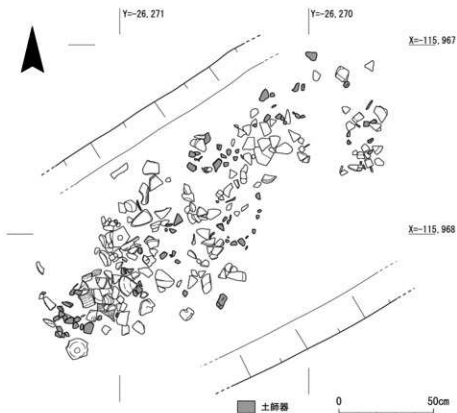
溝SD6は東西方向の溝である。底が中間部で盛り上がっている。長さ1.35m、幅1.1m、深さ0.05～0.18mである。埋土は暗灰黄(2.5Y5/2)シルトである。出土遺物には第9図35・36の須恵器壺口縁部および底部、甕体部の小片1点、土師器小片3点がある。須恵器壺の破片から、奈良時代後半のものと思われる。

溝SD7は東西方向の溝である。長さ0.96m、幅0.2m、深さ0.05mを測る。残存状況は悪く、東端は浅くなって消滅している。埋土は暗灰黄(2.5Y5/2)シルトである。出土遺物は須恵器小片1点のみである。

溝SD8は東西方向に走る溝であるが、やや北東側に曲がっていく様相をみせる。長さ1.44m、幅0.25m、深さ0.05mを測る。埋土は暗灰黄(2.5Y5/2)粘土である。須恵器甕、杯など



第5図 トレンチ平面図



第6図 溝SD1土器出土状況図

の小片15点、裂塩土器小片2点などとともに、土師器の甕の把手1点、瓦器椀小片1点、羽釜の脚1点なども出土しており、鎌倉時代以降の中世溝といえる。

溝SD9は東西方向の溝である。長さ1.85m、幅0.15～0.3m、深さ0.04～0.08mを測る。埋土は暗灰黄(5.2Y5/2)シルトである。出土遺物は須恵器甕の口縁部(第9図38)および須恵器の小片7点、土師器小片3点がある。出土土器から明確な時期はわからない。

溝SD10は北西から南東方向の溝である。東西軸から北へ35°振る。W-35°-Nである。長さ2.4m、幅0.5～0.75m、深さ0.1mの検出である。埋土は暗灰黄(2.5Y5/2)シルトおよび東側は褐灰(10YR5/1)粘土である。断面形はU字形である。出土土器は飛鳥時代の端部内面に低いかえりをもつ須恵器蓋の小片1点、用途不明の板状銅製品が1点出土した。この須恵器蓋の形態は飛鳥・藤原編年の飛鳥Ⅲ併行期と思われるが、これ1点のみで、その他の遺物が僅少のなかで本溝の時期を確定することはできない。

調査区南側で検出した柱穴は合計18基である。柱穴の埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)シルトや灰黄褐色(10YR5/2)粗砂混じりシルトなど、くすんだ黄灰色系である。こげ茶色のマンガン粒を多く含む。平面形が円形のもの10基ある。直径は0.25～0.35m、深さは0.05cm～0.13mの残りである。楕円形のは4基ある。円形のものより大きく長軸0.55～0.65m、短軸0.5～0.6m、残存の深さは0.25～0.33mを測る。隅丸方形に近いもの4基あるが、切り合い関係をもつなど部分的な検出である。一辺0.45～0.5mほどで、残存の深さ0.08～0.18mを測る。これらの柱穴群を

検出したトレンチ南側の幅は狭く、これらの柱穴が掘立柱建物や横列を構成するかどうかは判断できない。

これらの柱穴からの出土遺物の量は少ない。柱穴 S P 12 および柱穴 S P 15 からは時期のわかる須恵器蓋が出土したが、その他の柱穴から須恵器の出土はほとんどなく、土師器の小片が多い。柱穴 S P 12 と柱穴 S P 15 の須恵器蓋は、飛鳥時代から奈良時代にかけてのものである。柱穴 S P 12 は隅丸方形に近い楕円形で、長軸0.6m、短軸約0.5m、深さ0.26mを測る。形状から南北軸の掘立柱建物と構成する可能性がある。柱痕部から須恵器蓋の破片1点と扁平な粘板岩の石材1点が出土した。須恵器蓋の形態から、8世紀前半で平城Ⅱ併行期のものである。

柱穴 S P 15 も楕円形のものである。長軸0.62m、短軸0.48m、深さ0.33mで、かえりをもつ須恵器蓋の破片が1点出土した。飛鳥・藤原編年の飛鳥Ⅲ併行期（7世紀第3四半期）とみられる。ただし溝 S D 10 と同様に、この須恵器蓋1点のみであることや、柱穴 S P 12 では平城Ⅱ併行期の須恵器蓋を出していることからみて、時期幅は少し広く捉えておくべきであろう。

調査区中間部は、遺構面を形成している第4層の残存を部分的に捉えたが、遺構は確認できなかった。粗い砂礫が深く堆積しているのみである。出土遺物はない。

5. 出土遺物

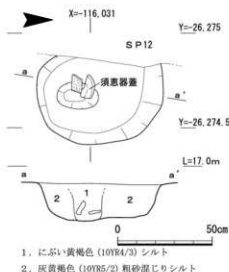
出土遺物はコンテナ整理箱にして7箱の量である。溝および柱穴などの遺構面精査中に出土したものが多。

遺構内出土遺物では、S D 1 からのものがほとんどである。溝 S D 1 だけで、コンテナ整理箱3箱分ある。なお、須恵器の出土状況を確認したと同時に、断面および平面で本溝の両肩の検出に努めたが、底近くの浅い残存状況であったことや、検出面と溝埋め土の相似から溝ラインの検出に苦慮した。溝ライン検出前に出土した須恵器については、出土レベルおよび確実に溝の範囲内であることを確認して溝 S D 1 出土とした。

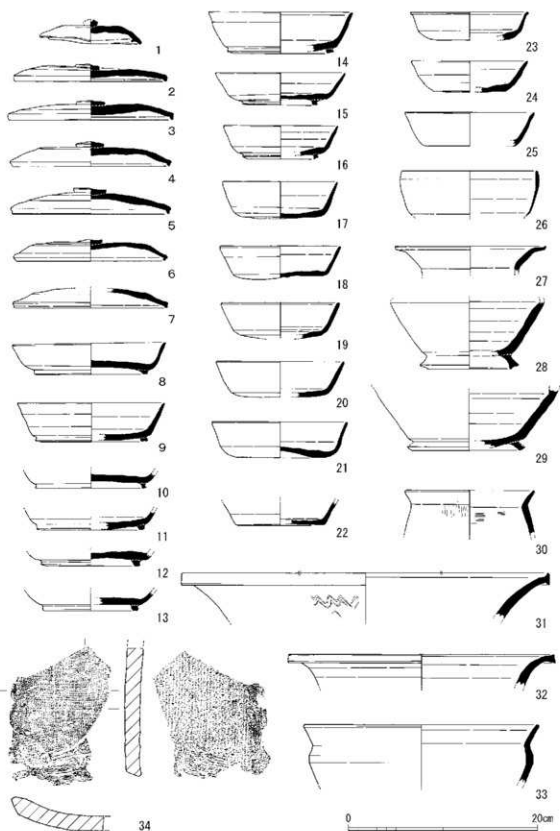
その他の溝、柱穴から出土した遺物には、須恵器・土師器などの土器類（溝 S D 10、柱穴 S P 12、柱穴 S P 15、柱穴面精査中）、板状銅製品（溝 S D 10）がある。時期を特定できるものを含めて少ない。

1) 溝 S D 1 出土遺物(第8図)

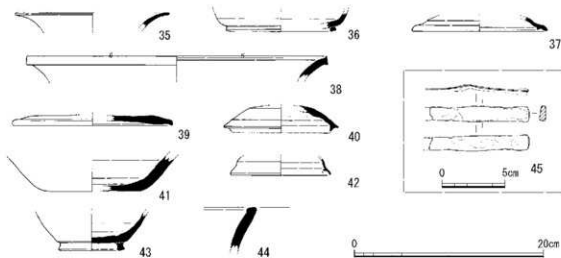
1～7は須恵器蓋である。口径は16～17cm、器高1.1～2.75cmを測る。1は端部内面に低いかえりをもつ須恵器蓋である。口径10.8cm、器高1.95cmを測るほぼ完成品である。宝珠つまみをもち、外部上面は回転ケズリ、その他は回転ナデである。端部のかえりは低いものである。飛鳥時代(飛鳥Ⅲ併行期)のものである。2～6は扁平な宝珠つまみが貼り付けられ、7を含めて端部



第7図 柱穴 S P 12 平面・断面図



第8図 遺物実測図(1)



第9図 遺物実測図(2)

を折り返している須恵器蓋である。3・4・6は頂部平坦面から口縁部にかけてやや角度をもち、嵩高となっている。3は外面に暗緑色の自然釉がかかる。8世紀前半から中頃の平城Ⅱ～Ⅲ併行期のものであろう。

8～16は貼り付け高台を有する須恵器杯Bである。底部から口縁部の残るのみでみると、口径は12～16cm、器高は3.5～4.4cmまでである。高台の付き方が、底部のやや内側に巡っているのが特色である。口縁端部は先細りに丸くおさめられている。須恵器蓋1～7に対応する平城Ⅱ～Ⅲ併行期である。

17～25は杯Aである。口縁部の大きさは、12～14.2cm、器高は3～4cmまでのものである。口縁端部は丸く取められる。23は他のものより端部を外湾させている。

26は須恵器鉢である。口径14.3cm、残存高4.75cmを測る。回転ナデにより成形され、口縁部は内湾しやや肥厚させている。

27～29は須恵器壺の口縁部(27)および体部下半(28、29)である。27は口径16cmで口縁を横ナデにより大きく広げ、端部は面をもつ。28は高台径10.4cmを測る。回転ナデによる成形である。壺の29は貼り付け高台の径12.5cmを測る。踏ん張った形態である。

30は明褐色の色調の「く」字形口縁をもつ土師器甕である。口径13.5cm、残存高4.9cmである。体部外面に粗い縦方向のハケ、体部内面に細かなハケがみられる。

31・32は須恵器甕の口縁部である。31は口径39cmを測る。中間部に粗末な波状文を部分的にとどめている。32は口径28cmを測る。

33は須恵器鉢で、丸みを帯びた体部から口縁部が緩やかに屈曲する。口径24.7cm、残存高6.4cmを測る。

34は布目平瓦の断片である。残存長さ13.5cm、布目および縄目を顕著にとどめる。

2) その他の遺構出土遺物(第9図)

35は須恵器壺の口縁部片である。口径16cmを測る。焼成は堅緻である。回転ナデにより大き

く開く。内面に自然軸がかかる。溝SD6出土。36は張り付け高台をもつ須恵器壺の底部である。回転ナデによる成形である。35・36はSD6からの出土である。溝SD6出土。

37は須恵器蓋の口縁部片である。復元口径14.1cm、残存高1.5cmを測る。回転ナデで端部内側に低いかえりが付く。飛鳥時代のもので、溝SD10からの出土である。

38は溝SD9から出土した須恵器壺の口縁部である。復元口径31cmである。

39は柱穴SP12から出土した須恵器蓋である。口径16.7cm、器高1.1cmを測り、扁平で端部を折り曲げている。全体に厚みのあるものである。長岡京期以前の奈良時代のものである。

40は柱穴SP15から出土した須恵器蓋片である。復元口径12.2cm、残存高2.75cmである。小型で、長い見受けのかえりを内側にもつ須恵器蓋Gである。飛鳥1期併行する。

41は須恵器壺の底部から体部立ち上がりの破片である。底部径10cmである。柱穴SP16内から出土した。

42は須恵器蓋の口縁端部である。復元口径10.4cmを測る。嵩高い体部で、内側に身受けのかえりをもつ。飛鳥Ⅱ期に併行するものであろう。柱穴検出面の精査中に出土したものである。

43は貼り付け高台をもつ須恵器壺の下半部である。高台径7cmを測る。44は須恵器壺の口縁の断片である。42と44は柱穴面精査中に出土した。

45は扁平な板状の銅製品で溝SD10から出土した。薄い木質部の内にはさんでいたようである。長さ10.4cm、幅1.6cm、厚さ0.4cmを測る。これについては保存処理を実施した。

6. まとめ

今回の調査では、調査区の北側で溝9条、南側で柱穴18基を検出した。中間部は土地が隆起していたため、後世の削平を受けており遺構・遺物は検出できなかった。

溝には東西方向のもの(SD3、SD5、SD6、SD7、SD8、SD9)、東西軸から角度を振るもの(SD1、SD4、SD10)がある。そして東西方向の溝がより新しい。溝の時期であるが、溝SD1は8世紀前半から中頃(平城Ⅱ併行期)、溝SD10は飛鳥時代(飛鳥Ⅲ期)、溝SD8は中世(鎌倉時代)のものである。その他の溝は遺物が見られなかったり、非常に少なく明確ではない。

中世の溝SD8以外の溝はすべて飛鳥時代から奈良時代に属する。また、いずれの溝も残存の深さは0.1mから0.02mと非常に浅い。道路の側溝と考えられるものはない。その他の浅い皿状および箱形のもの(SD3、SD6、SD7、SD8、SD9)は、畑の畝形成にともなうものであろう。

柱穴は円形のもの、楕円形のもの、隅丸方形のものがある。調査区が狭く、建物や欄柵等の抽出はできなかった。楕円形の柱穴SP12、柱穴SP15などは残存状態もよく、時期のわかる須恵器蓋が出土した。柱穴SP12は奈良時代前半の、柱穴SP15は飛鳥時代の須恵器蓋であるが、1点ずつであり、これをもって正確な時期は言えない。柱穴群全体で、飛鳥時代(飛鳥Ⅲ併行期)から奈良時代(平城Ⅱ併行期)にかけてのものとしておきたい。

久々相遺跡のこれまでの主な成果とともに、久々相遺跡の北側に広がる修理式遺跡の調査成果も重要である。この遺跡では、第10次調査において、東一坊大路と交差する大路級幅の道路側溝が検出された。^(注7)北一条大路とこの大路級の道路との間を8町分で割り付けた復元案も提示されている。^(注8)しかしながら、今回の調査成果は飛鳥時代から奈良時代の溝および柱穴群の検出であり、長岡京期以前のものといえる。条坊の側溝と考えられる出土遺物をともなう深い溝は検出できなかった。今回の調査成果は、長岡京期以前の土地利用のあり方を考えていく一材料となろう。

- 注1 國下多美樹2003「久々相遺跡第1次(7AKBK地区)～久々相遺跡南部～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書第60集 久々相遺跡・中海道遺跡』財団法人向日市埋蔵文化財センター
- 注2 中島信視2000「久々相遺跡第4次調査(7AKBU地区)～久々相遺跡中央部～」『財団法人向日市埋蔵文化財センター年報 都城11』財団法人向日市埋蔵文化財センター
- 注3 梅本康広2000「久々相第5次(7AKBU—2地区)～久々相遺跡北部～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書 第50集』財団法人向日市埋蔵文化財センター
- 注4 梅本康広2006「久々相遺跡第6次(7AKBU—3地区)～久々相遺跡北部～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書第70集 久々相遺跡・修理式遺跡・南条遺跡』財団法人向日市埋蔵文化財センター
- 注5 中塚良ほか2002「久々相遺跡遺跡第7次(7AKBYT地区)～久々相遺跡西縁、長岡宮「北苑」～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書第57集 長岡京跡・久々相遺跡』財団法人向日市埋蔵文化財センター
- 注6 梅本康広2004「久々相遺跡第10・11次」『向日市埋蔵文化財調査報告書第62集(第3分冊)』財団法人向日市埋蔵文化財センター
- 注7 梅本康広2006「修理式遺跡第10次(3NSBTD地区)～修理式遺跡北部～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書 第71集』財団法人向日市埋蔵文化財センター
- 注8 梅本康広2014「長岡京の条坊施工範囲と造営計画」『平成24年度公益財団法人向日市埋蔵文化財センター 年報 都城25』公益財団法人向日市埋蔵文化財センター

付表1 久々相道跡遺物観察表

報告 番号	遺構	器種	器形	口径	器高	残存率	胎土	焼成	色調	外面
1	SD1	須恵器	蓋	108	(20)	11/12	密	堅緻	明青灰色 5PB7/1	外面回転ケズリ、回転ナデ。 内面回転ナデ
2	SD1	須恵器	蓋	159	19	6/12	密	堅緻	灰白色 N7/0	外面回転ケズリ、回転ナデ。 内面回転ナデ
3	SD1	須恵器	蓋	172	21	7/12	密	堅緻	灰白色 N7/0	外面回転ケズリ、回転ナデ。 内面回転ナデ
4	SD1	須恵器	蓋	165	27	4/12	密	軟	灰色 5Y5/1	外面回転ケズリ、回転ナデ。 内面回転ナデ
5	SD1	須恵器	蓋	164	28	□ 3/12	密	堅緻	灰白色 N7/0	外面回転ケズリ、回転ナデ。 内面回転ナデ
6	SD1	須恵器	蓋	157	23	□ 3/12	密	やや軟	明青灰色 5PB7/1	外面回転ケズリ、回転ナデ。 内面回転ナデ
7	SD1	須恵器	蓋	161	(21)	□ 3/12	密	堅緻	明青灰色 5PB7/1	外面回転ケズリ、回転ナデ。 内面回転ナデ
8	SD1	須恵器	杯	底) 11.8	3.4	底) 7/12	密	堅緻	明青灰色 5PB7/1	回転ナデ
9	SD1	須恵器	杯	底) 15.5	4.1	□ 2/12	密	堅緻	灰白色 N7/0	回転ナデ
10	SD1	須恵器	杯	底) 11.8	(1.7)	底) 10/12	密	堅緻	灰白色 N7/0	回転ナデ
11	SD1	須恵器	杯	底) 11.4	(2.1)	底) 3/12	密	堅緻	灰白色 N7/0	回転ナデ
12	SD1	須恵器	杯	底) 10.5	(1.6)	底) 12/12	密	堅緻	明青灰色 5PB7/1	回転ナデ
13	SD1	須恵器	杯	底) 9.7	(2.1)	底) 4/12	密	堅緻	灰色 N6/0	回転ナデ
14	SD1	須恵器	杯	底) 15.1	4.4	□ 2/12	密	堅緻	灰白色 N7/0	回転ナデ
15	SD1	須恵器	杯	底) 13.6	3.5	10/12	密	やや軟	灰白色 N7/0	回転ナデ
16	SD1	須恵器	杯	底) 12.0	3.6	底) 6/12	密	堅緻	明青灰色 5PB7/1	回転ナデ
17	SD1	須恵器	杯	底) 12.1	3.9	8/12	密	堅緻	青灰色 5PB6/1	回転ナデ
18	SD1	須恵器	杯	底) 12.6	3.6	9/12	やや粗	良	灰色 N6/0	回転ナデ
19	SD1 下層	須恵器	杯	底) 12.4	(3.8)	□ 3/12	やや粗	良	灰色 N6/0	回転ナデ
20	SD1	須恵器	杯	底) 13.4	3.8	□ 5/12	密	やや軟	灰白色 N7/0	回転ナデ
21	SD1	須恵器	杯	底) 14.2	3.8	□ 5/12	密	堅緻	明青灰色 5PB7/1	回転ナデ
22	SD1	須恵器	杯	底) 9.4	(2.5)	底) 4/12	やや粗	良	灰白色 N7/0	回転ナデ
23	SD1	須恵器	杯	底) 12.4	(3.0)	□ 2/12	密	堅緻	明青灰色 5PB7/1	回転ナデ
24	SD1	須恵器	杯	底) 12.2	(3.4)	□ 2/12	やや粗	良	青灰色 5PB6/1	回転ナデ
25	SD1 下層	須恵器	杯	底) 13.7	(3.6)	□ 1/12	密	堅緻	灰白色 N8/0	回転ナデ
26	SD1	須恵器	鉢	底) 14.3	(4.8)	□ 3/12	密	堅緻	灰白色 N7/0	外面回転ケズリ、回転ナデ。 内面回転ナデ
27	SD1	須恵器	壺	底) 16.0	(2.8)	□ 2/12	密	堅緻	灰白色 N7/0	回転ナデ
28	SD1	須恵器	壺	底) 10.4	(7.2)	底) 6/12	密	堅緻	灰色 N4/0	回転ナデ
29	SD1	須恵器	壺	底) 12.5	(6.3)	底) 1/12	密	堅緻	灰白色 N7/0	回転ナデ
30	SD1	土師器	甕	底) 13.5	(4.9)	□ 1/12	粗	良	にぶい褐色 7.5YR6/3 ナデ	
31	SD1	須恵器	壺	底) 39.0	(5.0)	1/12	密	堅緻	灰白色 N7/0	回転ナデ
32	SD1	須恵器	甕	底) 28.0	(3.4)	□ 1/12	密	堅緻	灰白色 N7/0	
33	SD1	須恵器	鉢	底) 24.7	(6.4)	□ 1/12	密	良	灰白色 N7/0	
34	SD1		平瓦				粗	良	灰色 N5/0	横目 布目
35	SD6	須恵器	壺	底) 16.0	(1.7)	□ 1/12	密	堅緻	黄灰色 2.5Y5/1	回転ナデ
36	SD6	須恵器	杯	底) 11.6	(2.2)	底) 2/12	密	良	灰白色 N7/0	回転ナデ
37	SD10	須恵器	蓋	底) 14.1	(1.5)	□ 1/12	密	堅緻	灰白色 N7/0	回転ナデ
38	SD9	須恵器	甕	底) 31.7	(2.3)	□ 1/12	密	堅緻	灰白色 N7/0	回転ナデ
39	SP12	須恵器	蓋	底) 16.7	(1.1)	□ 3/12	密	堅緻	灰白色 N7/0	外面回転ケズリ、回転ナデ。 内面回転ナデ
40	SP15	須恵器	蓋	底) 12.2	(2.8)	□ 2/12	密	堅緻	灰白色 N8/0	外面回転ケズリ、回転ナデ。 内面回転ナデ
41	SP16	土師器		底) 10.0	(3.4)	底) 3/12	密	軟	灰白色 5YR8/1	
42	柱穴面	須恵器	蓋	底) 10.4	(1.8)	□ 1/12	密	良	灰白色 N7/0	回転ナデ
43	柱穴面	須恵器	鉢	底) 7.0	(4.0)	底) 1/12	やや粗	良	灰色 N6/0	回転ナデ
44	柱穴面	須恵器	甕	底) 4.5	(4.5)	□ 1/12	密	良	灰色 N6/0	

圖 版

(1) 調査前全景(南西から)



(2) トレンチ掘削状況(北東から)



(3) 第1～3グリッド調査状況
(北東から)





(1) 第1グリッド中世遺構面
(北東から)



(2) 第1グリッド第7層
遺物出土状況 (北東から)



(3) 第1グリッド下層調査
(南東から)

(1) 第1-2グリッド調査状況
(南東から)



(2) 第2グリッド中世遺構面
(北東から)



(3) 第2グリッド下層調査
(北東から)





(1) 第2-2グリッド調査状況
(南西から)



(2) 第3グリッド中世遺構面
(北東から)



(3) 第3グリッド北東壁面東端部
(北東から)

(1) 第3グリッド下層調査
(北東から)



(2) 第3グリッド第7層
遺物出土状況 (北東から)



(3) 第4グリッド中世遺構面
(南東から)





(1) 第4グリッド南西壁面
(北東から)



(2) 第4グリッド下層調査
(南東から)



(3) 第4-2グリッド中世遺構面
(南東から)

(1) 第5グリッド下層調査
(北東から)



(2) 第6グリッド下層調査
(北東から)



(3) 第7グリッド下層調査
(北東から)





6



11



44



42



48



36



14



69



69

(1) 第15次調査地調査前全景
(南部、北から)



(2) 第15次調査第1トレンチ全景
(北から)



(3) 第15次調査第2トレンチ全景
(北から)





(1) 第15次調査第3トレンチ全景
(南から)



(2) 第15次調査第4トレンチ全景
(北から)



(3) 第15次調査第5トレンチ全景
(北から)

(1) 第15次調査第6トレンチ全景
(南東から)



(2) 第15次調査第7トレンチ全景
(北から)



(3) 第15次調査第8トレンチ
西壁土層断面(東から)





(1)第16次調査第1区全景(空中写真、上が南西)



(2)第16次調査第1・2区全景(空中写真、北から)



(1) 第16次調査調査前状況(東から)



(2) 第16次調査第1区南半遺構
検出状況(南東から)



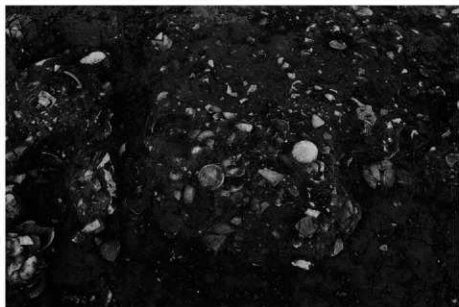
(3) 第16次調査第1区
竪穴建物SH1(南から)



(1) 第16次調査第1区掘立柱建物
SB6(南から)



(2) 第16次調査第1区溝SD3
(南東から)



(3) 第16次調査第1区溝SD3 1区
土器出土状況(南西から)

(1) 第16次調査第1区溝S D 3
掘削状況(南東から)



(2) 第16次調査第1区溝S D 3
畦1断面(南から)



(3) 第16次調査第1区溝S D 3
5区土器出土状況(南西から)





(1) 第16次調査第1区土坑SK7
(南東から)



(2) 第16次調査第2区全景(東から)



(3) 第16次調査第2区
竪穴建物SH11(南東から)

(1) 第18次調査調査前状況
(南東から)



(2) 第18次調査第3区掘削状況
(南東から)



(3) 第18次調査第3区北東部
遺構検出状況(北西から)





(1) 第18次調査第3区堅穴建物
SH10(北西から)



(2) 第18次調査第3区土坑SK1
(北東から)



(3) 第18次調査第3区柱穴群
(北西から)



7



30



10



31



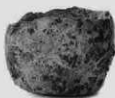
33



15



39



29



44



45



54



58



61



77



63



78



64



78



69



83



86



85



87



85



87



91



95



97



100



102



103



103



107



102



107



108



116



108



116



109



121



111



126



121



128



130



135



140



138



140



138



182



183



152



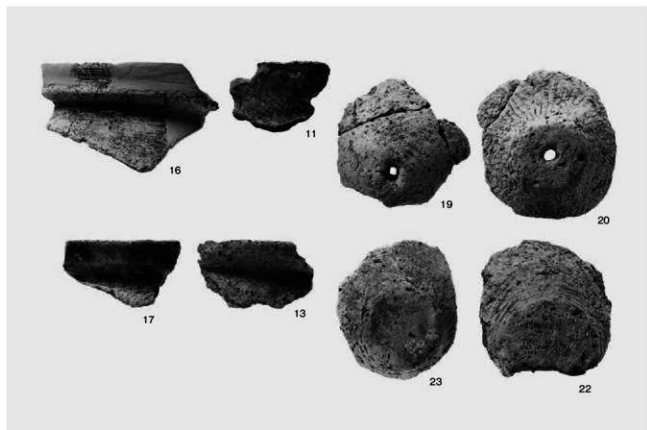
153



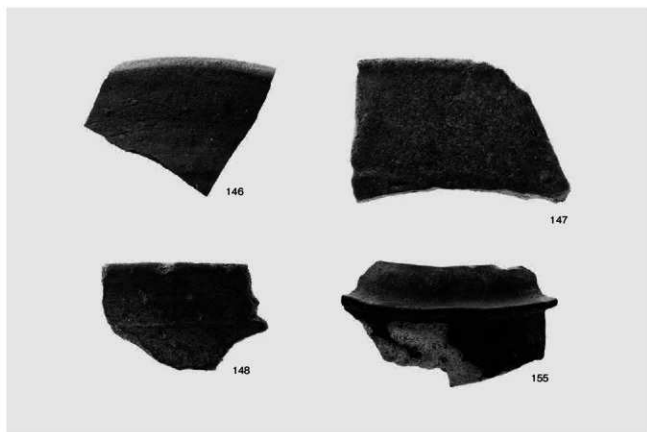
184



235



(1)出土遺物 6



(2)出土遺物 7



166



165



164



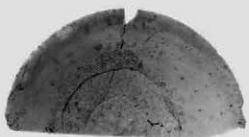
163



180



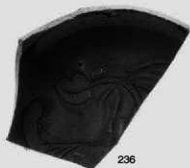
168



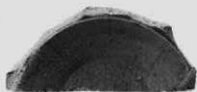
169



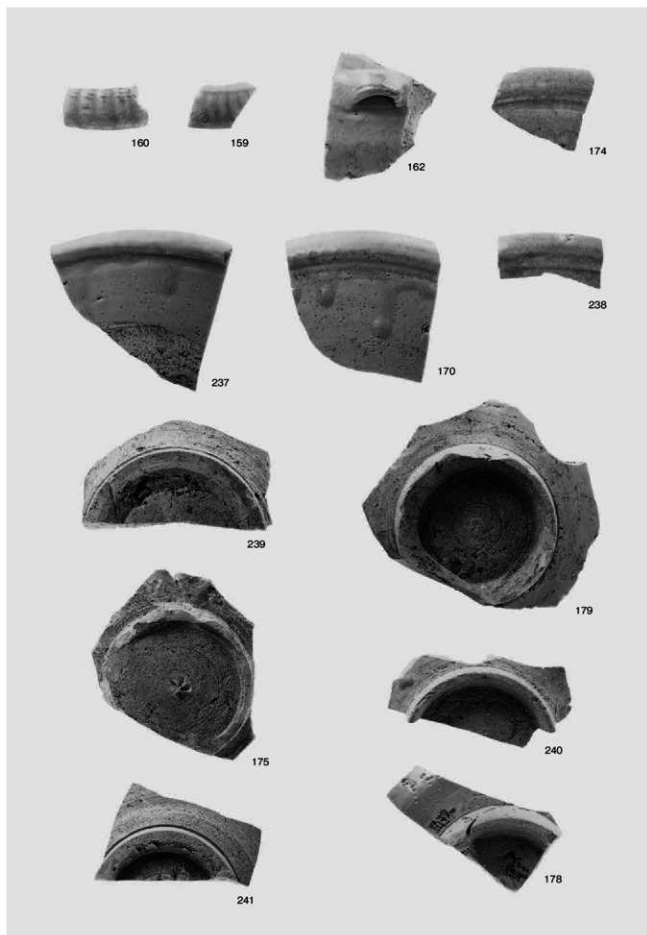
167

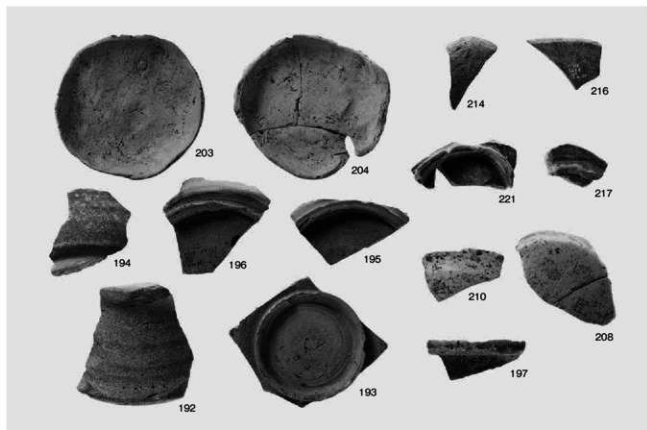


236

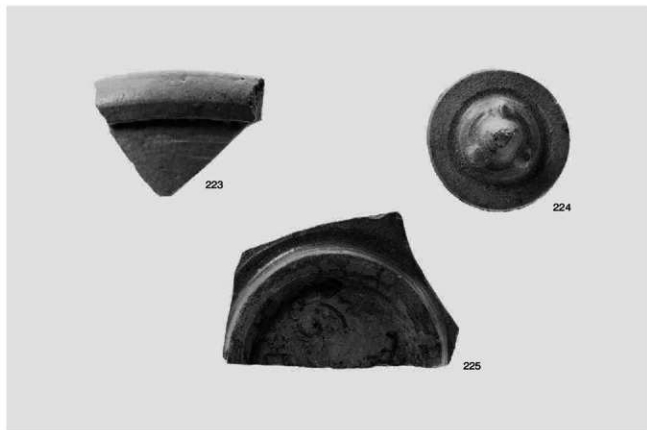


176

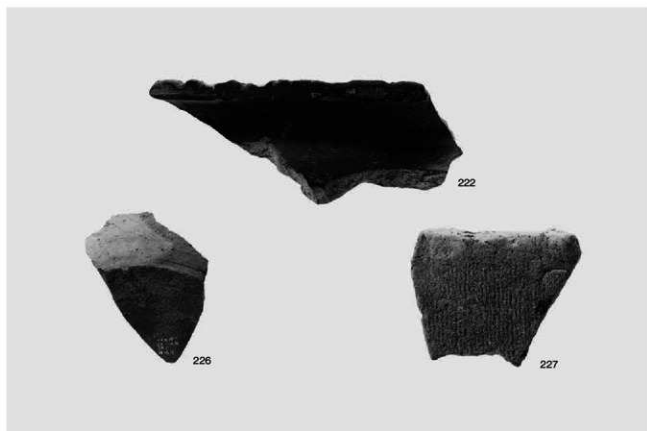




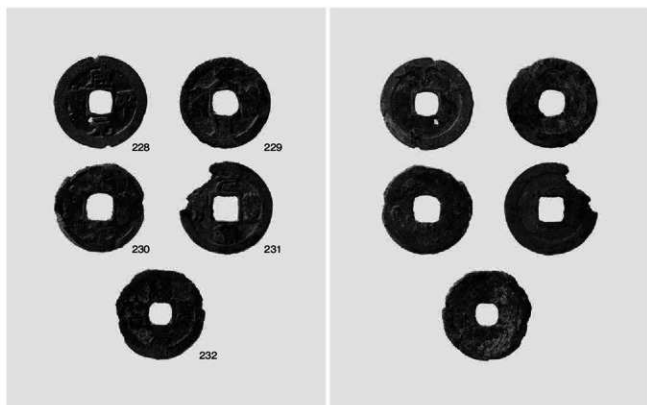
(1)出土遺物10



(2)出土遺物11



(1)出土遺物12



(2)出土遺物13



(1) 調査地北部掘削前状況(南から)



(2) 調査地中間～南部掘削前状況
(北から)



(3) 調査掘削中
(北部より溝を検出、北から)



(1) 調査区全景(南から)



(2) 柱穴群検出状況(南から)

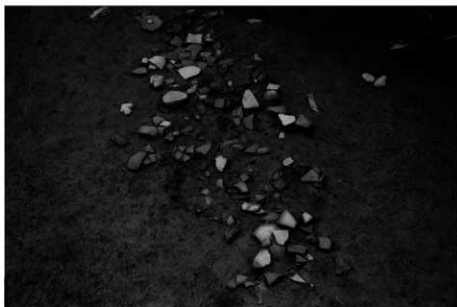


(3) 溝SD1・3～10検出状況
(北から)

(1) 溝 S D 1 (北から)



(2) 溝 S D 1 土器出土状況
(北東から)



(3) 溝 S D 3 (東から)





(1) 溝SD4他(南東から)



(2) 溝SD5他(東から)



(3) 溝SD6(東から)

(1) 溝S D 7 (東から)



(2) 溝S D 10 (南東から)



(3) 溝S D 10埋め土西壁断面
(南東から)





(1) 柱穴P12・柱穴P15他
(北東から)

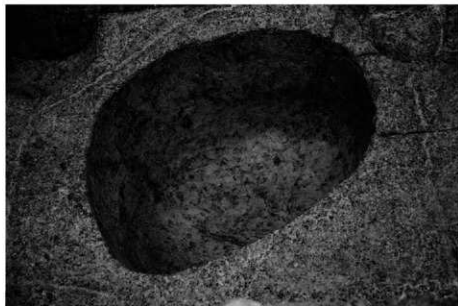


(2) 柱穴P12(東から)



(3) 柱穴P15四分割状況(東から)

(1) 柱穴 P 12 完掘状況(東から)

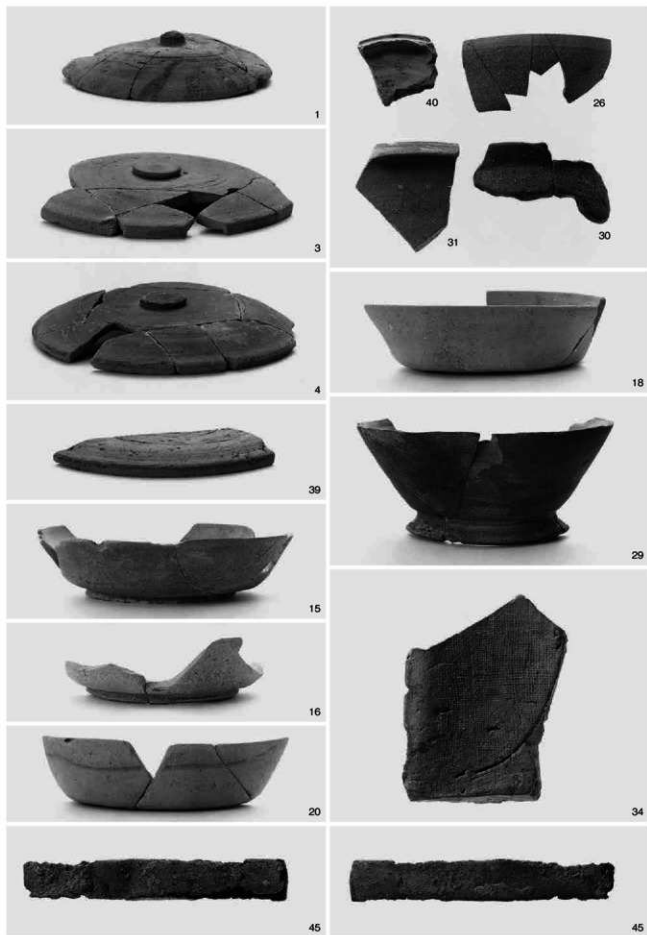


(2) 中間部砂礫堆積状況(北から)



(3) 調査完了状況(北から)





報告書抄録

ふりがな	きょうとふいせきちょうさほうこくしゅう
書名	京都府遺跡調査報告集
副書名	
巻次	第166冊
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第166冊
編著者名	竹原一彦・黒坪一樹・高野陽子・武本典子・有井広幸・菅博絵
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番#3 Tel. 075(933) 3877
発行年月日	西暦2016年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				m	
やまだくろだいいせきだいいじ	よさぐんよこのちょうかみやまだ							
山田黒田遺跡第4次	与謝郡与謝野町下山田	26465	09	35° 32' 24"	135° 07' 05"	20150721 ～ 20150826	53	道路建設
いずもいせきだいいじゅうご・じゅうろく・じゅうはちじ	かめおかしちとせちょうちとせほか							
出雲遺跡第15・16・18次	亀岡市千歳町千歳他	26206	112	35° 03' 38"	35° 34' 29"	20121108 ～ 20121221 20130705 ～ 20131016 20140519 ～ 20140710	300 1,000 400	道路建設
くぐそういせきだいいじゅうにじ	むこうしてらどちょうくぐそう							
久々相遺跡第12次	向日市寺戸町久々相	26208	67	35° 06' 16"	135° 28' 11"	20150123 ～ 20150305	160	道路拡幅

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山田黒田遺跡第4次	集落	弥生～平安	柱穴・土坑	須恵器・土師器	
出雲遺跡第15・16・18次	集落	弥生	土坑	弥生土器	
		古墳	竪穴建物跡・土坑	石器・土師器	
		平安	掘立柱建物跡・土坑	須恵器・土師器・瓦器	
		中世	溝・土坑	須恵器・土師器・瓦器・瓦質陶器・山茶碗・緑釉陶器・灰釉陶器・中国製陶磁器・布目瓦	
久々相遺跡第12次	官衙 集落	飛鳥	溝	須恵器・板状銅製品	
		奈良～平安	溝・柱穴	須恵器・土師器	
		鎌倉	溝	須恵器・土師器・製塩土器・瓦器	

所収遺跡名	要 約
山田黒田遺跡第4次	今回の調査は、山田黒田遺跡のほぼ中央部に位置する。段丘裾部に位置する府道沿いに調査グリッドを連続する小規模調査となった。平安時代の遺構面上で柱穴3土坑1を確認した。下層には弥生時代中期から古墳時代前期の土器を包含する砂層の堆積が確認された。包含層内の遺物は段丘間からの2次堆積と判断した。
出雲遺跡第15・16・18次	平成23・24・25年度3か年にわたって農道整備事業として実施。15次調査では調査対象地全長700mに8か所のトレンチを配置し、16次で2か所計1,000m、18次で1か所400mを調査した。遺構は、弥生時代後期から平安時代にかけて検出され、弥生時代後期の土坑等2、古墳時代前期竪穴建物1・土坑2、古墳時代中期竪穴建物2、平安時代総柱掘立柱建物1・柱穴群・区画溝1ほかを確認した。出土遺物は、弥生時代後期土器、古墳時代前期から中期にかけての土師器、古墳時代中期須恵器・生駒西麓産等搬入系土器、平安時代後期土師器皿、瓦器椀皿、瓦質陶器、中国製陶磁器、山茶碗他布目平瓦、北宋銭等が出土している。平安時代末の区画溝は、多数の瓦器椀や中国製陶磁器等多様な遺物が出土しており、遺跡の性格が目される。
久々相遺跡第12次	今回の調査は、府道拡幅事業に伴い160mを調査した。遺構は東西方向溝6条それより古く斜めに方向を振る溝3条、柱穴群を検出した。時期は飛鳥時代から鎌倉時代にかけているが、ほとんどが長岡京期以前の遺構であり、条坊側溝に類するものは確認していない。遺物は、飛鳥時代から中世にかけての須恵器が多く、土師器、板状銅製品が出土している。今回は、長岡京期以前の遺構が多く確認された点特徴である。

京都府遺跡調査報告集 第166冊

平成28年3月31日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社
〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961 Fax (075)231-7141